
アカシックドミネーター

丸尾 ナオキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アカシックドミニネーター

【NZコード】

N9899W

【作者名】

丸尾 ナオキ

【あらすじ】

新作MMORPG「アカシックドミニネーター」。クエスト達成者には賞金まで付けられて一躍その知名度を上げるが、ゲームにはとんでもない呪いがかけられていた！呪いのキャンペーン終了まで2週間。普通の大学生（ゲーム内では魔法使いの少女）の主人公は果たして生き延びることが出来るのか！？（ファンタジーかつライトホラーなお話です。短めのストーリーですが、ご感想や誤字脱字の指摘大歓迎です）

オープニングは大事ですね

「デュラハンだ！」

「後ろからとかそんなのアリかよ！？」

水滴と僅かな足音のみが響いて響いていた洞窟に突如として、不気味な轟音が鳴り響く。病的なまでに逞しい体と、不気味な黒い目を響かせる黒毛の馬に股がる、禍々しい装飾の鎧を着込んだ騎士。手に構えるランスは真っ赤に染まっており、これまで数多の侵入者を仕留めて来たという勲章になっていた。全長3mはあるつかと言う巨大な悪魔に立ち向かうのは小さな4人の戦士達。

かち合つ金属音、所々に飛び交う火柱。彼らは一步も引くことが無かつた、やがて火柱が馬の足元を掠め、僅かにバランスを崩した所を、戦士の剣が彼の者の首を貫く。唸り声を上げながらランスを振り回すが、その腕ももう一人の戦士に斬り落とされる。

「止めだ！」

戦士が首に斬りつけた剣を振り上げもう一度、首に斬りつける。今度は首が跳ね飛び軽い金属音を鳴らしながら地面を転がりまわる。

「よしー！」

「よし、じゃない！ シエル、首を逃がすなー！」

「わかってるよー フレイムレーザーー！」

それまで後方から援護していた、一回り小さい人間の杖からより収束した熱線が放たれる。その光線は転がった首を逃がすことなく捉え、すぐに鉄の兜を赤白く染め上げる。やがて物々しい断末魔が響き渡り、洞窟内に再び静寂が訪れた。

「まったく……デュラハンは元々首が取れてるもんですよ？」

「ありや、そうだったの？ 恥ずかしい。『止めだー！』なんて」

若い男戦士は笑いながら剣の血を拭く。

隣にいた法衣に身を包んだ男が何やら呪文を唱えると、仲間の擦り傷はみるみる塞がっていく。

「よし！ 特に被害も無いし、再度出発だ！」

地底深くに眠るお宝を求めて、命知らずの4人の冒険者は今日も行く。

陽気な性格のリーダー、戦士YASU。

チーム1の力持ちながら癒し系でもある、獣戦士PON太。

貴重な回復役でチームのブレイン的存在、僧侶まるちー。

そして、パーティの可愛らしい紅一点、魔法少女シエル。

今日も四人は命がけの探索を行つていた。でも、もうこんなの慣れっこだ。みんながこの状況を楽しんでいる。まるで死の淵こそが生の充足を満たすと言いたげに。冒険者とはこうでなくてはやってられないのだ。

たつた、一人を除いて。

「上からだYASUううーつ……」

少女の甲高い絶叫が洞窟に響き渡る。YASUは瞬時に右方に飛びのき、その斬撃をすんでのところでかわす。長い爪を持つた不気味な魔物は、口惜しそうに仕留め損ねた獲物を睨んでいた。

「いてて… 助かつたぜ、シエル」

「今度は上からガーゴイルか！ 向こうも頭使つて来てるよ！」

「流石に深層は手強いモンスターが多いですね」

冒険者たちは笑う。強敵を前にして、その状況を楽しむ。

「みんな！ 油断しないで！ 死んだら何にもならないよー。」

一人、少女の悲痛ともいえる声が木霊する。

「怖いのか？ シエル」

「まあ、小さい女の子だし」

「とにかく前衛は任せろ！ シエルは距離を取つて後方から援護を！」

人と魔獣の声が反響し、洞窟の中は一軒修羅場と化す。

「増援だ！」

「ガーゴイルが2、3…4体！？」

次々に表れては容赦なく侵入者に襲いかかる魔物たち。

「シエルさん！ 2人が引き付けているうちに一網打尽に！」

まるちーの言葉に頷き、少女は魔法の詠唱を始める。

(死なせるか…！)

味方は強い。数の多いガーゴイル相手に互角以上に戦っている。しかし敵もやるもので人数差を利用したヒットアンドアウェイの戦法を取り、互いに決定打を打てずにいた。

戦士だけのパーティなら長期戦必至だが、こんな時のための魔法使いなのだ。シエルの詠唱が終わりに近づく、それを確認したまるちーが味方に合図を送る。ガーゴイル達が気づいた時には既に手遅れ。自分達は距離を取つていたつもりだったのだが、実際はその逆。二人の戦士によつて効果範囲内まで完璧におびき寄せられていたのだ。

「ファイヤーウォール！」

ガーゴイル達の周りを文字通り炎の壁が取り囲む。壁は次第に狭

まつて行き、やがてガーゴイル達を包みこむ。

「ギャアアアーツ！」

燃え盛る魔物たちを見て、味方が歓声を上げる。だがシエルは油断することなく、さらに気合を入れて魔力を集中させる。ガーゴイル達は既に動きを止めているが、それでもなお炎は燃え盛るばかりであつた。

「シエルさん。もうその辺で十分です。これ以上は魔力の無駄ですよ」

まるちーの声で我に帰ったシエルは魔力を切る。既に魔物の肉体は存在せず、黒焦げた骨が残っているだけであつた。脂汗をかけて息を荒らげる少女を見てまるちーは心配そうに声をかけた。

「おい！ また増えたよ！」

間髪いれずに叫んだPohn太の剣の先には更なる魔物の群れ。数は10匹… いや、もつといる。

「ここが山場…かな？ シエル、まだ行けるか？」

「大丈夫…！」

飛びかかって来る魔物の先陣に再び一人の戦士が立ち向かう。シエルは今度は一点集中型の魔法の詠唱を始めた。敵がまだ狭い通路にいるうちならこれで一網打尽に出来る。

「くそつ！ 流石にそろそろきついぜ！」

「シエルは？」

少女の周りに大きな魔法陣が完成し、その拡散と共に味方はその場を跳んで離れる。異常に気付いた魔物たちが一斉にシエルに向かって襲いかかる。

(「俺」だつてまだ……死にたくねえんだよ！)

魔物の爪が今にもシエルの腕を斬り裂こうとした時、彼女の杖から鋭い閃光が伸びた。

1話 何となくそのゲームが気になつたんです

大学一年の夏。俺は特に何をするでもなく、だらだらとネット＝昧を続けていた。趣味と言えばせいぜい読書とゲームくらいだが、バイトも特にやつていない俺には自由に使える金はあまりない。で、無料のネットゲばかりやつてしているのだが…

「はあーあ、もうこのゲームも潮時か…」

巷のネットゲはどいつも無料無料と言つているが、本当に楽しみたいのなら課金しようと言う所が大半だ。というか最近のはもはや課金前提のゲームバランスになつてている気がする。たかだか学生の身分の俺にはちと辛い。

…いや、払えない」とも無いんだけど。ネットゲなんて長く保つたとしても精々数年程度。据え置きのゲームに比べて面白いとかと聞かれると首をかしげてしまふようなものに果たして金をつき込んで良いものか。そんな葛藤が常にあった。

結局はいつもほどほどにやつて退会して、また新しいのつてスクルになるんだけどね。その時だつて何気なく広告に目を通してしまつたんだ。

「新世代のネットゲーム『アカシックドミニネーター』？…まあ、いかにも厨臭そうな名前だな。10人協力プレイとか、凄いんだろううけどパソコンのスペック的に大丈夫か？」

最近のは名前すら似ているものが多くて混乱することがある。つか、もうちょっと捻ってくれよ製作者。

『本稼働に先駆けて、応募者の中から抽選で 版をプレイすることができます』って… 要はテストプレーヤーつてことだろ？ ま

つたく、上手い具合に経費削減してますね。まあどうせ暇だし無料だし、一応応募しておきましょ。フリーメールのアドレスだけでいいんなら特に問題なしつと。

3日後。

「メール?『あなたは 版のプレイヤーに選ばれました』って、この前のネトゲのテストプレイの奴か。随分早いんだな」

単に応募者が少なかつただけだつたりして。まあいいか。

さてさて、Webサイトからゲームをダウンロードし、ゲーム開始。

まずはキャラ登録。

性別は… 女で行こう。ネカマ楽しいもんね。名前はシエルつと。女キャラを作るときはいつもこの名前だ。単に語感がいいだけで特に深い意味は無い。

次は職業。

近距離型のファイター。遠距離型のアーチャー。攻撃魔法のソーサラー。回復魔法のプリースト。ここら辺は鉄板か。後はシーフ、ドクター、トレーダー、アルケミスト、クリエイター、ファーマー… なんだこりや。無駄に職業多くないか?

ドラ HとかF みたいにいっぱい職業作りたかったんだろうが、

明らかに地雷臭がしてきたぞ。なんか色々固有スキルとかあるみたいだけど。大体回復役はプリーストがいるのにドクターとかいらないだろ。せめてどっちかにまとうよ。

うーん。どうせテストプレイなんだろ？、適当にソーサラーで。女の子だしな。

アバターは緑髪のおかっぱ頭に、いかにも魔女っぽい帽子と服、そして古びた木の杖を持った少女だ。俺は好みだけど逆にありきたりすぎる気もするなあ。

ゲーム内容はといつて、これもよくある話でまずは冒険者ギルドに登録し、各地のクエストをどんどんこなしていくといったものだ。ゲーム画面は日本人好みの2D。戦闘にはアクション要素があつて、位置取りも重要で戦略的要素が高く、なかなか面白い…のだが、結構難易度が高い。

始めてから2時間。既に3回死んでる。どうやらパーティを組むこと前提のバランスになっているようだ。単に調整できてないだけかもしれないが。

早くもソロプレイに限界を感じた俺は適当なパーティを探すことにした。これがネトゲの醍醐味であり、最も煩わしいところなんだよな。町に戻つてみると早くもパーティ募集のチャットが飛び交っていた。アクション要素が強いとはいえ、感想はみんな同じか。抽選で選んでる割には結構人はいるみたいだな。

どれどれ、お客様の中に私とパーティーを組んでくれる方はいらっしゃいませんかー？出来ればファイターの方ー

うん。なんだかんだで楽しんでいたんだよ。この時は。

2話 結構面白かったんですよ

まるちー「すまん、俺は明日早いからそろそろ抜けるわー」

YASU「おう、お疲れー」

シエル「回復役が抜けるときついね。今日は解散にする?」

Pon太「うん、そうじよー」

版の稼働から一週間。俺達は主に4人でパーティーを組んでいた。まだ少しあやつていながパーティーバランスは割といいと思う。

まるちーはプリーストで貴重な回復役なのだが、リアル社会人っぽく結構早い時間に抜けることが多い。

YASUはリーダ格のファイター。ネット上だというのに細かい気配りが出来る人で、最初に俺をパーティに誘ってくれたのもこの人だ。

Pon太も同じくファイターなのだが、彼(女?)は何故かアバターが獣人になっている。何か弄ったとかではなく最初からそうだったらしい。どうやらこのゲームでは初期アバターはランダムに決定されるみたいだ。今のところ変更できる機能はない。おそらく正式稼働版で課金することで色々弄れるようになるってところだろう。最後に、画面上は紅一点のソーサラー、シエル。つまり俺。中身は男つて… 薄々みんな勘付いてるだろーな。

YASU「じゃあ自分も今日は抜けますね。それでは」

Pon太「シエルさんはどうする?」

シエル「私はしばらく個人ショップを見て回ります」

個人ショップというのは、他のプレイヤーに自分の武器や道具を自由に売ることのできる機能だ。時々クエスト用の重要なアイテムまで売つてたりするので意外と侮れない。

Pon太「そうかー。僕の友達が新しく始めたんで、今度暇があったらこっちのパーティーにも来てくれないかな?」

シエル「まだ募集やつてたんですねか? テストプレイみたいなものなのに」

Pon太「そう言えばそうだよねー 抽選つて言つてる割にはどなたでもウェルカムつて感じ」

シエル「運営のことですからよく分かりませんね」

Pon太「シエルさんは、本稼働になつても続けるつもり?」

シエル「課金しないと詰まるといったことが無い限りは」

Pon太「実は版からのプレイヤーは本稼働時に色々特典があるらしいよ。特殊クエストとかもあるみたい」

シエル「それは初耳ですね」

P o n 太「僕もまた聞きしただけなんだけね。それじゃ、仲間から呼び出しかかってるから。時間あつたらよろしく！」

シエル「はい、それじゃまた」

テストプレイの方には色々特典ね……まあ別にそこまで珍しいことでもないだろうけど。初めて聞いた情報ではある。攻略サイトや某巨大掲示板もよくチェックしてるけど見たこと無かつたし。今夜中にでも出るのかな？

それからしばらく俺は個人ショップを見て回っていた。その中でちょうどクエスト達成に必要なアイテムである精霊石がまとめ売りされていたので、それを見て悩んでいた。

くそ、俺が欲しいのは後8個なんだ。20個でまとめ売りなんて残酷すぎる。精霊石が取れるダンジョンは魔法耐性が高い敵ばかりだから、単騎だと余裕で全滅の恐れがある。個人のクエストのために他の人を連れ回すのは申し訳ないし。

5000G…高いなあ。これは完全に俺達ソーサラーの足元を見ていやがる。とかか金が足りない。あと943G足りない。今から単騎駆けしてくるか？でも一人でクリアできる程度のダンジョンじゃ、金溜めんのにどれだけ時間がかかることやら……ちくしょー

ん？ おっと、チャット「ホールだ。

G i l l y 「ちょっとといいかな？ 今、時間ある？」

シエル「はい、大丈夫ですけど。どうしました？」

G i l l y さん…？ 見た所職業はシーフか、珍しいな。

早いうちに出来た攻略サイトを色々見て回っているが、このゲームは鉄板の職業、つまりファイター、アーチャー、ソーサラー、プリーストの4職以外は初心者は手を出さない方が無難とまで書かれてある。

理由は戦闘能力がこの4種に比べて圧倒的に低いこと。初期段階の固有スキルは見たところ面白そうなのが揃っているのだが、それとともに使いこなせるレベルになるまでが大変らしい。前半はともかく、中盤以降は戦闘面で完全にお荷物になるため、転職システムが後に実装されるであろう…といつ期待まで書いてある始末。シーフも素早さは高いが攻撃力が低過ぎて敵が倒せない、との悲痛な叫びが掲示板に書かれてあつた。実際、ゲーム上でもこの鉄板4種以外の職業はほとんど見かけない。

Gilly「ちょっと協力してほしいクエストがあるんだけど。いかな?」

シエル「私に出来ることでしたら、内容にもりますけど

Gilly「これなんだけど」

そう言って彼が掲示したクエストを見て俺は自分の目を疑つた。だが、この時のGillyさんとの出会いが後の俺の運命を決定づけたと言つても過言ではない。

3話 それはある意味運命の出来事でした

【クエスト】

『サンマイト遺跡深層（地下50F）にある「ミコールの赤石」をゲットせよ！』

（攻略のヒント）

「ミコールの赤石」の前には強力なボス、ワイバーンが立ちはだかる。炎耐性の装備は必須だろ？ また40Fに続いて状態異常攻撃を仕掛けてくる敵も多いので要注意だ！

シェル「いや、無理ですってこれ！ 私全然レベル足りてませんから…」

サンマイト遺跡といつのは割と序盤からお世話になるダンジョンだ。俺も何度も通ったことがある。遺跡自体は果てしなく下の階層まで続いているらしく、レベル＝攻略出来る階層というのが今のところ知られている大体のバランスである。

ちなみに今の俺のレベルは16。この前パーティー4人の力を合わせて何とか20Fのボスを倒して、みんなで画面越しに祝杯をあげたばかりだ。うん、50Fとか普通に考えて無理。

そう言うG.I.I.L.Yさんのレベルは…31。俺よりはやりこんでいるみたいだが、それでも全然足りない。ましてや戦闘能力の低いシーフでは。むしろよくここまで育てたものだ。

シエル「他にレベル高い方がパーティーにいらっしゃるんですか？」

G·i·l·l·y「いや、俺一人。ちょうど単騎のソーサラーを探してた
とい」

シエル「どう考へてもクリアできる気がしないんですけど。遺跡5
0F制覇とか、掲示板で普通に出来るのはレベルですよ？」

G·i·l·l·y「まあ聞けよ。まともにはクリアしないし、ワイバーン
とやらと戦う必要もない」

彼の戦略はこうだ。シーフの特殊スキル「戦闘回避」を駆使して、
ミコールの赤石だけ取つて帰る… というものの。なるほど、確かに
クリア条件は「赤石の獲得」だから、無理してボスと戦う必要も無
いということだ。彼はこの方法を駆使して既に40Fまでは単騎で
クリアしたらしい。クエスト達成でボーナス経験値を獲得できるか
ら、彼のレベルはそれで上がったものだろう。すげえ、本当の話な
らもはやプロの領域。ボス回避なんて誰が考え付くんだ。

シエル「それに何で私が必要なんですか？」

G·i·l·l·y「流石に50Fともなってくると、戦闘回避だけではき
つくてな。搅乱要因を探していたとこ」

シエル「搅乱、ですか」

G·i·l·l·y「ああ、まだ稼働したてだからレベル50近い奴なんて

ほとんどいないし

シエル「いなーことはないでしょうけど」

G.i.l.l.y「シーフは戦闘ではつきり言つて足手まといにしかならないからな。パーティに加えてくれる奴がいないんだよ」

確かに、シーフは攻撃力低いし、他に戦闘に役に立つような能力は見つかっていない。レベル30まで上げた彼の言の限りではおそらく存在すらしないのだろう。初期の特殊能力『鍵開け』は一見魅力的だが、鍵のかかった宝箱はあまり見かけないし、入っている物も（序盤のダンジョンでは）そこまで大した代物ではない。

なので掲示板でもボロクソに言っていたのだが……なるほど、単騎での低レベル攻略向けの職業だったのか。パイオニアマジパネエツす。

シエル「でも攬乱つて…できますかね？」

G.i.l.l.y「そのレベルだともつ広範囲魔法は覚えてるだろ？ だったら大丈夫。作戦はちゃんと練つてある。なあに、失敗しても経験値がちょっと減るだけ。成功したら互いにガッポリだ。悪くない話だろ？」

流石は盗賊。口も上手い。このゲームの序盤はパーティを組んでないとほとんど死にゲーとまで言われるバランスだったため、いまさらクエスト失敗なんて氣にもならないし。

シエル「わかりました。協力しましょう。今からでも行くんですか？」

Gilly「おう。助かったぜ！ そんじゃ準備が出来たらすぐにでも遺跡の前に来てくれ。それとアイテム欄は可能な限り空けて置いてくれよ。回復アイテムもいらないぞ。どうせ敵の攻撃くらつたら即死だしな！」

なんと物騒な。だが、これはこれで楽しくなってきたぞ。

俺の頭の中で若かりし頃の記憶が蘇つて来る。小さい頃はレベル上げとか面倒くさくて、とにかく無闇に突撃していたものだ。低レベルでのギリギリのボス戦。あれこそが本来のRPGの楽しみではなかつたろうか。最近はちょっと詰まると攻略サイトに頼つたりして…今思えば本当に損してるよなあ。先が見えない展開を開拓するのがゲームの楽しみだろ？に。ネタバレされると面白さは半減、いやそれ以下だ。

だからこそ、彼の話に乗つてみたくなったのだ。まだ日本中の誰もが知らない作戦。提案した本人も知らない成功率。少なくとも何度かは失敗しているみたいだし。これから一人で新しい遊びを開拓していくのだ。

くう～ たまらない。男の子だねえ！（アバターは幼女だけど）
これぞRPG！ これぞゲーム！ アイテム整理をしながら俺のテンションはかなり上がつていた。

ほんと一人暮らしで良かつたと思つ。

3話 それはある意味運命の出来事でした（後書き）

一話当たりの字数の乱れは自重しません

4話 でも何事の中の席を知つました（前書き）

文字数が前回の倍だなんてよくある話です

4話 でも同時に世の中の怖さを知りました

俺は不要アイテムを売つぱらい、彼の言つた通り可能な限りアイテム欄を空けて来た。ソーサラーは元々あまり荷物持てないけど。もう午前1時半過ぎだと言うのに、遺跡の前には結構人がいた。レベル30越えの人は結構いるんだな。40過ぎもちょくちょく見る。いや~みんない感じに廃人ですね。

Harida(Lv .42) 「今から40Fに挑むのでパーティー募集中です」

「うへ、どんどん周りに人が集まってる。このゲームのパーティーの最大人数は10人だけ、当初から危惧されていた通りパソコンや通信のスペックが追いつかない人が多いようだ。アクション要素があるだけに戦闘時のラグや回線落ちはかなり痛い。だから普通はみんな4~6人くらいで組んでいる。

ぱる(Lv .38) 「今日こそクリアを目指しましょう!」

レーベン(Lv .40) 「石化回復アイテムたっぷり持つて来ましたよ」

うえー 石化とかあんのかよ。みんなレベル40前後なのにクリア出来てないってどんだけ。あれを本当に単騎で行けんのか?

そう宣うGillyさんはと…いたいた。

Gilly「よしよし。来ててくれたな。アイテム欄はちゃんと空けて来たか?」

シエル「はい、言われたとおりに限界まで減らしました。回復一つ持つません。これって深層アイテムを回収するためですか？」

G·i·l·l·y「いや、悪いがダンジョン内のアイテムは基本全無視で頼む。モンスターに気づかれるし、40F以降はアイテム自体がトラップって時もあるからだ。俺は前々回それでやられた」

シエル「ということは、目標は例の赤石だけですか？」

G·i·l·l·y「ああ、詳しい話は中でしよう」

サンマイト遺跡は10F毎のフロアボスを倒すと、近道が出来るようになっている。つまり20Fのボスを倒したら、一度町に戻つても次は21Fからチャレンジできるということだ。でも次の近道が使えるのは30Fのボスを倒すまで。一回の挑戦ごとに10フロアを突破する必要がある。低層の敵は面倒くさいだけだし、当然ともいえる仕様である。

…うわー 本当に40階までショートカット出来ちゃったよ。マジでここまでクリアしたんだなこの人。

G·i·l·l·y「よし、ここから先は敵と戦おうなんて思ひちやいけない」

シエル「私は4人がかりで20Fがやつとでしたからね」

G·i·l·l·y「パーティーは？」

シエル「ファイター2人にプリースト、それと私。レベルはみんな同じくらいです」

G·i·l·l·y「まあ普通にプレイしたらそんなもんだろうな。俺がシーフの能力に気づいたのもたまたまだし」

シエル「ところでアイテム欄を空けたのは何のためですか？」

G·i·l·l·y「これを持つてほしいからや」

『G·i·l·l·yはシエルに「煙幕花火」を渡した!』

なになに？ これを使うことで一定時間相手の足止めが可能ですか。なるほど、戦闘回避にはもつてこいのアイテムだ。だけどこんなアイテム見たこと無いぞ。店はおろか掲示板にも攻略サイトにも載っていない。

G·i·l·l·y「これは今のところ超レアアイテムだ。悪いが攻略サイトとかにも書かないでくれ」

シエル「何ですか？」

G·i·l·l·y「実はこれ合成で作れるアイテムなんだが、これをつて売つてボロ稼ぎしている奴がいてさ。そいつから口止めされるんだ」

「そういえば職業にクリエイターとかもあつたな。自分と同じことをやりられて、商売敵を作るのを防ぐためか。せこいなー。」

シエル「でも、入る前に渡した方がもつと数持てるんじゃないですか？」

G·i·l·l·y「実は前にこれを持ち逃げされたことがあってだな。あん時は俺もこいつほど怒られたもんだ」

ネトゲだと叫うのに… 恐ろしや。何もネットの世界で盗みなんてしなくても… リアル人生よりかはよっぽどイージーなんだし。

G·i·l·l·y「その後、アサシンスーシ渡されてプレイヤーキラーさせられたからな」

シエル「うわあ…」

このゲームはダンジョン内部ならばプレイヤーキラー（味方殺し）行為も可能だ。ただし一回でもやるとプレイヤーネームが真っ赤に表示され、おまけに掲示板にも危険人物リストとして晒されるので、ほとんどみんなやらない。メリットは他プレイヤーからアイテムを奪えることくらい。とてもじゃないがリターンに対してリスクが大きすぎる。

で、このアサシンスーシ。これも攻略サイトによるとこれも入手を確認したのが数人しかいないほどの超激レアアイテムらしい。装備時に自分のプレイヤーネームと職業を偽装することができ、PK行為をしても名前が赤く染まらないというもののだ。こんなもの作るなんてPK行為を推奨でもしてんのか？ 運営よ。

G·i·l·l·y「それと隠し効果が单なるバグかは解からないが、偽装した名前と同一のプレイヤーがいた時にそいつに罪を被せることが出来る。俺はパクった奴の名前を使って高レベルの味方を後ろから刈りまくつて、そいつをエロと個人情報晒しまで追い込んだ」

怖え。マジで怖え。ネトゲ舐めてました、すみません。

G·i·l·l·y「だからお前もそんな」とは無いようにしてくれよ?
こっちだって好きでやつたわけじゃないんだからな? すぐ後味
悪かつたんだから」

シエル「その話聞いてやる人なんていませんよ……」

G·i·l·l·y「もちろんこの話も他言無用だ」

シエル「当然です」

まさか虚構の世界で世の中の恐ろしさを知ることにならうとは。
この人には大人しく付いていこう。俺は心中で静かに誓った。敵
に回すと恐ろしいが、味方だと頼もしい人だ。多分。

4話 でも同時に世の中の怖さを知りました（後書き）

「煙幕花火」。知っている人は知っているチートアイテムの代名詞。私も昔よくお世話になりました。「アサシンズ�」は今後の展開で重要になります。しかしこんなアイテム作るなんてほんと何考えてんだ運営（笑）

5話 低レベル攻略 それは男のロマン。（前書き）

・シエル（ ）

職業：ソーサラー（ソーサレス）

L V . 1 6 H P 2 1 7 S P 2 5 2

・G i l l y（ ）

職業：シーフ

L V . 3 1 H P 7 7 8 S P 8 7

サンマイト遺跡42Fに生息するモンスターの平均HP： 1000

前後

5話 低レベル攻略 それは男のロマン。

サンマイト遺跡42F

幸いにして未だに敵との交戦を全て避けている。低レベルのソーサラーと「足手まとい」がいるのにG.i.l.l.yさんのルート取りは完全に仕上がっていた。

41Fで煙幕花火を2つ使用。出来れば1つで済ませたかったと言っていたので少し申し訳ない。予定のうちには入っていたようだが。これからは俺もさらに慎重に移動していかなければならない。

ちなみに装備も一部変えられた。まず脚装備を「地下足袋」に。魔女っ子が地下足袋で。防御力も低い序盤も序盤の装備だが、どうやら隠し効果で敵に気づかれにくくなるらしい。一体どうやって気づいたんだ。

そしてアクセサリ装備で「ばつてんマスク」。特に能力値の変化は見当たらず、攻略サイトにも単なるアバター用の装飾装備とされている。だが彼によると、これも敵に気づかれにくくなる特殊効果があるらしい。本当かよ。だからどうやつて知ったんだ。G.i.l.l.yさんでもしかして製作側の人間ですか？

G.i.l.l.y「よし、ここが第一の難関だ」

先を行くG.i.l.l.yさんが足を止めた先には狭い通路。その先にはメデューサっぽいモンスターが寝ている。こちらが下手に近づかない限り目を覚まさないようだが。

G.i.l.l.y「ここは煙幕花火を使っても、先の方まで届かないからな。道が狭いから相手が『詰まって』强行突破も出来ないし。前回

までは最低でも3つ必要だつた

シエル「今回の算段は？」

G.i.l.l.y「フレイムレーザーがあるだろ？ レベル15で覚えるやつ。あれを通路にぶちかましてくれ」

シエル「出来ますけど、その後は？」

G.i.l.l.y「すぐに死角の壁に張り付いてギリギリまでやり過ぎす。気づかれたら俺が煙幕花火を使って強行突破だ。奥にいる奴を限界までおびき寄せようこしたい」

なーる。「フレイムレーザーは詠唱時間が長い割に威力が低いので正直扱いづらかったのだが……そんな使い方もあるのね。

G.i.l.l.y「詠唱が近過ぎても敵は起きるからな……えっと、この位置だ。ここからならギリギリ奥まで届く」

自分の使用キャラでもないのに向けて今まで把握してるんだろうこの人。相当調べこんでいるようだ。

G.i.l.l.y「よし、やつてくれ！」

シエル「了解！」フレイムレーザー！

14！ 9！ 13！ 12！ 14！ 16！

悲しいくらいに非力なダメージ値が画面を埋め尽くす。うん、まともに戦つたらまず勝てません！ 無理です！

目を覚ましたモンスター達が一斉に通路の先の部屋を目がけて飛び込んでくる、部屋の真ん中まで進んで、壁に張り付いている人間を見つけて襲いかかるとした瞬間！

G.i.l.l.y「行くぞ！」

画面一杯に白いスマートフォンが覆いかぶさる。一定時間とはいえ敵も味方も判別が付かなくなる代物だ。俺も感覚を頼りにキャラを動かして通路を進んで行く。途中何度も引つかかりを感じたが、深く考えないようにしよう。狭く長い通路の先は……階段！

G.i.l.l.y「こいつは重畠だ。次もよろしく頼むぜ、相棒！」

シエル「うつす！」

本来ならば次のエリアに進む階段の前には扉があり、敵を全滅させないと開かない、もしくは敵のどれかが鍵を落とす仕組みになっているのだが、そこはシーフの特殊スキル「熟練鍵開け」で突破する。G.i.l.l.y先輩マジパネエっす。

なんだろう、凄い一体感を感じる。今俺達に風が吹いている。確実に。

来てるぜ、コイツは。

画面移動のローディングの合間に（現実世界の）俺は手元のペッシュボトルのお茶を一口含む。キャツ太郎を箸でつまんで口に放り込み、手汗をウェットティッシュで拭つた。

「キてるぜ……」

暗い部屋の中で低く、重く、一言つぶやく。
一人暮らしじゃないとあやうく家族に心配されるといひであった。

5話 低レベル攻略。それは男のロマン。（後書き）

今更気づきましたが、女性はソーサラーではなくソーサレスですね
〇ーＺ

まあ、中身は男なんだしこまけえことはいいんだよー。（汗）

6話 風…なんだらか歌っている確實に…（前書き）

・サイクロンライナー（サイツボニーの） HP 2500

（備考）…とにかく固くて手強いモンスターだ。奴の突撃はガードすらも無効化する。しかし遠距離の攻撃手段を持たないので、上手く距離を取つて戦えば安全に倒せる。氷属性が弱点なので魔法で一網打尽にするのもいいぞ！

・ヴュクシーイーグル（鳥っぽいの） HP 1100

（備考）…攻撃範囲の広い衝撃波が非常に厄介。威力自体は低いが足止めされるので、ひるんだ隙に他のモンスターにとことんならないように速攻で倒したい。幸いにして防御力や魔法耐性は低い。アーチャーやソーサラーはこいつを優先的に攻撃するといいぞ！

6話 風...なんだらう吹いている確實に...

ふと思つた。

G·i·l·l·yさんの名前つてギリースーツから來てるんぢやないだろうか。その内「ステンバーイ...」とか言いだしそうで怖い。いや、少なくとも俺は期待している。それくらいの鮮やかなスニーキングつぶりだつたのだ。蛇もびっくりである。

そんなこんなでサンマイト遺跡49F。

G·i·l·l·y「これが最後の難関だ」

「一む、今度はそう來たか。

だだつ広い部屋にモンスターがぎゅうぎゅう詰め。落ち着いて考えると、かなりへんてこりんと言つか、シユールというか...とにかく現実的にはあり得ない構図だ。ゲームとはいえモンスターたちもこんな部屋で雑魚寝なんて辛かるうに。

普通に来るんだつたら、この部屋は敵味方入り乱れた力オスな戦場と化すのだろう。しかし今は事情が違う。俺達一人を単なる一兵卒とするなれば、目の前には大量の畠布がいるのだ。まさしく三国逆無双状態。

シエル「これは結構先まで続いているんですか?」

G·i·l·l·y「ああ、それとスマートかけても広範囲攻撃を狙つくる奴がいてだな。左から一番目の鳥みたいなやつ。それを何とかして確実に事を進めたい」

あの鳥の魔物が…先にもいふと考へてよさそうだ。相手に攻撃させずに、常に先手を打つて煙幕で攪乱していくべきか。攻撃当たると即死だし。

今回の探索でお世話になりっぱなしの煙幕花火は…実は結構残っている。俺が持つてる分でも後8個。残りはこの階合わせて2フロアだけだし。もしかして結構余る? それともここから一気に使う羽目になるのか。

G.i.l.l.y^{ワイド}さんとの打ち合わせが始まる。俺がファイヤーウォールWを覚えていないことに気づいて、少し焦っていたようだが、すぐさま作戦を修正。

「こつ来て、こつ動いて、こつやつて… おいおい、いけるのかこれ…?」

G.i.l.l.y「焦つて操作ミスするなよ。それじゃ行くぞ!」

まずは俺がぶつとい顎を持つたサイのようなモンスターに向けてファイヤーウォールを放つ。ダメージはもう見るに耐えがたい。これで3体起きるが、俺自身は入口の死角にすぐに移動するために、相手は一瞬姿を見失う。

それと同時にG.i.l.l.yさんがモンスターの体で行く手を塞ぐ所まで忍び足で切り込む。サイ達はそつちに気を取られて襲いかかるとする。こいつらは格闘しかできないので、ある程度接近させた所でわざとG.i.l.l.yさんが物音を立てて周囲のモンスターを起こそ。そこへ煙幕花火。

|画面上のサイのいたスペースがちょうど空く。そして後ろから煙幕をかすめながら俺がフレイムレーザーを撃つ。煙幕から逸れた

敵は今度は俺の方に向かって、スモークのかかっていない画面上方を移動しようとすると。そこへ煙幕の中からGillyさんが一発。漏れなく敵をスモークの中に閉じ込める。

俺が再びフレイムレーザーを撃ち、ダメージ値が出た場所を頼りに俺達は魔物たちの間をすり抜け。以下それの繰り返し。スモークの中では魔法の詠唱が出来ないので、毎回ギリギリ一人分スペースを空けて煙幕を張つてくれる。流石は煙幕花火全一のGilly先生だ。

そして魔物の群れ、というか壁を突破する。翼くんばりの全員抜きだ。

俺が階段へと続く扉に着いた時には既にGillyさんが鍵開けを行っていた。まだかまだかと待つうちに煙幕が途切れ、あり得ない数のモンスターが後ろから迫つて来る。

そこへ力チリ、と勝利の音が鳴り響く。鳥が何かブレスみたいなのを吐いてきたけど、こちらを捉える寸前で画面は切り替わる。

ディスプレイに「oading」と表示された瞬間、俺はリアルにガツッポーズをして「いよっしゃあー」と叫んでいた。壁ドンされた。隣の部屋の人ごめんなさい。

しかし、もう手汗がヤバい。心臓の動悸もいい意味でヤバい。脳汁ダツラダラ。

来た… 来たぞー！ 遺跡地下50F～！ レベル16でクリア出来るとかマジありえねえ！

| 画面にサンマイド遺跡50Fと表示された時に、俺は今自分が前人未到の頂にいることを実感する。…おしつ… こうなつたら、最

後まで油断せず、何が何でもクリアするぞ！

G.i.l.l.y「よくやつた。この階はまつきつ言つて楽勝だ。後は俺に任せろ」

シェル「本当ですか？　お茶飲んでもいいですか？」

G.i.l.l.y「ああ、そこどうづくじしていくってくれ」

[冗談半分で言つたのに…] G.i.l.l.yあんちゃんマジでええ人や。
G.i.l.l.y「じゃあ、行つてくる。くれぐれも変な物音は立てない
でくれよ」

シェル「行つてらっしゃい。お気をつけて」

俺は椅子にだらしなくもたれかかる。ペットボトルを祝杯の如く
掲げ、とつておきの酢こんぶを開けて夜中に一人祝う。明日、じゃ
なかつた今夜のパーティのみんなの反応が楽しみだ。

G.i.l.l.yさん大丈夫かなー 確かに下一ヶタ〇の階層はボス部
屋となつていて階段を上つた先の何も無い小部屋とボスのいる大部
屋があるだけだ。10Fと20Fはそつだつた。攻略サイトに載つ
ている分では30Fも同様らしい。

と、言つことは50階も同様つて言つのも可能性として十分。ボ
スの隣を上手くすり抜けて宝を取るだけだと考えれば、これまでの
ダンジョン攻略より遥かに簡単だらう。そうなると完全にボスのワ
イバーインさんが涙目だな。まともに戦つたらどれだけ苦戦する」と
やう。

G.i.l.l.y「終わったぞ、さあ帰る」

シエル「お疲れ様です。つてあれ？ 何で今来た道を？」

G·i·l·l·y「何言つてるんだよ。帰るまでがクエストだぞ」

シエル「だつてボス倒したら、自動的に町まで……」

G·i·l·l·y「倒していないからな」

……〔冗談きついですぜ、兄貴。〕

7話 なんだかすこじにならなかつたぞ

サンマイト遺跡40F。

シェル「死ぬかと思いました…」

G.i.l.l.y「お疲れさん！ 赤石を遺跡の前の兵士に渡せばクエスト達成だ！」

煙幕花火の数はギリギリだった。むしろちょっと足りなかった。足りない部分は勇氣で補い、俺達は今来た道を戻り計20階を走破したのだ。ボス戦回避できるからシーフって楽だな、なんて少しでも思つてごめんなさい。非常に心臓に悪い1時間でした。

シェル「道を戻るとか最初に言つてくださいよ…」

G.i.l.l.y「言わなかつたつけ？」

シェル「ログ見てください」

G.i.l.l.y「まあまあ結果オーライと言つことで」

俺達は40Fからショートカットを使い、遺跡の入り口まで難なく戻る。「ミユールの赤石」を兵士に手渡すとクエスト達成の文字が俺の画面にも流れれる。

何より経験値ボーナスがすごい。ノーダメージボーナス、ノーミスボーナス… こんなの取れるの最初のダンジョンくらいだよ。な

んだよノーキルボーナスって、聞いたこと無いぞ。誰も気づかないし、やるうとしないつづーの。

…うわあ、レベルが22まで上がつてやんの。ナンテコッタイ。新しいクエストもいくつか開放。だけどじばらくはお世話にならなそうだ。

Gilly「流石にパーフェクトスニークリングボーナスはきつかつたか。これからまた戦略を練り直さんとなあ」

要は魔物に一匹も気づかれずについて奴ですか。でもこの人だつたらやりかねない。今回も俺が大分足引っ張つていた感じだし。

Gilly「ほれ、報酬の半分だ。煙幕花火の分をしょっぴかせて貰つてるけどな」

『Gillyはシエルに20万Gを渡した!』

半端ないな。今までの総獲得Gを余裕でぶつちぎつてるし。確かクエスト報酬は50万Gだった気がするけど、俺は実際この人に便乗しただけだし、これだけ貰えるだけでも僥倖だ。

一度限りのクエストも、クリアしていないメンバーがいればそれに便乗して参加することが出来る。まあ高いレベルになるとみんなでクリアしないと進めないから、新しく始めた人用の救済システムだと思っていたのだが。この分だと、これからも遺跡40～50階層にはお世話になるだろうな。結構先の話になるけど。

Gilly「じゃあ、俺はこの辺で。また面白そうなクエスト見つけたら誘つよ」

シエル「よろしくお願ひします！ 今日は本当にお世話になります！」

G·i·l·l·y「おう、煙幕花火の事は内緒にしてくれよ。んじゃまたな」

そう言つて彼はそのままログアウトする。俺はしばらくの間、キーボードから手を離し心地よい脱力感に身を委ねていた。……あ、さつきの人たちだ。

H·a·r·i·d·a「ドリゴナイトは計算外だつたなー」

レーベン「ボスだけいきなり火属性とか、製作者ドリすぎる……」

夕凪「途中までは状態異常攻撃の敵がメインだつたんでしょう？」

櫛坊主「ドリゴナイトは魔法がほとんど聞かねえんだよ。ファイターの数がいないと無理」

レーベン「雑魚にはソーサラー必須だけど、ボス戦になると途端に空気になつたな」

れんぢえふ「つかアーチャーも空氣じやね？」

櫛坊主「いや雑魚戦には間違いないんだろーK」

夕凪「今から攻略サイトにて書きこむできますノジ」

櫛坊主「編集員」

レーベン「先駆者は大変だぜまったく」

Hariida 「40Fの壁は厚いな…… いよいよ10人協力プレイを開放する時が来たか…」

ぱる「ADS」の俺に酷な事言わないでくれ……（・・・・・）」

…ほんと、凄いことやつちや たんだな俺ら。たかがゲームの世界だつて？ 現実に生きていてもこんな充実感なかなかねえよ。

とにかく今日は疲れた。夜中3時半か… 田も痛いしむり寝よ。

俺はログアウトしてパソコンの電源を落としそのまま眠りつづく。あ、歯磨かなきや… いいや、面倒くさい。

とにかく平和な就寝だった。

8話 やつこじてに興味はなかつたんだけど

8月下旬。

世間では小中学生が夏休みの宿題の処理に追われひーこらしているというのに、俺は大学の長い長い夏休みを満喫していた。他者からの目なんて気にしません！ 半ニート生活最高！

一応大学には毎日通っている。

学食と田中の暑さを乗り切るために図書館のクーラーを利用するためだ。

授業の無い日の学食は静かで涼しくて、下手な飲食店よりも居心地がいい。ちよくちよくサークルの集まりなんかで来ているリア充グループを見かけるが、そんなの気にならないし、向こうも特に気にしないだろう。

俺は安くてそれなりに栄養バランスの整つた定食をのんびりと食べていた。量は少しないけど、運動も特にしていないしちょうどいいくらいだろう。数か月の間、一日これ一食で過ごしたら4キロも痩せた。体調もいいし、食生活つて大事だな。

「よう高瀬、盆前以来だな」

目の前の席に座つて来たのは、同じ学科の伊藤だ。俺にだつてリア友くらいいる。洒落つ氣のない髪型に服装、顔もふつー。つまりは俺と同じ人種だ。違うのはこいつの方が視力がいいということぐらいだ。眼鏡なしで日常生活を過ごせるなんて羨ましい限りだぜ。

それと高瀬つてのは俺の名前。高瀬悠一。19歳。それ以外に説明することが無い。

「夏休み何やつてるー？」

「げーむ。ねとげ」

「つづく俺とお前は同類だな、高瀬」

似た者同士、考へてることは同じですかい。伊藤はさら
ににやけて、テープル越しに顔を少し近づける。

「なあ、『アカシックドミネーター』ってゲーム知ってるか？」

「今やつてる」

「さすがだな。…もしかして、お前も賞金狙つてたりとかする？」

「賞金？ 初耳だな」

出かける前にも一応公式サイトとか攻略掲示板とかチェックして
来たんだけどな。そんな事は露にも… 今朝は、昨日P.O.T太さん
が言っていた 版からのプレイヤーに与えられる特典つて話題で持
ち切りになつていたくらいだ。

「ちょうど今日の正午に出た情報だ。 版のプレイヤー募集は今日
の夕方5時で打ち切り。んで、本稼働に先駆けて明日から2週間の
間に現プレイヤー達に特殊クエストが与えられるらしい。その達成
者に…」

「賞金ね… どうせゲーム内でだろ？」

「リアルマネーらしこぜ」

「ほんとかよ。どじ情報？」

「信用できる筋つてしか書かれてないから、確かじゃないんだけどさ。さつきから掲示板で滅茶苦茶盛り上がりってるぜ。今サーバーが重すぎてまともにプレイできないうから、学食来たところなんだ」

「うそ臭いなあ。それにみんな釣られ過ぎ。日本人って本当にこういうのに弱いよなあ。普通に楽しんでプレイしている人たちに迷惑かけないでほしいぜまったく。」

「なんか最後に見た時は登録者が3万越え行きそうって言われてた
「ぜ」

「今夜は入るの止めようかな……お前は狙ってるの？ 賞金」

「もちろん、折角のチャンスだからな。言つとくけど賞金田舎で始めたわけじゃないぜ？ 始めたの5日前だし。誰だつて好きなことで金貰えるなら狙つてみたくなっちゃうだろ？」

「俺はのんびりやらせてもいいつよ。上には上がいるんだし。無駄な消耗はしたくないよ」

昨日のユニークさんのこと思い出していた。あの人は狙つくんだろうつか、賞金とやらを。実際どんなクエストが出るかわからなければ、あれだけ上手いプレイヤーを見てしまったんだ。上の世界を除いてしまったんだ。俺の様な一般人にはとても届くレベルじゃないよ。

「何にてせよ詳細は明日の午後発表だからな。暇だつたら協力してくれよ」

「まあクエストの内容次第だな」

「さんきゅー！ あ、それじゃ CNキャラクターネーム教えてくれ

「シエルだ。カタカナ3文字。職業はソーサラーでレベルは今んと C22」

「シエルだな。俺のCNは如月 由眞だ。漢字は検索してすぐわかる。職業はアーチャー。レベル25だ。見つけらた声かけてくれよ！」

「おう、んじや後で」

「そう言つと、伊藤はとつと席を立ち食器を下げる。あれ？ 俺より後に食い始めたんじやなかつたつけ… まあいいか。如月 由眞ね… はて、どつかで聞いたことある名前だな。

その後、家に帰つてその名前を検索してみる。

…今断然注目！ の大型新人AV女優の名前だった。おまけに年が一緒だったのが、余計に俺を複雑な気分にさせた。ネットの世界とはいえ、もう少し自重した方がいいと思つよ、伊藤くん。

8話 わざわざ興味はなかつたんだけど（後書き）

そろそろ簡単な登場人物のまとめでも作ります

9話 何となく怖かつたんです

結局、昨日は口クにプレイできなかつた。

公式発表ではないけど、掲示板での話によるとプレイヤー3万越えは確実。本稼働前のゲームにしては異常な盛り上がりを見せていると、他所でも話題になつていた。

やはり話題の中心は賞金である。そもそも本当にリアルマネーなのかも、賞金の額すらも明らかになつていないが、レベル1でもゲット出来るチャンスがあると公式での触れ込みに皆が釣られているよつであつた。

おかげで古参（つつても1週間程度だけど）プレイヤーは大迷惑。操作説明すらまともに読めないにわか共が集まつて来て、掲示板も調べれば10秒以内で解かる程度の質問で埋め尽くされる。CNもメンヘラ臭いのばつかだし、今度みんなで実際に会つて作戦会議開きませんか～？なんて、明らかに出会い目的のプレイヤーも続出していた。

夜6時から12時にかけて、俺はサーバーに接続することすら出来なかつた。俺と組んでる人たちも同様に苦労しているようであつた。

YASUさんはその人の良さが災いして、初心者質問攻めにあつたあげく、素人パーティーに加えられ、システムを把握していない味方から何度も殺されそうになつたらしい。

Pon太さんも「まさかこんなことになるなんて…」と困惑していた。先日からゲームを始めた彼の友人も所在なさそうにしていた。

彼が持っていた情報は「版プレイヤーには本稼働時に特典」という噂だけだったため、本当に賞金がつくなんて予想だにしなかつたであろう。一応パーティーの一員として慰めの言葉はかけておいた。

まるちーさんはログインすら出来ていないようであった。あの人は単に仕事が忙しいということもあるのだろうが。

詳しくはわからないが、恐らくG・J・Y・Yさんも似たような状態だろう。

伊藤の奴は名前で検索かけたらヒットしたので、チャット登録して一声かけた。本当に一声。その後すぐ抜けた。

面白い物が廃れていくまでのサイクルという「オペペ」を以前に見たことがあるが、まさにそれである。面白い物は多くの人に知られていはいけない、下手に流行らせちゃいけないのだ。人の波が娯楽を潰す。

…とまあ、昨晩はこんな事情で完全にやる気が失せてしまい。早々に床についた。それにしても如月由真ちゃんって中々可愛いな。今後ともお世話になるかもしれない。

そして翌日の正午過ぎ。

いつものように学食で一人飯を食っていると、昨日と同じく伊藤が声をかけてきた。その顔はなんというか、もう9月近いというのに未だに残る残暑にやられたんですか、と言いたくなるくらいに青ざめている気がした。理由は解かるけど。

「よ

「ん」

「見た?」

「見た」

「どう思つ?」

「嘘臭い、と言いたいところだが、ああも発表して嘘でしたーじゃ済まされないだろ? しな。本当… なんじゃねーの?」

「にしても、なんだよ『賞金一千万円』って…」

正直俺も『テイスプレイ』の前で10秒間固まつた。公式サイトは激重だった。この話は様々なサイトに飛び火し、ネット上のニュースでも取り上げられた。無料のネットゲームでこれだけ破格の賞金がつくのは前代未聞なのだ。運営側のコメントは『わが社のゲームの知名度を上げるために企画しました』の一点張り。確かに『ゴールデンタイムのテレビCMとかはそれくらい行くし、最近は対費用効果も怪しくなつてきている。良くも悪くも有名になるところことは企業側の戦略としては成功の部類に入るのだろう』。

「賞金を受け取れるのって一人なのかなあ?」

「金額的にはそうだと思つけどな。みんなで山分けすることも十分な金額だし…」

「だとしたらやつぱり俺はバス。変なトラブルが起きそうだからな

俺の両親は割と放任的であったが、金の恐ろしさについてはガキのころからしつかりと叩きこんでくれた。世の中金だけじゃない。でも金が原因で殺されたり、恨まれたり、苦しんだりしている奴は世の中に腐るほどいる。

現に今、楽して稼ぎたいと欲に塗れた人間達が大量に押し寄せてきているのだ。ギャンブルとは違い自分にはリスクは無いので、みな気軽に始めることだらう。そのほんの軽い気持ちで金もつけしょうとする姿勢が最も危険なのだ。

「確かに、賞金ゲット出来たらみんなで焼き肉、なんでもんじゃないからな……お前がそう思うのも仕方ないか……ま、気が変わったらいつでも声かけてくれよ。うちのパーティーリーダーは信用できる人だと思つしさ」

「……ああ」

伊藤はそのまま「飯も食わずに帰つて行つた。俺はどうも見るでもなく、そのままゆつくづく飯を噛んでいた。

『金に関しては真っ当に稼げ』か。

バイトも何もせずにゲーム三昧の俺が偉そつと言ふの台詞じやないけどな。

「ねーねー 杏子は今レベルいくつー?」

「私はやつと8つたといひだよ。つていうかセーブのゲーム難しそぎない?」

「それなりのお金かかってるからねー みんな必死だよ」

「でもいくらなんでもシーフ弱すぎない？ 盗賊の癖に他の人からアイテム盗めないとか」

「レベル1でも取れる可能性があるらしいから別にダンジョン入んなくていいんじゃない？ やりこんでる人と友達になる方がよっぽど確実だよ」

「あつたまいいー！ おっさんだつたらひょっと誘惑したら口づといくかもしれないし」

…頼むから止めてくれよ、素直にゲームを楽しめてくれ。

10話 単なる宝探しに思えたのですが

【スペシャルクエスト】

『この世界のどこにある「A・R・クリスタル」を探し出せ!』

(攻略のヒント)

A・R・クリスタルはダンジョンの中にあるとは限らないぞ!
君の目と足と耳、そして直感… 持てる感覚を全て使ってこの世界
を探しまわるのだ!

「A・R・クリスタル、ねえ…」

もう夜中の10時だというのに相変わらず人が多すぎてログイン
が出来ない。参加人数増やすんだつたら、もう少しサーバー増強し
とけよ運営。俺が今見ているクエストの画面は他のプレイヤーがキ
ヤプチャーして別のサイトに上げたものだ。

攻略、雑談掲示板の方も満員御礼。いい加減、金田町での新参と、
本当にゲームを楽しんでいる側の古参用に分けようぜ、という声が
上がり、スレッド消費も落ち着いてきたほうだ。だが本当にリアル

マネーが、しかも1000万円の大金が手に入るかもとあって古参スレの方もこのスペシャルクエストの話題で沸騰している。

「実を言うと、俺もこのスペシャルクエストに全く興味が無いわけではない。ただ、賞金田当てで瞳をきらつかせているような連中と関わりたくないだけだ。運良くこのA・R・クリスタルとやらを見つけたらそりや飛んで喜ぶだろうよ。賞金もありがたく頂戴するまず無いと思うけどさ。」

「探しをさせるにしても、せめてもう少し謎解き要素があれば楽しめるんだろうけどな。生憎解けるようになっていて謎が無い。推理の余地が一切見当たらないのだ。全てがアバウト。」

「レベル1でも入手出来る」「ダンジョンの中にあるとは限らない」、「プレイヤーの多くはこの言葉が手掛かりにならないかと必死に考えている。だが俺に言わせればこんなのはヒントになんてならない、そう断言できる。」

「後はA・R・クリスタルといつ名前くらいか。でもタイトル的にA・R・って「アカシックレコード」の略だよな？」掲示板でもほとんどの人がそう言っているし。因果律云々とかいかにも厨二病患者が好みそうな単語だから、作り手もそんなに深く考えずに、客寄せの言葉としてつけただけだと思っていたが……

「あ～ もどかしい」

パソコンの前から離れ、俺は冷蔵庫の中の麦茶を取り出して飲む。ログインまでの時間をクエストの情報収集と謎解きに使おうと思っていたのだが、IJの様子ではどうにもこじもつても。ついでゲーム本編をやらしてくれ。

… つと電話、伊藤からか。

「もしもし?」

『おう高瀬、確かお前ソーサラーだったよな』

「そうだけど」

『ファイヤーワォールでもつ覚えてる?』

「ああ、ついこの前覚えさせたけど」

『そりが！ 賴みがあるんだけどこれからうちのパーティーに来てくれるのか？ ちょっとダンジョン攻略に付き合つてほしいんだ』

「クリスタル探しでないんなら構わないけど… 今サーバーが重すぎてログイン出来ずにいるんだが」

『マジか… あー とりあえず11時半に集合つてなってるから、その時までにログイン出来ればいいからさ。出来なかつたらまたメールでもくれないか?』

「ああ、わかつた。人に空きが出るのを祈るのみだな

… ふう。簡単に約束しちゃつたけど、肝心の俺の方のパーティーのことを忘れてた。

まあ、今の状況ならみんなで集まることも難しいだろ? うし。YA SUTさんもPON太さんも他にパーティー組んでるしな。大丈夫だ

ろ。え~っと? あと一時間ちょっとか。ログイン試してみるか。

『メインサーバーとの接続に失敗しました』

… ハンビーで駄菓子でも買ひしょい。

10話 単なる宝探しに思えたのですが（後書き）

ファイヤーウォール_{ワイド}

：ソーサラーが習得できる範囲攻撃魔法。

初期のファイヤーウォールに比べて、効果範囲が倍近くに広がっている。

複数の敵にはもちろん、素早い敵、当たり判定の小さな敵、ボス戦における足止めなど、用途が広く非常に便利な魔法。ソーサラーなら絶対に覚えておけと、攻略掲示板にも書かれているほど。

1-1話 ゲームの中でも人脈は重要です

午後11時13分。ログイン成功。

他のパーティーメンバーの状況も見たけど町にはいないようだしログイン出来てないか、ダンジョン行つてるがだな。ようし、心置きなく行きましょう。

In モナドの酒場

シエル（L V · 22 ソーサラー）「本当に私なんかが参加して大丈夫なんですか？」

×ぽん（L V · 35 プリースト）「ちょうどソーサラーの人気が来れなくなつたんでこつちとしても助かりますよ」

A s e l i a（L V · 38 ファイター）「ファイヤーウォールWがあればなんとかなる！」（キリツ）

…うん、想像以上にレベル高いぞこのパーティ。レベル30越えの人は少なくとも賞金目当てで入つて来た新参ではないだろうし、寧ろかなりやり込んでる部類だ。このゲームはレベル10が一つの壁になつていてるからな。町で見かけるキャラの約3分の1以上がレベル10以下だ。伊藤くん、君をちょっと誤解していたようだ。反省します。

如月由眞（しゆま・ゆづる／アーチャー）「そう言えばサイトさんは？」

サイトさんという人はこのパーティのリーダ格。既にレベル50に手が届きかけており、仲間内からもはや化け物通り越して廃人だとまで言われている。

×ぽん「ソロで挑むクエストあるから先にそっち行つてくるつて言ってたけど」

Aselia「相変わらずだな、あの人は」

サイトさん… また一人、規格外の人と組むわけか。とか何とか言つてるけど他3人も相当強い部類だぞ。さつきから何度も他の人から話しかけられている。

どうやら新参用の攻略掲示板でゲーム序盤に手つ取り早くレベルを上げるコツが議論されていたらしい。で、そこから伝播したのが、レベルの高い人をパーティに迎える、もしくはくつ付いて行く、という方法だ。このゲームはダンジョン内であれば敵を倒した時の経験値はパーティ全員に与えられるので、始めから難易度の高いダンジョンで、レベル高い人に戦いを任せておけば苦せずして大量に経験値を稼ぐことが出来るわけだ。当然その話を聞いた金目当ての豚共が馬鹿の一つ覚えのように実践するわけで。

元々このゲームはその難易度の高さで序盤に投げ出す人も多く、このままの調整だとマニアにしかウケないぞと、稼働初期から言わ

れているくらいのバランスなのだ。しかも本稼働まで課金システムは実装されないらしい。そのことが初心者をより自重出来なくさせた。

おかげさまで俺も彼らと合流するまでに何度もパーティーのお誘いを受けた。レベル20代も結構高い部類に入るからな。もちろん全無視。お断りします（AA略）

古参用掲示板には、少なくともクエスト期間終了までは、レベルが10以下、もしくは自分とレベルが10以上離れている奴から声をかけられても一切相手にするなどまで書かれている。全ての人気がうだとは思わないが、昼間のビックチ共のような奴らが多くいることは確かなのだ。

A s e l i a 「あー さつきから新参どもがつぜー」

如月由眞「これも金の力ですかねー」

シエル「これだけレベルが離れた人に対して、パーティに加えてくださいとか普通言えませんよ… 話しかけるのも怖いのに…」

×ぽん「禁止されている行為では無いんですけど、本来は自重するはずですからね」

足手まといにしかならないって解かり切っているなら、そこに暗黙の了解が生まれる。本来は俺がこの輪の中にいるのもおこがましいくらいなのだ。ファイヤーウォールWが使えるのと、メンバーの如月（＝伊藤）のリア友だからたまたま入れて貰っているのに。なんでゲームの中今まで、人の醜さを見せつけられなければならないのだ。

サイト」」・50 ファイター）「おまたせーー！」

×ぽん「どうとうひの台に乗っちゃったよこの人！」

Aselia 「廃人乙ー！」

如月由眞「早速行きましょう！ リア友のソーサラーも連れてきました！」

シエル「足引っ張るかもしねいけどよろしくお願ひします！」

サイト「よろしくー！」

久々のフルメンバーでのダンジョンだ。あれ？ 昨日出来なかつただけか？ まあいいや。G.I.L.L.Yさんの時のような刺激に満ち溢れたものにはならないだろうけど、これはこれで十分に楽しいのだ。… そう言えばG.I.L.L.Yさん、今何やってるかなあ。

11話 ゲームの中でも人脈は重要です（後書き）

登場人物増えてきましたね…（汗）

次の次くらいに簡単なキャラまとめ作ります。

12話 その時既に始まっていたのです

「うーん、いいのかこれで?」

午前4時半。俺はシエルのステータスを見ながら妙な罪悪感に苛まれていた。

ただ今のレベル… 29。一体全体どうしてこうなった。5時間程度のプレイでレベルが7も上がるって… 先日のG.i.l.l.yさんと組んだ時以上だ。

まあ結論から言つと俺は金魚の糞の如く高レベルのプレイヤーに付いて行つたのだ。そう、つい先程まであんなに嫌っていた金田当ての豚共と同じような行為を… いや、違う。これは不可抗力だ。

他の人もノリノリだつたじゃないか。誘つて来たのは向こうからだ。うん、俺は違う。あんな奴らとは違う。

始めて、俺は伊藤（如月由眞）^{シホル}、×ぽんさん、A s e l i aさん、そしてサイトさんの5人で、天上回廊というマップに挑んでいた。攻略掲示板によるところの平均攻略レベルは40くらいだと書かれていたが、サイトさんの見事な采配と他のメンバー自身の圧倒的な強さによってあれよあれよといつ間にクリアしてしまった。

このダンジョンの難敵は空を飛びまわるグーバートル。そしてアロンスライムだ。アロンスライムは粘着液を飛ばし、それを浴びた者の動きを一定時間止める。それを避けたとしてもその粘着液が地面に張り付く。その上を通つても一定時間移動が出来なくなるのだ。

じゃあ、それを避けて上手く立ちまわればいいじゃん、と俺も最

初思つたが実際にその惨状を目の当たりにして反省した。無理、あんなの無理。

スライムちゃん多過ぎ、ハツスルし過ぎ、体液飛ばし過ぎ、そこに空中を自在に飛び回るグラービートルの大軍。一度でも粘着液に足を取られれば、グラービートルの容赦ないバックアタック（ダメージ1・5倍）の連打が待ち受けている。互いに単体ではそこまで強くないのだが、組み合わるとハメ殺されてしまうという、これまで鬼畜ステージなのだ。

でもファイヤーウォールWがあれば別、攻略レベルが10ぐらい下がるらしい（サイトさん談）。粘着液を無効化し、空を飛ぶ敵の足止めにもなる。無理ゲーが一転してヌルゲーとなる瞬間を俺は目の当たりにした。でも数が多くて、全ての敵に使うためには結局レベル30台後半のSPが必要になるんだけど。しかし、そこは사이트さん。俺のために大量にSP回復アイテムを用意しておいてくれた。金額にして40000G。ありがてえ、ありがてえ。

そこのボスですか？ 魔法全然効かないでの俺は終始空氣でした。ちゃんとちゃんと。

で、そこをクリアした時にはレベル26。これでもかなり上がった方だと思う。今日はこれで解散：かと思つたら、サイトの方からもう一つ行つとく？ との提案が。

サイトさんの別の仲間が10人協力プレイの動画を取つてネットに上げたいらしく、その面子として来て欲しいとのことだ。伊藤の奴も初めて知つたらしく、結局俺達は深夜特有の妙なテンションそのままホイホイと付いて行つてしまつたのだ。

そして今に至る。

「うん… 仕方ない。みんな楽しんでたし、おーるおーる」

みんなと解散した後、10分ほど俺は自分自身の正当化に時間を費やしていた。

「このせ、これはちゃんとゲームそのものを楽しんだ結果なのだから。

「よし… 寝よー。」

外を見ると空が微妙に明るくなっている。酷い生活リズムだなこりや。

でも、最近何だか凄く充実しているな。ゲームだけ。これも大学時代にしか出来ない事さ。そうだ、きっと。

受験の時と違つて睡魔も心地よい。ゲームして飯食つて寝る。最高の生活じゃないか。

そのまま、俺は夢の世界へと墜ちて行つた。

… そつ、この時はまだ、寝ることに向の心配もいらなかつた。

1-2話　その時既に始まっていたのです（後書き）

そろそろ話が動き出します

【番外編】 一回まとめるよつか（前書き）

これまでの内容をまとめました。

凄く長くなっちゃいましたが（汗）

読み飛ばしても構いませんし、初見の方はこれで大体内容が解かる

と思います。

【番外編】 一皿まとめよつか

・アカシッククドミニネーター

【概要】

新作のMMORPG。現在は一定期間中に募集したプレイヤーのみでの版が稼働している。

2Dグラフィックではあるが、その分操作性やレスポンスが良く、多彩なアクション性、深い戦略性を兼ね備えている。その代わりゲーム自体の難易度はかなり高めに設定されており、特に序盤は「これ何で死にゲー？」と思うこと請け合いでいる。ダンジョンやクエストもパーティを組まないとクリア出来ないバランスであり、プレイヤー自身のコミュ力も必要とされる。

【職業について】

ゲーム開始時に職業を設定することが出来る。途中での変更は今のところ出来ない。

非常に豊富な種類の職業があるが、実際の所とともに運用できるのはファイター、アーチャー、ソーサラー、プリーストの4種のみ。それ以外の職業は戦闘においてまるで使い物にならず、とともにレベルを上げることすら出来ない。（後述のプレイヤー、Gillyのような例外もいるが）そのため版のプレイヤーの9割以上は上記4種の職業のどれかである。

これに関しては恐らく本稼働版で調整（その他の職業のステ強化、もしくは転職システム）が入ると予想されている。

【プレイにおいて】

プレイヤーは他のプレイヤーと自由にパーティを組むことが出来る（もちろん相手の承諾が必要）。一度組んだ相手はフレンドリストに登録され、ログイン状況の確認、別マップからのチャットを

送ることもできる。クランなどはまだ実装されていない。

ダンジョン探索においては、最大10人まで協力プレイが可能：なのだが、パソコンのスペックや回線速度の関係で、ラグも起こり易い。そのため大半のプレイヤーは4～6人くらいでパーティを組んでいる。

【期間中の特殊クエスト】

版プレイヤーの募集締め切りと同時に発表された特殊クエスト。内容は、期間内に世界のどこにあるイベントアイテム『A・R・クリスタル』を探し出すというものである。そしてそれを達成したプレイヤーには1000万円の賞金が与えられる。

この破格の賞金と、公式サイト側の「レベル1でも入手できる」といった触れ込みのおかげで、新規プレイヤーが激増。試験稼働ともいえる 版にも関わらず、参加者は3万人を超えていた（公式発表）。

このような前代未聞のキャンペーンに対して様々な憶測と危惧が飛び交っているが、運営側からは「ゲームの宣伝のために行っている」としかコメントされていない。

【現在の状況は…】

賞金目当ての新規プレイヤーが大量参入して来たためか、ゲームサーバのほうに常時負荷がかかっており、人の多い時間帯（休日の日中、もしくは午後6～12時）はログインすることすら難しい。またネットゲームに慣れていない輩も多く、全体的なプレイマナーの悪化も訴えられている。

課金アイテムがまだ実装されていないため、本稼働までは公平な条件でプレイすることが出来るが、それが逆にマナーの悪いプレイヤーをのさばらせているという意見もある。

また、稼働したてのゲームであるため、全容はほとんど明らかになつておらず、攻略法やゲーム内のデータは有志達による攻略掲示

板や、個人攻略サイトなどでしか調べることが出来ない。

【登場人物】

アバター名がメインです。

- ・ シエル（高瀬悠一）
 - ⋮ 主人公。暇な大学生。ゲーム上ではソーサラー（ソーサレス）の少女。炎系魔法専門。
- ・ G.i11y
 - ⋮ シーフ（）。職業の特性に早くから気づき低レベル攻略をやつてのけるパネ工人。主人公の心の師。
- ・ 如月由眞（伊藤弘樹）
 - ⋮ アーチャー（）。主人公の大学の友人。アバター名は売り出し中のAV女優から。
- ・ サイト
 - ⋮ ファイター（）。現時点でトップクラスの実力を持ち、仲間内からも廃人と評される。如月のパーティーのリーダー的存在。
- ・ YASU
 - ⋮ ファイター（）。主人公の初期パーティーのリーダー的存在。面倒見のいい人。

・P o n t a

：ファイター（ ）。主人公の初期パーティーの一人。この他にリア友ともパーティーを組んでいる。

・まるちー

：プリースト（ ）。主人公の初期パーティーの一人。最近は仕事が忙しいらしくあまりログイン出来ていない。

・A s e l i a

：ファイター（ ）。如月のパーティーの一人。

・×ぽん

：プリースト（ ）。如月のパーティーの一人。

・にいにい

：ソーサラー（ ）。如月のパーティーの一人。

・G i l l yの知り合い（アバター名不詳）

：クリエイター（性別不明）。他にクリエイターを育てているプレイヤーがないのをいいことに、合成のみでしか手に入らないアイテムを作つては高額で売りつけている人。性格はあまりよくなさそう。

・夕凪

：プリースト（ ）。攻略サイトの管理人。

【番外編】 一田まとめよつか（後書き）

キャラ多いなあ
⋮

その内増えたり減つたりします。

13話 嫌な予感はしていました

田を見ますと見たことの無い大地が広がっていた。一体どうして?
あ！ 何か可愛い女の子が襲われている、助けなきや！ でもどうやつて？

すると俺の手には激しい電流が宿っていた。これは… 使えるか？
くらえー！ どかーん！

「助けて頂きありがとうございます！ 今の雷は… まさかあなたが伝説の勇者様？」

勇者…？ 俺が…？

「私達の世界を救つてください！」

こんな美少女の頼みごとなら断れない。

現実世界に退屈していた俺の異世界での生活が始まった！

⋮

(なーんか最近多いなー こいつの)

この日は賃禄の昼12時起き。ビバ大学の夏休み。

今日は月曜だし、ゲームのほうも昼間の方が人いないけど、連日この暑さだとパソコンにもかなり負担がかかる。昼間にクーラーつけっぱは電気代がヤバいし。

そういうわけで、学食で飯を食つた後、冷房の効いた図書館で持参のラノベ（古本屋で200円）を読む毎日。ラノベに飽きたなら、適当な雑誌や新聞でも読めばよい。ゲームはできないけどパソコンも好きに使える。流石は大学の図書館やで。節約はこうやってするんですよ奥さん。

そんなこんなで家に帰るのは午後6時半。晩飯も学食でとったので後はネットタイムだ。プレイヤー数のピークは8時くらいだつて掲示板にも書いてあつたから今ならまだ…うーし、ログイン成功。

ログイン早々チャット「ホール」と。お？ まるちーさんだ。

まるちー（「v・17）「シエルさん、久しぶりー

シエル（「v・29）「と言つても3日程度ですけど。今日は早いですね」

まるちー「仕事が早く終わつたんで。寧ろ最近夜中が重すぎない？」

シエル「例のクエストのせいか、8時から12時まではキツイですねー。早めか遅めにログインしないと、入ることすら出来ませんよ」
まるちーさんのレベルが全く上がつてない所を見ると、ここ数日本常にログイン出来ていなかつたようだ。いつも10時くらいにログインして1時前には抜けてたもんな。社会人つて大変だ。

まるちー「それにしても、ちょっと見ないうちにシエルさんはだいぶやりこんだよしだねー やっぱり例の賞金とか狙つてる？」

シエル「私なんかじゃとても無理ですよ… 強い人にパーティー誘われたからレベルだけ上がっちゃいましたけど、上には果てしなくいろいろて思い知らされましたから」

まるちー「確かにねー レベル1でも入手できるって公式に書いてあつたけど、実際は時間と人脈がものを言つだらうしねー」

シエル「手がかりとかヒントとかも全く無いし。獲得者がいないとその内ヒント増えたりするんでしょうか?」

まるちー「どうだろ? もしかしたら該当者なしで済ませるかもしれないし」

ああ、その手があつたか。そもそも運営が「A・R・クリスタル」とやらを本当に置いてあるのかも怪しい。そりやそうだよな。クエスト達成条件なんて運営の追加減でどうにでもなるんだ。あーあ、となると益々このキャンペーンがアホらしくなつてきたぞ。

シエル「これはのんびりゲームを楽しんだ者勝ちかもしませんね」

まるちー「そうだね。ゲームは無料だし、宝くじ感覚で一攫千金を夢見ている人が多いけど、消費する手間と時間は決して只じゃないよ。そう考えると宝くじの方がまだマシや」

社会人が言うとなんか説得力あるよなあ。時間を大量に浪費して存在すらしない可能性のある宝を探すよりも、普通に働いてその分だけ金を稼いだほうがよっぽど効率がいい。人間やっぱ地道に行かんとな。

YASU(「・19)「二人ともちょうどいいところだ。」

Pon太(「・22)「いいタイミングで4人揃いましたね」

まるちー「今日はついてるな。今からどこか行つたりする?」

YASU「二人がいなかつたら他の方を誘おうとしていたんですね」

Pon太「でもこんな早い時間に揃うなんて珍しいですね。前回から色々ありましたから」

シエル「やっぱりこの4人が一番落ち着きますね」

しかしレベルに関しては俺が完全に浮いてしまっているな。

この後4時間程、4人で（少なくとも俺は）まつたりとダンジョン攻略を楽しんだ。流石に高いレベルに質の高い装備があるから戦闘が余裕過ぎたが、そんなのは置いとこう。仲いい人とやるものゲームの楽しみの一つだ。しかも、ついに俺もレベル30の大台になってしまったぞ。何だか悪いなあ。

11時頃にまるちーさんが明日も早いからとログアウト。パーティーも今日はこの辺で、と解散した。本稼働まではしばらくこんな調子だろうから、次回は会えたら組みましょうということに。

俺も今日は早めに切り上げるかな… その前に個人ショッピングでも見て回るつと。

つと、またチャットホールか。最近知り合い増えたからなあ。いいことだけだ。

しかもサイトさんからだ。

シェル「こんばんは。昨日はどうもお世話になりました」

サイト（レバ・51）「急にすまないね。ちょっと頼みがあるんだけど」

シェル「また何かクエストですか？」

サイト「いや、如月さんのことなんだけど。彼の連絡先とか知ってるかな？」

シェル「知つてますけど、どうかしましたか？」

サイト「珍しく彼がログインしてなかつたんでさ。今日予定していたクエストだけど、明日の同じ時間に延期になつたって、彼に伝えてくれないかな？」

「へーそりゃ珍しい。まあアイツにはアイツの用事もあるのだろうし。しつかし、この人もメンバーのリア友にゲームの予定を伝えさせることなんて相当な入れ込みようだな。

シェル「構いませんよ、今から電話してもいいですし」

サイト「すまないね。彼個人の事情もあるし、ゲームに束縛するの

モビルかと思つナビ」

一応自覚はあるんだ。しかし、伊藤（＝如月）の奴も随分と頼りにされているんだな。

サイト「どうしてシエルさん。最近変わったことはなかつた？」

シエル「どうしたんですか？ 急に」

サイト「無いならそれでいいんだけど」

シエル「はい、別に変な事は全然」

サイト「それならいいんだ。君も学生だらうけど、あまり体に無茶かけるなよ。俺も人のこと言えないけどわ」

シエル「サイトさんも大学生なんですか？」

サイト「一応な。じゃあ、俺はちょっと人待たせるから。また今度」

シエル「はい、如月に伝えときますね」

サイトさんも学生なのか。まあこんな廃人プレイが出来るのは夏休み中の大学生か一トくらいのもんだけさ。さて、一応伊藤の奴に電話してみるか…

『 ただ今電話に出ることが出来ません。御用件のある方は……』

寝てんのかな？ じゃあメールで送つとくか。

14話　一休が起きたのせり（前編）

今回ばかりはひつえつちなシーンがあります。
ピ・カ・キヤ

14話 一体何が起ったのや。り

「……さん。……エル……さん！」

……ん。若い男の声。誰だ？聞いたことのない声だし。
おう、体が何か揺ゆふられている。それに頬のあたりにひんやり
とした感触。

何だ俺、いつのまにか机の上で寝ていたのか？

「シエールさん！起きとくださいよー。」

ぼんやりとした視界の向こうには3人の人影。
……ってあれ？ここ俺の部屋じゃないの？

「あ……！？え……！？ええつ！？」

「どうしたんですか？シエールさん。まだ寝ぼけてるんですか？」

畠の前には銀色の甲冑に身を包んだ若い男。誰…？いや、見た
ことがある。

「あの……YASU……さん？」

「はい、どうしました？」

男は軽く笑いをこらえながらこちらを見ている。

……つていうか何でYASUさんのキャラが畠の前にいるんだよ…？
いやいや待て、どうしたことは…？

右手には犬の顔にふさふさの体毛の剣士。左手には法衣に身を包んだ男。

「ローナ太さんに…まるちーさん？」

「はいはい」

「どうしたやつたんですか？ シエルさん？」

え…あ…な、何が何だか分からぬ。どうなつてゐるんだ…？
おい、もしかして今の俺つて。

「シエルさん。帽子踏んづけちゃつてゐよ」

「大丈夫ですか？ これから晶靈の洞窟に向かつていつのに。顔でも洗つてきたら？」

「そ、そうします…」

足元にずり落ちていたのは魔導士の三角帽子。地面に立つてみて解かるが視点が妙に低い。むしろ、さつきから俺の声が違う。完全に女の子の声だ。

もしかして今の俺つて… シエルになつてゐるのか！？

何だよここの悪い夢は… と、とにかくまづは顔を… トイレビン
だ… 寧ろに…ビンだ…

あーいや、見たことあるぞ。店の内装といい、このテーブルの配置といい、あの筋肉モリモリマッチョマンのアツチ系のマスターといい… 良く来たことがある。

ここはモナドの酒場だ。つてことはゲームの世界？ 何この使い古された展開！？

「ちょっとお嬢ちゃん、そっちは男子トイレよ」

「…？ す、すみません…」

バタン。

トイレの中は完全に外界と隔離されたパーソナルスペース。ここで頭の中を整理しよう。

やう言えばゲームの中では女子トイレは入れなかつたつけ。なんかここだけ妙に現代的なんだな、水洗式だし。普通に水道あるし。

…うん、鏡を見て確信した。今の俺は完全にシエルだ。じつして見るとやっぱり可愛いな。

お兄さまへ だーいすき！ にゃんにゃん。キラッ

…やつとの場合か。

とにかく一体何なんだこれは。いつの間にか俺がシエルと同化している。これは夢なのか？ とりあえず顔に冷水をぶっかけてやろう。

バシャバシャ……変化なし。

頬を思いつゝきつねつてやれり。

ふにふに、ふにふに。

幼女の頬つてこんなに柔らかいんだー 現実でやつたら間違いなく捕まるけどな。

「じゃねえええーーっーーー？」

覚めないぞ、全然夢から覚めないぞー 下ー 下はどうなってる！？

…ああ～ 男の勲章が綺麗さっぱり無くなつております。つんつるてんだ！ うわー これが女の子の割れ目？ すっげー こうなつてんだ。口口にアレが入るんだ！ ヘー！

すっかりR-18な気分を満喫していた俺はドアのノックの音で
我に帰る。

「お嬢ちゃん？ 隨分長いけど大丈夫？」

「あ、はい。大丈夫です！」

いかんいかんいかんいかん。夢だからって遊んでる場合じゃない。いやでも、覚めない夢は夢じゃないわけで… 単に俺がゲ

ームの世界にトロツプしたと考えればそれで説明が付くわけ…

「付いてない！ 全然付いてない！…」

よし、ノリ突っ込み完了。私は冷静だ。とりあえずこれだけやつて夢から覚めないんならどうしようもない。もう少しこの状況に身を任せるとしよう。

「シエルさん、もう田は覚めましたか？」

「あ、はい。もう大丈夫です。お騒がせしました」

いや、覚めてないんですけどね。とりあえずはあなた達に付いて行きます。

俺達4人は酒場を出る。外は思っていた通りゲームの中そのものの風景が広がっていた。ヨーロッパの古い町並みを思わせるレンガ造りの家。車一つ通つていらないだだつ広い通り。馬車や馬は通つているけど。そして、皆思い思いの装備に身を包んだ冒険者たち。

これは… とんでもないことになっちゃつただ。

夢で終わつて… くれないのかな。

14話　一休が起つたのやう（後編）

はい、ここまさかの異世界トリップ。
しかしR-15タグを付ける基準って何なんでしょうか。

15話 夢にしてはリアル過ぎませんか？

晶靈の洞窟、地下14F。

魔力が秘めた岩石によつて僅かに照らされる薄暗い洞窟に、住処を荒らす侵入者を排除しようと、モンスター達の異様な叫び声が木靈していた。

「シエルさん！ 先制攻撃で！」

「つよ、了解！ ファイヤーワオール！」

『ギャワアアーッ！…』

文字通り壁の如く立ち上がつた火柱の列が、暗黒へと墮ちた妖精たちを焼き尽くす。その奥からはモンスターの第一陣、リザードマンの群れが迫つて来る。

「よし、ここからは任せろ！」

YASUさんとPON太さんが前衛に飛び出し、無骨な剣と鎧で武装したリザードマン達と激しい斬り合いが始まる。味方が前に出ている時はファイヤーウォールは使えない。フレイムレーザーのスナイプで後方援護に勤めるとしよう。

…「」まで偉く自然な流れで進んだが、なーにやつてんだるーな

俺。

「これは夢だ。中々覚めない夢だ。だったら、なるようにならぬいだろ？。俺は深く考えるのを止め、周りのノリに身を任せることにしたのだ。

右も左も解からない異世界に飛ばされたのならともかく、「ここはゲームの中の世界だ。世界観も、知り合いの仲間も、自分の能力も良く知っている。今やっているのは、『晶靈の洞窟に突如立ち込めた瘴気の謎を解明せよ』という依頼、つまりクエストだ。

基本はゲームと一緒にだ。雑魚敵を倒しながら洞窟を進んで行き、ボスを倒せば終了。普段はパソコンの上でやっていることを実際に体感している状態だと思えば、この異常な展開に慣れるのにそう時間はかかるなかつた。実際に体動かすから結構疲れるけどさ。魔法つて奴も何度も撃つていると軽く息切れを起こす。

「何か新しく来たぞ！」

「いつたつ…！ 吸血コウモリだ！」

前の一人が頑張ったおかげでリザードマンも粗方倒したが、今度はさらに騒ぎを聞きつけたのか吸血コウモリの群れ。ファイヤーワオールで一掃したいところだが、二人を巻き込むわけにもいかんな。素早い空中の動きに翻弄されて、位置取りを考えるどころじゃなさそうだし。…こいつを使ってみますか。

俺はウイザードロッドを眼前に構え、軽く呼吸を整える。狙いは…広がっているけど、要は一人に当たらなければいい話だ。

「二人ともあんまし動かないでね！」

声が届いたかわからないが、とりあえず忠告。俺が念といふか気

合というか、とにかくそんな感じの物を込めるといロッドの先の赤い宝石に火の粉が回転しながら収束していく。まるで綿菓子を作つてる気分になりながら、軽くロッドを回してゆく。次第にロッドの先端には真っ赤な綿飴というか、丸い棒キャンディーのような火の玉が形成されていく。

「フレイムレーザー…ラピッドッ！」

自転する火の球から削れるようにして閃光の筋が次々に飛び出す。コウモリ達も危険を察知して始めの何本かは交わしたようだが、幾重にも飛んでくる炎の矢に對して徐々に対応しきれなくなり、犠牲者が始める。「口径」こそは小さいがその分貫通力は高い。炎の矢はコウモリたちの羽、体、脳天を撃ち抜き、さらにその後方にいる者も貫く。まるで機銃を掃射している氣分。炎の綿飴がロッドから全てほどかれた時には、コウモリの大半は地面へと墜落し、残つた者も戦士たちの追撃を受けて息の根を止められていた。

「ふう…」

「うひょ、すげになシエル」

「おかげで助かりました」

しかしあれだけ撃つておいてなんだけど、コウモリ相手に機銃つて普通に効率悪いよな。ファイヤーボールブラスト（簡単に言うと火の玉の雨）とかの方がああいつ相手にいいんだろうけど。あんまスキルポイント消費したくないんだよなあ。普段はファイヤーウオールで十分だし。

ソーサラーは習得することの出来る魔法の種類こそ豊富であれ、実際に使えるのはその一部だ。だから覚える魔法は出来るだけ無駄

の無い物を厳選していきたいところ。俺が炎系の魔法しか持つてないのもそのためだ。

まるちーさんの回復魔法でみんなの準備が整った所で、一際多き轟音が洞窟を包む。

奥の暗闇の中からぎろりと光る目玉が6つ。敵は3体？いや、1体？

ケルベロスって奴か！ なんかすりつい禍々しいオーラ出てるし。

「…！ こいつがこの洞窟の瘴気の原因か！」

「みんな、とりあえず距離を…」

先程の反省から先にファイヤーウォールをかまそうと思った瞬間、自分の横にふわりと生温かい風が通る。あまりに一瞬の出来事だったので、視覚や痛覚が追いつかず現状を理解するのが僅かに遅れる。

そして遅れて来る衝撃。左手の感覚が無くなる。

視覚がようやく現状を捉える、それを見て混乱していた痛覚がまともに機能する。

(見なきや…よかつた…?)

俺の左腕の上腕三頭筋辺りが、その、引きちぎられ。骨も、見えちやつたりして。

「え、あ、うああああつああ――――ツ！？」

やはりこれは夢。

夢であつてほしいと全身全靈を込めて願つた瞬間だつた。

15話 暮にしてはリアル過ぎませんか？（後書き）

戦闘描写がもうとつまくなりたい（迫真）

16話 激流に身を任せたレベルじゃ

もう既に痛いという単語すら口から出ない。人間は死ねるような激痛を味わっている時はただ叫ぶことしか出来ないということが身に染みて解かつた。解かりたくも無かつたけど！

俺はその場に膝から崩れ落ちていた。左肩付近の筋肉が半分くらい無くなっている。そこから血がもうドバドバ出てるけど、手で押さえても全く止まる気配がない。強く押せたら押せたで更なる激痛が俺を襲う。

「マルチー！ シエルを…！」

「つああつー？」

次に悲鳴を上げたのは まるちーさんか？ くそ！ 一体何だってんだ！？ おいファイター一人何とかしてください！ そんな所に突っ立てる場合か！

「速い！？」

「バックス後衛の一人を狙つてくるなんて！ …伏せろ！」

伏せろって誰に対して！？ でもとりあえず俺も伏せます！

今度は後頭部をかすめるように風が切り、魔導士の帽子が飛ばされる。目の前に転げ落ちた帽子は壁の一部がパッククリと切れていた。顔を上げると前方5mくらいのところで、先程の禍々しい瘴気を放

つケルベロスが振り向いて、ドス黒い瞳をギラつかせながら、涎を垂らしてこちらを威嚇していた。向かつて右の頭は音を鳴らしながら未だに赤黒い肉を噛んでいる。

まるちーさんは…？ 倒れているけど… 遠くからなので死んでいるのか気絶しているだけなのか解からない。そもそも…そんなの確認している余裕すら無い。

『グゥウウウ！』

『ピチャヤ、クチャ…』

くそ、ケルベロスってこんなに素早いのかよ… 頭が…ボーッとしてくる… 出血のせいか… 体に力が入らない…

すぐさま俺達のフォローに入ろうとファイター一人が横からケルベロスを斬りつけようとする。しかし剣は空を切るのみ。気づいた時には、全く正反対の方向まで距離を取られている。P o n 太さんが俺の前に立つてカバーしてくれているみたいだが、Y A S H I さん一人では奴を捉える事が出来ない。

あの速さでは剣や矢ではまともな有効打を与えることが出来ない。だが、足止めに広範囲の魔法を使おうとしても…

『ガアツ！』

再び側面から神速の如く飛びかかり、俺に襲いかかる。反射的にその場を飛びのいたが、今度は奴の鉤爪に脹脛の肉がバツサリと引き裂かれてしまい、着地のバランスが取れずに地面を転げ回る。畜

生！ これじゃあ立ち上がることも出来ない！

向こうとしてもソーサラーは天敵なのだろう。だから優先的に潰す。魔法を使わせる暇も与えてくれない。最初にソーサラーを潰すと味方はそいつのカバーにも回らなければならない。その分攻め手が限定されてしまうのだ。

こうなってしまえば相手の完全に思惑通り。後はファイター達の動きに気付けながら、その素早さを生かした一撃離脱の戦いに持ちこめばよいわけだ。

「こんな……化け犬野郎に……」

人間4人が完全に手玉に取られるなんて。何か手は……

「この野郎！ ちょこまかと！」

YASUさんとPohn太さんが必死に剣を振り回して相手を捉えようとするが、圧倒的なスピードに翻弄され全くカスリすらしない。ケルベロスは俺に動きが無いと見ると、ファイターの一人に狙いを絞つて、その鋭い鉤爪と頑強な牙で攻撃を仕掛ける。フレイムレーザーではとても狙えない速さだし、何より二人に攻撃をしつつも3つの頭のどれかが常に俺の動きを見張っているようだ。変な素振りを見せようものならすぐにこちらに襲いかかつて来るのであらう。完全にジリ貧の展開だ……

4人で挑んでも全滅なんてこのゲームの中では良くあつたことだ。だが、この夢なのかよく分からぬ世界では、実際に痛みを味わうことになる。死んだ後町に戻されて生き返ることが出来るとしても、死ぬまでに何をやられるかわかつたもんじやない。参ったしても向こうが手加減してくれそうにないし、体食われそうだし……という

か一々グロい。血生臭い。

何か無いか…俺の魔法…わざわといつちを狙わせて近距離で叩きこむか? フレイムレーザーならギリギリ間に合つかどうか。…これじゃあ本当にマンガだな。

ウイザードロッヂはさつき落としたしこいつで仕留められるかどうか解からないが…少なくともこの一発を外したら間違いなく次は即死だ。魔力を集中させた時点ですぐに相手は気づくであろう。

だから、頃合いを、タイミングを、ギリギリのところまで…来るなよ…いっちはんづくなよ…向こうの反応が最も遅れる体勢になる時を待つんだ。まだ一人に注意が行つてゐるうちに…ゲームの中だったたらこのギリギリが一番楽しいはずなんだけどな…生憎俺にそんな性分は無かつたようで…今だ!

「フレイム…！」

銃を作った右手の人差指に魔力が集中する。当然相手もこちらに気づき、恐ろしい速さで方向転換し、突撃して来る。動きは捉えられずとも最短で来るのなら直線を通る！

「レーザー！」

俺の指から赤い閃光が放たれ、本当に銃でも撃つたかのように反動で腕が跳ね上がる。

その鋭い軌跡の中に…生命の姿は無かつた。

(よ、避けられた！？ デジ、ヒ？)

俺の視界前方360。『奴の姿は無い、ということは…

「上だ！」

YASUさんの声。

上… 跳んだのか…！？ 俺を狙つて、来る…なら。

「…ラピッドオツ！」

狙いを付けてる余裕なんてない。反動で上を向いたままの指に魔力を込めて撃ちまくる。僅かに悲鳴にも似た唸りが聞こえたと思った瞬間、俺の目の前に蜂の巣にされた化け物が落ちて来る。胴体からモロに落ちたし、かなりの重傷を負わせたのだろう。

コウモリ相手には長時間の掃射のために魔力を集中させたけど、本来はこれが（フレイムレーザー）ラピッドの正しい用途。チャージ時間が滅茶苦茶短いので、インサイト接近戦で非常に使える魔法だ。攻略サイトでもオススメされている。最初に撃つたのは威力が欲しかったから普通のレーザーだったんだけどさ。とつその判断が間に合って助かった。

『グ、ウゥウ…！』

まだ生きているのか！…いや、二本の首は倒れたままだ。最後の一頭が何とかして一矢報いようと必死に体をばたつかせる。

「手こりゅらせやがつて…」

俺の指から放たれた細い閃光が最後の一頭の脳天を貫く。三つ首

の化け物は今度こそ動かなくなり、それと同時に洞窟の中の重苦しい空気が消える。

魔物の瘴気から解放された洞窟は、本来の心地よい魔力の波動を取り戻していた。岩場がやんわりとした優しい光を放ち、俺達の戦いを労ってくれているようだ。

「…終わりましたね」

「シエルさんがいなかつたらどうなつていたことか…」

ほんとだよ、全く。

…あれ？ 何か痛い。左腕が凄く痛い。そつだ、派手に噛み合がれただんだけ。

「こきやああああ――――――」

戦いの終焉と共に脳内の興奮性伝達物質の分泌が終了。ちーん。むしろ空氣読めよ俺の脳！

「マルチーさんは？」

「うーん、いたた… あれ？ みなさんご無事だったんですね？」

「早く治してええー！ 死ぬ――つ――」

「動くとますます出血が…！」

もう嫌だ！ 痛い！ 左腕が使い物にならなくなつたらどうする気だ！

で？ 結局これつて夢じゃないの？ 覚める気配が1ナノも無い

んですけど！

こんだけ腕を痛めて現実ではどんな状態になつていいのかも逆に
気になるけどやー。

いや…本当に…ゲームの中の世界にトリップしてしまつたのか…
?

17話　この時、始まりを知りました

回復魔法とやらは凄いものだ。現実世界ならすぐにでも病院に突つ込まれて緊急手術を行うような重症でも、ものの数分で治してみせた。そのあと洞窟の精霊さんがなんかお礼とか言つてきて無事クラスト終了。俺達はすっかり暗くなつた夜の町に戻り解散した。

これから自分は一体どうなつてしまふのか。ずっとこのまま魔法使いシエルとして生きなければならないのか。そんな不安に駆られつつ、俺は宿屋に入つて床に付いた。

そして翌日。

「注文はー？」

「Bランチで……」

大学の学食なう。

……

……

……

……

もしかして　夢だった？

目が覚めた矢先に入つて来たのはいつもの見慣れた天井。見慣れた光景。見慣れた部屋。布団、いつも俺の顔。：いや、いいんだよ？　人間ありのままの自分が一番さ！

もちろん自分の体には何の異常も無いし、夢の痕跡が落ちていたと言うことも一切無い。朝一番にゲームにログインしてみたが、シエルのステータスはそのままであった。4人で晶靈の洞窟をクリアしたなんてログも残っていない。

：とにかく、とてつもなく生々しい夢だった。ゲームの中の世界にトリップする夢など最近のラノベの読み過ぎであろうか。今度はなんか別の、もっと真面目な評論っぽい本とか買おうかなあ。

食堂の光景も相変わらずだ。12時ともなると、授業がある日は座る椅子も無いほどの大盛況ぶりだというのに、長期休暇中の現在は人もまばら。いやー相変わらず落ち着くわ。

ん？　あそここのテーブルに座っているのは同じクラスの…内山、だっけ？　男4人に女子3人。体格もいいし髪型もチャラいし、リア充だなあ。他のは知らない顔だし、サークルの集まりだろうか。まあいいや、元々そんなに話すほど仲良くないし放つところ…つて、何で近づいて来るんだよ。

「おい高瀬！　聞いたか！？　伊藤の話！」

今時の女子にいかにもウケそうなすつきりとしたクセの無い顔立ちだけに、その表情が彼の感情をストレートに表している。何焦つてるんだろうこいつ。

「伊藤つて……あの伊藤？　あこつがどうかしたの？」

「死んだって！……今朝あこつの家のなかから遺体で見つかったそうだ……！」

……………
は？

いや、え？

「さつあ伊藤と同じマンションに住んでいる矢野から連絡あつてさ、これから学科のみんなにも回そうと思つていたんだけで……」

「こや、おこ、伊藤が死んだって……何で！？」

「詳しきは俺も知らねえよ。矢野からちよくちよくメール來てるけど、とりあえず事件とかではないらしいみたいでさ！」

「伊藤のマンションの場所わかるか！？」

俺は内山に詰め寄る。彼はえらく困惑しているようだが、普段はクラスの中でも空氣な存在の俺が、こんなに声を荒げているのだから当然と言えば当然か。

「ど、どうしたんだよ……そんなに気になるのか？　まあ、お前は伊藤と仲良さそつだつたしな……」

「あ、いや、実は昨日あいつに電話したんだけ出なかつたからさ
……それで気になつて……」

「そうか……それだつたら、搬送先の病院に行つて事情を聞いて来てくれないか？ 警察とかも向かつたみたいだし。俺はクラスのみんなに連絡送つてからすぐについづくからさ」「

そういうば内山の奴は学科のクラスの中でも委員長的存在であつた。リア充でしかもまとめ役だなんて、いやリア充だからこそまとめ役なのだろうが。こういう時の彼の冷静な判断には舌を巻くばかりである。現場の方は矢野がいるしな。

「わかつた。俺はそつちに行く。で、搬送先の病院は？」

胸騒ぎがしたのだ。サイトさんの妙な言葉といい、昨日の電話のことといい、そしてあの奇妙な夢の事といい。だけど、関連性はあつてほしくなかつた。病院に向かつて自転車を全速力でこぎながら俺は、『この胸騒ぎは全て氣のせいであつてほしい』、そう願つていた。

「脳梗塞……ですか？」

病院の窓口にいた警察官に事情を説明し、俺達は一緒に医者の説明を聞いていた。

「詳しくは解剖しないと解からないでしょうが… 病死ですね。外傷が一切見当たらなかつたのでレントゲンとスキャンを取つてみたんですが、ほらここの所が」

医師はレントゲン写真を見せて淡々と答える。頭部、脳の所に大きな黒い部分が出来ており、明らかにそれが死因っぽそうだということが素人目にも解かる。

「あの、本人が死んでいた時はどんな状況だったんでしょうか?」

俺は警察官に尋ねる。

「マンションの管理人さんが家賃を払つてないとかで、今朝彼の部屋を尋ねたそうで、その時にはもう、部屋に争つた形跡も無いし、遺体は薄布団を着たまま眠つているように死んでいたようだけど」

「…死んでからどれくらい経つていてるんですか? 昨日そいつに電話したんですけど出なかつたんで…」

「詳しい時間はまだ出せないけど、死後一日は確實に経っていますね」

医者は表情を変えることなく答えた。その後も俺は警察から色々話を聞かれたが、現場や遺体から考えて事件性は無いと判断された。遅れて内山を含めクラスメイトが何人かやつて来たが、警察官が遺族や学校側への連絡はこちらでやつておくから、君たちはもう戻りなさいと言われ、ほどなく解散。

集まつた人の中には女子もいた。伊藤も俺と同じくクラスではそこまで目立たない存在であつたが、しばらくの間共に授業を受けていた人物が急死したとなるとやはり気になつたりするのだろうか。

単に野次馬根性だったり……ってこれじゃ俺が捻くれているだけか。

家に帰つてもゲームにログインする気は起きない。あいつが死んだばかりの時について理由もあるけど、それ以上に何か嫌な予感が俺の頭の中を漂い続けていたからだ。でも、どの道今夜はサイトさんに事情を伝えるために入らなきゃいけないか……

何となく普段はほぼゲーム専用と化しているテレビを付けてみる。そのテレビゲームすら最近はやらないが。夕方の特に何の面白味のない地元のニュースをぼんやりと見ていた。

『まだまだ厳しい残暑が続いているのですが、この時期こそ体に注意してください。特に脱水症状から引き起こされる脳梗塞！ 決してお年寄りだけの病気じゃありません！』

『先日は市内の20代の主婦と30代の男性が脳梗塞で死亡するという痛ましい事例も起きました。しかもそのどちらも朝、眠ったまま死んでいたというのです。専門家の意見によりますと、寝ている時の発汗は脱水状態を引き起こし易く……』

18話 徐々に異変が表れました

【クエスト】

『晶靈の洞窟に立ち込める瘴気の謎』

(BOSS) ケルベロス

攻略法：このゲームではお約束の初見殺しのボス。動きが滅茶苦茶速くて、通常攻撃が非常に当て辛い。おまけにHPと防御力の低いキャラクターを優先的に狙つてくるため、ボス戦開始時にソーサラーが瞬殺なんて事態も珍しくない。実は移動には一定のパターンがあるようで下記の図を参考にして立ち回れば、あまり被害を受けずに勝利できる。

本当に攻略サイトの管理人さん、それと先駆者たちにほんと言わざるを得ない。

一応このサイトの掲示板の方にもソーサラーのフレイムレーザーラピッドがケルベロス相手に結構使いましたよって書きこんでおこう。

…違う。本題はそこじゃない。昨晚のあれが夢だったの違うのなら何故その中にこれが出て来たのか、ということだ。俺はここページは見たことがない。始めからネタバレすると面白くないので、まだ挑戦していないダンジョンのボスが何だとか攻略法はどうとかは元々全く見ていないのだ。

夢つていう奴は原則自分の頭の中にある物しか出てこないはずだ。たまーに、夢の中でまだ発売していない漫画の新作が登場したりもするが、そういうのは大抵読めないようになっている。一度夢の中で無理やりページを開いてみたら中は真っ白だった、とこうじてえらく憤慨したこともある。

じゃあ、あの夢は一体何だったんだ。

午後10時、ゲームにログイン。実は6時から1時間おきに入っては出てを繰り返していたのだが、いつ入ってもサイトさん、もしくはAseiliaさんや×ぽんさんがログインしていなかつたのだ。とりあえず彼らには事情を伝えなければと思つていたが、こんな時に入つていないなんて…

不吉な予感が脳裏をよぎる。単なる思い込みかもしれないといふのに。いや、普通に考えてそっちの可能性の方が高いといふのに。伊藤はたまたま死んだだけ。その可能性は否定できない。寧ろゲームが死に関係しているなんて話よりよっぽど現実味を帯びているじゃないか。

はは、何考えているんだる、俺。マンガの読み過ぎだ。

YASS「じんばんは シエルさん」

シェル「こんばんは。それとすみません。今日はすぐ抜けないといけないんです」

YASU「何か用事ですか。まあ今日はみなさんも揃っていないようですし」

シェル「YASUさん。昨日何か変わったことはありますでしたか?」

昨日と同じだ。俺はサイトさんと全く同じ質問をしていた。だってそうとしか聞けないじゃないか。ゲームの中に入った夢とか、アホ臭くて。

YASU「私は別に何も。変わったことといえば、今日になつてサバーバーが快適になつたことくらいですね。8時に入ったのに軽い軽い」

シェル「そうですか。運営が対処してくれたんですね」

YASU「やんわりは何も無いのか…いや、彼も言つのが恥ずかしいつただけで…

YASU「もしかして変わつたことって例の掲示板での噂ですか?」

シェル「掲示板つてどこのですか? 私は攻略のやつしか見てない

んですけど」

YASU「昨日から変なスレッドが立っているんですよ。『このゲームはヤバい』とか、『ゲームのキャラクターになった夢を見た』とか」

俺は息を飲み込んで即座にゲーム掲示板の一覧を開く。だがそんなタイトルものは一切無い。あるのはいつも新参、古参用の攻略、質問用スレ、適当な雑談スレ、職業などのスレ、キャラ萌え…

シエル「すみません。詳しいスレタイ教えてくれませんか?」

YASU「もう済されたのかな? カなり荒れてましたからね」

シエル「そうですか。お騒がせしました」

YASU「シエルさんもそういうお話とか好きなんですか?」

シエル「友達がこんな噂があるって言つて来たから… 単なる荒らしどかならいいんですね」

YASU「他の所のゲーム板とかでは随分このゲームが叩かれているみたいですからね。ありもしない大金で乞食共を釣つているとかで。その多くは登録が間に合わなくてプレイできない人たちみたいですが」

シエル「僻みで変なスレ立てまくつて、荒らしているんですかね」

YASU「もうこいつでいいでじょ」

「違う」

俺はディスプレイの前で呟く。書き込みこそしなかつたが。

『ゲームのキャラクターになつた夢を見た』

荒らすならもっと別の言い方があるだろ? 他にもいるんだ。
おそらくサイトさん達も同じような目に…

単なる不吉な思い込みだと思っていたものがだんだん現実味を帯
びてくる。ゲーム攻略掲示板は公式側公認として設立されている。
向こうがこの事情を知つてしようがいまいが、ゲームそのもののマ
イナスになる発言をされるのであれば、即刻削除されるのは納得が
いく。

だつたら… もつと別の所だ。最大手の総合掲示板とかだつたら
どうだろ? あそこならスレッドの数も半端ないし、削除人の目
も行きわたり難いんじゃないだろうか。

俺はゲームを抜け、このゲームに関する情報を載せているありと
あらゆる所を巡った。この言われも得ぬ不安を何とかして誰かと共に
有したいと言つ衝動に駆られて。

18話 徐々に異変が表れました（後書き）

ネット用語とかあまり書かない方がいいんでしょうけど。
要望があつたら注釈入れます。

19話　「」で○△△繋がります（前書き）

本当は避けたかった説明回。でも仕方ないね。

「今日もお疲れー」

『かんぱーいー』

「…乾杯」

俺はネット上の様々な所を巡り、最終的に一つの地へ辿りついた。日本最大級の某電子掲示板の中でも秘境、一般人お断りの異界の地、その名も「オカルト板」。まともな神経をしている奴は見ていけないと散々外で言われてきただけに、そこに入るのにはちょっと勇気が必要だった。実際に入つて数分ほど後悔の嵐、だがその中でようやく俺の探し求めていた言葉があつた。

この「アカシックドミネーター」というゲームについての黒い噂。知らないうちにゲームの中の世界に入つていたとの文章。そこでの体験。もう出血しまくり、手足とか吹っ飛びまくり、一度とあんな体験はしたくない、など。

途中から元々の住民が面白がつて、これは呪いだとか、安易にアカシッククレードとかいう単語を使つたからだとか、おめえここ（頭）大丈夫か？などと、茶々を入れる文章が続いていた。そつから先は… まともな神経の持ち主には苦痛しか感じなかつた。

やはり自分と同じ体験をした人物がいる。

仲間がいるかもしないと知つて一筋の希望を持つた。だが、そ

「から先は？ 自分と同じ目にあつた奴がいるとしてこれから何をすればいい？ ロンタクトを取るうにも匿名掲示板だし。

他のWebサイトでは「ゲームの評判を落としたくて変な噂を流している連中がいる」「構つてちゃんの荒らしさ無視の方向で」「むしろ賞金のライバル減らしじゃね？」「大体ゲームの中にトリップとか完全にガキの発想じやん。俺だったらもつと上手い方法考えるわ」「最近ネットに消防、厨房増えすぎ、ネット利用の年齢制限をしろ」などなど。全く取りつく瀬も無い。

結局夜中の3時まで粘つたが、サイトさん達は表れなかつた。唯一話が通じそうな人たちとも会えず終いだつたのだ。俺も睡魔には勝てず若干の不安を抱きながら床に付いた。もちろん寝る前は念のために水分補給をしつかりと。

で、

「シエルさん… 何か浮かない顔してますねー

「何か考え」と?

「まあ… そんなどいろです」

「じ覽の有り様だよ！

やつぱり夢じゃねよこれ！ 夢かもしないけどおかしいだろ絶対！

気がついたら再びこの世界について、またもやシエルになつていて、

そして例の如くパーティー仲間の3人に引っ張られてダンジョンへGO！ またもやお約束の如く手強いモンスターが表れて、最終的にはガーゴイルの群れ！ 昨日と同じように至近距離からのフレイムレーザー狙つたんだけど、今回は間に合つたのか間に合つてないのか。いや、敵の脳天はふつ飛ばしましたよ？ でも俺を狙つて来た奴の腕の勢いは止まらず、俺の手首に直撃、そのままボロリ。昨日に引き続き、俺は両手を吹つ飛ばされるという、現実世界ではなかなか滅多に無い体験をすることが出来ました。ちゃんちゃん。両手は今ではぴったり元通り、回復魔法あればもう外科医いらなくね？ そんなこんなで、今日は早めに依頼が終わつたので仲間と一緒にモナドの酒場で飲んでいるのだが…

「はは～ん、さてはお前だけジュースだから拗ねてるな？ お前も飲んでみるか？」

YASUさんが赤ら顔で俺に酒を進めようとしてくる。完全にオヤジだ。確かにメンバーの中では俺は群を抜いて最年少だけどさ、肉体的には。こんな口リ口リな少女の体じゃ、話す時に一々上を見上げないといけないし、運動能力も落ちてるし。高い所の物に手が届かないわ、そしてそんな俺の様子をニヤニヤしながら見つめる周囲の男どもの視線のキモいこと！ あと女言葉を使い続けないといけないのが地味に辛い。書き込むと違つてどうしても素が出るもん。実際に女声だからいいけど、性同一性障害の人つてこんな感じなのかな。ちょっと甘く見てたわ。段々自分自身も気持ち悪くなつてくる。

しかし2度この世界に来て見て、新たに気づいたことがいくつかある。正確には違和感を覚える所が何箇所がある。

まず気になるのは何故他のパーティーメンバーは俺の様に意識が

同化していないのか、ということ。実際しているけど単に言わないだけという可能性も捨てきれないが。しかし、他の人のしゃべり方、ひいては性格が微妙に違うのだ。YASUさんはチャット上では礼儀正しく細かい気配りの出来る人だ、しかしこっちの世界ではこんな風に俺に対してオヤジ臭い絡みを見せたり、言葉使いも少し悪い。対してまるちーさんはチャット上では割とぶつからばつな話し方だけど、こっちの世界ではいかにも聖職者つて感じの物腰丁寧な人だ。キャラになり切って中身の性格も変わる……つてことはないだろう。そもそもこのゲームのアバターに性格などの詳細な設定などない。

気になること2点目。世界観が全体的に妙に日本の。ゲーム画面上は表示されないが、料理はこちらの世界、というか日本人にあつた味付けだと思う。使っている材料もそこまで物珍しいと感じず何の違和感も無く食べることが出来る。ゲーム中では入れないトイレスも水洗式。ファンタジーの世界なのに変なところで科学が発展している。

そして何よりも一番気になるのは、ゲームに比べて遙かにモブキヤラ、つまり一般人が多いこと。実際に人が多く住んで、町が出来ているという点に関してはこれが正しい姿なのだろうが、その多くが日本人の顔をしていると言うことであった。最初来た時は夢だと決めつけていたから何とも思わなかつたが、街並みはヨーロッパ風なのに住んでいるのは日本人だというはどうにもおかしい。別に他のアジア系の人と混同しているわけではない。中国、韓国、モンゴル、インド、ベトナム、タイ……詳しく国籍まで言い当てることは出来ずとも「日本人以外の人」ということならば大体見分けることが出来る。町を歩いている人の大半はほぼ間違いなく日本人だ。「ゲームで表示されるモブキャラ」は大抵欧米風味な顔なだけに、妙な違和感を覚えずにはいられない。

（はあ……でも違和感を覚えたところが今とこのままじつじょも無いんだよな……）

今ここで、ここはゲームの中の世界だ！ と声高に叫んだところで何になるだろう。自分と同じ境遇の人物が他にいるという可能性はどのくらいだ？ 下手したらこの世界でもキチ イ扱いされてしまうだろ？

（とりあえずは今日のクエストも無事に終わったし後は夢が覚めるのを待つばかりか……昨日もそつだつたし帰れないことはないだろう、多分）

俺はローストチキンを齧りながら柑橘系のジュースでぐいっと流し込む。…女の子だからすぐにお腹いっぱいになっちゃうよ。飯自体は美味しいのに、もつたいない。

仲間達は酒が入って勝手に盛り上がりちゃってるし、適当に飯食いながら周囲の観察でもするか……何か色々手掛かりが得られれば……

その時店の玄関の鐘が鳴り響き、新たな客の来店を告げる。酒場は繁盛しており客の出入りは引っ越しに起こっているため、一々そんなことを気にする客は誰一人としていない……が。

知っている顔だった。俺は思わず目を見開いて瞬きをした。

かつて会った時は装備が多少変わっているが、その風貌は間違いないく彼であつた。痩せ形の体格、バンダナで覆つた頭、全身が身軽な装備で武器も腰の短刀らしき物しかない。あんな職業を選ぶ人はほとんどいない。

俺は久しぶりの再会の喜びと、この世界での遭遇による驚きも手

「さうして運わす話を上げてしまつた。

19話　「」で〇〇に繋がります（後書き）

兄貴が久しぶりの登場です。

「ウーニーさん。」

酒場に入つて、「こりゃしゃこませ」より前に自分の名前を呼ばれたので、彼もすぐにこちらに近づいてくれた。

「ん…？ シエルか。久しぶりだな」

「「」の前はお世話になりました！」

「お前もかなりレベルを上げたようだな

後ろでやり取りを見ていた仲間たちも、彼が気になつたのかのそ
のそと近づいて来る。

「シーフとは…珍しいですね。あなたの話はシエルさんからも聞いてますけど」

「確かシエルと一人でサンマイティ遺跡の50Fを走破したんだって
？ そこまで強そうには見えないけど…」

酒も入っているアーノ太さんの少し失礼な物言いにも、彼は軽く
笑つて返した。

「そりやそうだ。戦闘に関してはてんで駄目だし、正直言つてこの嬢ちゃんにも勝てる気はない。あくまで俺は…泥棒だからな」

「堂々と立つね～」この人へ

謙遜無しに自分は弱いですって言つてゐるのに、何でこんなに格好いいんだろう。みんなも彼に興味を持ったようだが、G.i.l.l.yさんはそれを拒むかの如く顔をカウンター席の方に向けると軽く方をすくめる。

「どうやら満員の様だな」

「あの…… 良ければ私達と……」

「それには及ばない。軽くつまんでとつと帰るつもりだったからな」

G.i.l.l.yさんは踵を返し入口の方に向かつ。人(こんな美少女)の誘いをこうもあつさつと断つてしまつとは…… 根っからの一匹狼なのだろうが。

「G.i.l.l.yさん…… 今も一人でダンジョンに挑んでるんですか?」

「ああ、この前はサンマイト遺跡の60Fまで行つたところだ」

それまで自分たちの話題で盛りがつていた他の客たちも、彼の言葉が聞こえたのか僅かにどよめき始める。「マジか?」「ありえないだろ」。他の冒険者たちもシーフに対して抱いている偏見、先入観を口にする。無理も無いけど。

「パーティーとかは? 誰かと組まないんですか?」

「シーフは口クな戦力にならないって前にも言つただろ? 悪いが

俺は自分のための力しか持っていないんだ

相変わらずこの人は一人で無茶な冒険を続けているのか… ゲームの中だつたらそれでもいいだろう。死んだつて経験値とアイテムが減るくらいで何度も生き返ることが出来る。しかし今この世界では… 蘇生なんて出来るのか？ いや、出来たとしても、毎回モンスター達によつて惨い目に遭わされるかもしれないのに…

「G.I.L.L.Yさん、無茶はしないでください。こんなところで死んでしまつたら何にもなりませんから」

自分でも訳の解からない氣休めの言葉であった。冒険者は無茶をしてナンボ、命を削つてナンボ、そんな空気がここに、この世界にある。というよりゲームそのものの雰囲気がそうであった。解かつてはいるが、気遣わずにいられない。

「ああ、やつするや。お前も氣を付けるよ」

意外な返事。そういつとG.I.L.L.Yさんは右手の人差し指で自分のこめかみの少し上あたりを2、3度突く。

「ハハを、やられたくなかったらな」

この時の俺はどんな形相だつたのだろうか、少なくとも周りの客はあんぐりと口を開けていたような気がするけど。凄まじい勢いで魔女っ子が店を出ようとするシーフの男の腕を掴んだ。まるでスリでもやられたかの如く。確かに一体何なんだとは思つわぬ。

「どうした…？」

「G·i·l·l·yさん… 今、何で…！？」

「お前も勘付いているのか、シエール」

「じゃあG·i·l·l·yさんもがつ…！」

すると彼はすぐに俺の口を押さえつけ、服の首根っこを掴む

「おい、女の子に何するんだ！」

「悪いな。少し借りていくぞ」

後ろから仲間達が、ひいては他の客が俺を助けようと一斉に席を立つが、当の俺が必死に手を横に振り「大丈夫、大丈夫」との合図を伝える。そのまま俺は口を押さえつけられたまま彼に引きずられ、店の外まで出てからようやく解放される。

「ふふあつ… ど、どうしたんですか？ G·i·l·l·yさん…」

「あまりこのことを周りの連中に知らせない方がいい

「な、なんで…？」

「…町の外で話すとしよう

俺達は酒場を離れ、人気の少ない町の郊外に向かう。ダンジョンまでの通り道なので人がいないわけでもないが、周りが身を隠す場所の無い更地なので話を人に聞かれることが無いだろう。俺達は適当な芝生の上に向き合いつつに座り、話を始めた。

2-1話 ハルまで知ってるんですか？

「…で、シール。お前はどこまで掴んでいる？」

先に尋ねて来たのはG.I.さんであった。俺は今知っている、少なくともおおよその確証が得られている事柄を彼に話した。

?ゲームの中の世界は夢幻…なのかもしないが確實に存在し、自分達が何らかの原因で連れて来られ自分の作ったキャラクターと同化している。だが、全ての人人がそうではないっぽい。

?この中に入るのは寝てている時？ 昼寝とかでも入れるのかは解からない。

?このゲームの中で怪我を負つても、現実世界には持ちこさない？ だが、死ぬとどうなるかは解からない。

?現実世界で目覚めると解放される？

?おそらくこのゲームが原因で現実に死んでいる人がいる。

「こんなところですかね… まだ確証が得られてないことばかりですか…」

「このゲームが原因で現実に人が死んでいる、ということばかりでそう思った？」

俺は友人の伊藤の事について話した。年齢20にも満たないのに、朝眠つたまま脳梗塞で死んでいたこと。彼が死んだ日に、市内で似たような死に方をした人達（それも若者）が2人もいること。そして彼と組んでいた人たちが、前日にこの現象の存在をほのめかすようなことを尋ねて来たこと……など。この夢の内容といい、単なる偶然とは思えなかつたのだ。

「なるほど……で？　こつなつたのは何回目だ？　いつからお前もこんな風になつた？」

「2回目です。1度目は单なる夢だと思つていたんですけど……流石に同じ夢を、記憶をそのまま引きついでつことになつちや……」

「と、いふことは昨日……月曜の夜に初めて入り、そして今、火曜日の夜に2回目のトリップ……つてわけか？」

「はい、そうです」

G.I.L.L.Sさんは軽く腕組みをして「ふむ」と考え込む。

「今のが何か？」

「実は俺がここに來たのは3度目だ。つまりは日曜の夜からだな。そして俺が調べた限りでは、この現象は日曜の夜から始まつていて。お前はその時は……何も無かつたんだよな？」

「……はい」

と、いふことは、昨日の사이트さんの発言もつじつまが合つた。この現象が日曜から始まつたと言うのなら、彼らや伊藤もその日の

晩に同じ夢を見て……翌日心配になつて俺に尋ねて来たといつてだ。ゲームの世界に入ったなんて話、普通信用しないしな。

「となると、何で俺は日曜日にして連れて来られなかつたって話になりますね」

「シール……お前男か？」

「あ？　え、いや、その。中身は……やつです」

「まあ、そんなことはどうでもいい。とにかくお前の話で大体の仮説は出来た」

あーあ、つい『俺』なんて一人称使つてしまつた。長年の癖を直すのはやっぱ無理ですよ。性別的にも。いやいや、今はそんなことよりもG·E·L·Y·Aさんの仮説とやらだ。

「今の時点で俺が集めた情報を踏まえて、まず一つ。どいつもこの世界で死ぬと現実世界でも死ぬらしい。絶対、とは言えないがほぼ9割がたな」

「マジッすか……」

「他に取りこまれた奴らの話も盗み聞きしての結論だ。一曰田にこの世界に取り込まれた連中の中でモンスターに殺された奴が翌日からログインもしなくなつたらしい。翌日、この世界にも存在しなくなつている。おまけに月曜の朝から火曜にかけて脳梗塞による若者の死者が続出している。不自然なくらいにな」

確かにそれは絶対……とは言えないが真実味を帶びている。とい

うか他の所でも若い人が脳梗塞で死にまくっている時点でほぼ限りなくクロに近いんじゃないのか。

「マスクや警察は取り上げたりしないんですか？」

「事件性はないからな。どれもこれも朝眠つたまま…まあ現代人の不養生に対して注意喚起をする程度に留まるくらいだろ？」

「だよな。朝眠つたまま死ぬ、眠つてから死ぬということによつて、死者の共通点がこのゲームのプレイヤーだと気づいてくれる可能性も期待できないし…。」

「2つ目。この世界に取りこまれることは何らかの条件があるみたいだ」

「条件、ですか。ランダムって可能性は？」

「それも否定できない。だが、今まで俺が見た同じ境遇の奴らにはいくつか共通点がある。…シエル。お前はこのゲームを始めて何日だ？ それと今のレベルは？」

「11日目…ですね。レベルは30です」

「お前の友人の伊藤つて奴は？」

「詳しい日数は解かりませんけど、始めたのは俺より遅かったはず…プレイ時間は俺より長いと思いますけど。カウントされてないんで何とも。レベルは最後、日曜日が終わつた時点で見た時は35でした」

「…ここに取り込まれてているのは全員高レベルのプレイヤーだ。俺が見た分では、レベルは今のところお前が最低だな。少なくとも30以上」

「れ、レベルですか？」

待てよ。確か日曜日の時点では俺はレベル29。しかし、月曜日には30に上がった。なるほど、これだとぴったりだ。それだったらレベル30未満の俺の他の仲間が取り込まれていないことも合点がいく。

「つてことはレベルが低いと、こっちには連れて来られない。死ぬ危険性が無いってことなんですか？」

「これも確認こそ無いがな。だがもし、レベルの低い奴までこっちに来ていたらもっと派手に死人が出ているだろつよ」

このゲームのプレイヤー人数はおよそ3万人ちょい… 難易度はかなり高いし、全滅した経験の無いプレイヤーはまずいないだろう。つてことは、下手したらかなりの大惨事になるんじゃないかこれ！？

2-1話 エリオで知っている事ですか？（後書き）

推理回…といつか会話回。
しかし順序踏まつとすると時間かかるなー

22話 僕が何か出来たりしない？

ゲームが原因で人が大量に死ぬ？ だが、世間や警察はそんな話を信じてはくれないであろう。当事者でない限りこんな漫画みたいな展開は…

「何とかしてこれを止めることは出来ないんですか？」

「…………」

G.I.L.L.Yさんは何も答えない。目を瞑つて何かを考えてしまっているようだが。

「シエル、お前はこの現象はなぜ起きていると思つ？」

「なぜって言われても… 何て答えればいいか…」

「この現象は自然に起こっている物なのか、それとも誰かが人為的に起こしている物なのか… お前はどうだと思つ？」

止めるにしても原因を、というわけか。自然に起るって、異世界にトリップする自然現象とかたまつもんじゃない。誰かが人為的に起こしている… こっちの方が可能性は高くないか？ 異世界召喚モノとか大概そうだし。漫画とは違うけど。

しかし、誰かが何かのために何らかの方法でこの現象を起こしている、となると色々つじつまが合う部分が出て来るぞ。レベル30以上でこの世界に連れて来られるとか、明らかに人間が調整したようなものだ。それに、この現象が始まったのは日曜の夜。日曜…

日曜つて確か…

「賞金一千万円のスペシャルクエスト… つてことは…。」

「わざと考えるのが妥当、だよな」

偶然にしては出来過ぎてる。無料のネットゲームで一千万の賞金
といつ胡散臭い話もそうだ。まさかこいつなることを知つていて、
どうか最初からそれが目的で？

「ゲームの製作者が何かの理由で俺達をこっちに連れて来ているん
ですか！？」

「……」

「あれ？ 何で無言で考え込むんだG.I.L.L.Yさん。結構筋の通
つた推理だと思つたんだけど。

「…確かに、その仮説は筋が通つているが」

「G.I.L.L.Yさんは違つと？」

「否定は出来ない。だが全て仮定で固めた意見だ。他の可能性もま
だまだ捨てきれないってわけさ」

「… つーん、ゲーム製作者以外の人の可能性ねえ… 現時点では謎が
多すぎるし、犯人を決め付けるのもどうかといつわけか？ また別
の第三者によつて引き起こされた事態…

「だが、少なくとも他の奴らのほとんどはお前と同じ結論に至つて
いる。さらには『A・R・クリスタル』とやらがこっちの世界に存

「確かにその可能性も……いや、それだと公式の『レベル1』でもゲット出来る『なんて触れ込みが嘘になるな…』でもその話も絶対つてわけでもないし…」

「とにかく現時点では結論付けるのは早すぎる。原因の根本を突き止めることにしても、もう少し情報が欲しいってわけさ。とりあえず今一番重要なのは自分の身の安全を確保することだな」

「…やんの言つ通りかもしない。田標があやふやなのに下手に固定観念に囚われて動き回つても、かえつて自分の身を危険に晒すだけだ。

身の安全の確保か。今出来ることといえば、いつの世界に来た時は、ダンジョン探索を控えることくらいだな。そして、レベル30以上でこつちに取り込まれるとこことは、仲間内にもしばりゲームのプレイを止めるよつておへべきか？ 理由は向て伝えよつか…

「一応明日、一部の奴らが運営側とのゲームを止めやかねよつて直談判するつもつらしこ。出来れば、ばの話だがな

「やつぱつそれは難しそうですか？」

「向いがこの事態を知つてこようがこまいが、まともに取り合つと思ひか？」

「だよなあ。どちらにしてもゲームを止めるなんて出来つこないし… ん、止める？

「G.i.l.l.yさん。もしかしたら、このゲームを退会すれば全てが済む話じゃー?」

「既に試している奴がいる。今はその結果待ちだ。どうも嫌な予感がするがな…」

取り返しのつかない行動をするにはまだ早い、か。俺なんかが考え付く対応策は全て取られているっぽいな。

「とりあえず今は下手に動かない方がいい。周りの出方を見て、それから次の行動を取る。状況が状況だ。多少の犠牲は目を瞑るしかない…」

「他の人が危険な目にあつても見捨てるべき…なんですか?」

「周りだつてお前の命を優先するとは限らんだろ。自分が生き残るために人と組むことはあっても、みんなで生き残るために危険になるのを承知で組んだりはするなってことさ。俺達は映画のヒーローじゃないんだ」

自分が絶対に生き残つて勝利する主役つてわけじゃない…か。そりやそうだな。G.i.l.l.yさんの言つてることは正しい。おそらく彼も自分が生き残るために俺と組もうとしているわけだ。どっちかが死んでも仕方ない、両方生き残ればそれでよしつてか。現実もそんなんだよなあ。

「他の奴と組むのは構わないが、仲間が多すぎると生じるじがらみつて奴もある。孤独から来る不安や善意に駆られるのはいいが、ほどほどにしどけよ」

セレーナはその場を立ち上がった。

「俺はこれからもう少し情報を集めてみる。お前も何か解かつたことがあれば知らせてくれ。また明日、ここに落ち合おう」

「了解です」

「……つと、言い忘れたがゲームは普段通りやつても大丈夫みたいだ。もちろん全滅してもなんともない。俺自身が試した」

「気をつけのほこの世界にいるときだけでいいってことですね？」

「ああ。それとゲーム内の数値がこっちに反映されるみたいだな。起きている間に色々準備しておいてください」

「……なるほど、わかりました。ありがとうございます」

「じゃあな」

G.I.L.L.Yさんは後ろを向いたまま軽く手を上げると、そのまま町の方角へ立ち去つて行つた。流石はシーフ、もう姿が見えなくなつてしまつた。

俺は帽子を被り直し、これからどうするかを考える。とりあえずは今まま、まだ意識が取り込まれていないパーティと組んでおくか。ダンジョン探索は仮病でも使って控えるとしよう。とにかく彼の言う通り、判断材料が整うまでは大人しくしておいたほうが良さそうだ。もう夜も遅いし、町に帰つて宿に泊まろう。これで現実世界に戻れたら、帰る方法がある程度確立出来るしな。

しかし、G.I.L.L.Yさん。あの冷静な判断力といい、現実では一

体何やってる人なんだろう。でもゲームーなのは確實だしなあ。あまり考えないことにしどいつ、かな。

22話 俺が何か出来たりしない? (後書き)

会話があなことレイアウトに悩むな
…

23話 やれただけのことはやつておかない

「注文はー？」

「エラソンド」

いつもの学生食堂。大学の夏休みはまだまだ長い。

今回もなんとか無事に帰つて「これたな。ずっとゲームの中の世界に取り込まれるというわけではなくて一安心。だがあれば夢でないことは確定。毎晩あんな状態になるのかと思うと、夜寝るのが怖くなつて仕方がない。かと言つて周りに相談できる人もいないしなあ。

仲間が欲しくなる。同じ境遇の仲間が。

しかし、サイトさん達とは未だに会つことが出来ないし、YASUさん達パーティーのメンバーを巻き込むわけにもいかない。現状で頼れるのはG.I.L.E.さんだけだ。今夜、彼が持つてくる情報に期待することしか出来ない。他力本願だけど。

逆に俺が今出来ることと言つたら、自分のキャラの強化と、仲間のプレイを止めさせることくらいだな。でも彼らには何て言えぱよいのか… 全く正反対のことだし。

「ねえ、聞きました？ 今朝…」

「あらあ、怖いわね……」

「また派閥内で争いが起つるのね…… とつとと政権変わつた方がいいんじやないかしら……」

おーい、食堂のおばちゃんたち。世間話は俺に飯をつこだからにしてくれー
しかしなんだろう。派閥とか政権とか。政治の話？

「あつ、学生さん、『めんなさい』待たせちやつて」

もう50代後半のベテランのおばちゃんが慌てて「飯と味噌汁をつぐ。笑顔交じりのため、反省の色があるのかはやや疑わしい。毎日通つてるし、すっかり顔見知りになつてるせいもあるのだらう。

「何があつたんですか？」

「あら、学生さん今朝のニュース見てないの？ 野口首相が意識不明の重体になつてね、つこかつて「くくなつたつて」

……！？

「就任してまだ一ヶ月も経つてなつてのこねえ…… ひの国はびつなるのかしら」

「え、あの……！ 死因とか解かりますか！？」

おばちゃんは何故そんなことを尋ねるのかと、不思議そうに俺を

見る。

「総理は何で亡くなつたんだっけー？」

「心臓発作みたいよー？ ニュースによると」

「あ、そ、そうですか…」

いかんいかん。流石に総理大臣がネットゲームなんてやらんだろう。ちょっと過敏になり過ぎていいようつだ。総理の年も年だしなあ。心臓発作なんて起こつても不思議じやないし… うん。

「はい、おまたせ」

「あ、どうも」

「そうそう。最近は脳梗塞とかも流行つてるらしいわよ。しかも若い人に。あなたも気をつけなさいよ。水分補給はしつかりとね」

「はは… 気付けます」

食堂のおばちゃんまでが知つてゐるところとは、もう既に結構な数が亡くなつてゐるといふことが…？ ここ数日で若い人ばかりが朝寝たまま脳梗塞で死亡なんて、明らかに不可解だもんな。だが、そこからこのゲームのことに繋がるのかといふと… 期待できない。

元々そこまで量の多くない定食の筈が、今日は中々喉を通らなかつた。自分が死ぬかもしれない状況に身を置いてゐるのだ。なんか病氣とかと違つて実感湧かないのが余計に怖い。これが全て夢であればいいのにとも思う。

…これから親に電話しよう。

家までの帰り道、道端で新聞の号外が配られていた。『野口総理急逝！ 後任は井沢氏か後原氏が有力か？』という、でかでかとしに見出しが目を引く。ついこの間まで、新総理は誰かとか散々話題になっていたというのに、決まった途端にこれだ。本当にこの国で政治は大丈夫か？ 国会とかとともに機能してんのかよ。いつもいつも権力争いのニュースばかりで、肝心の行政に関する話題はない。頼むから今の景気何とかしてくれよ。それがあんたらの仕事じゃないのか？ 国民の税金で食つてるんだからさ、頼むぜまったく。

つて、今こんなこと考えてもそりやうもないか。まずは自分の命が最優先だ。

俺は号外の新聞をバッグに押し込め、家路へと急ぐ。

家へ帰るなり、即パソコンの電源をオン。そしてゲームにログイン。俺も俺で酷い生活してるよな。今となつては生き残るためにどう仕方ないけどさ。

さて、まずは知り合いのログイン状況を確認。誰か… 誰かいないか…？

…いた！ ×ぽんせん！ よかつた、無事だつたんだ！ 早速チャットコールを送りつ。伊藤のことでも伝えなきゃならないしな。

×ぽん（「・・39）「シエルさん！ おまけよかつた。聞いたことがありまするだけぞ」

シエル（「・30）「如何の事ですね？」

×ぽん「あいつは無事か？」

シエル「月曜の朝、亡くなりました。脳梗塞で」

×ぽん「やつぱり駄目だったか…」

シエル「事情はもう尋ねる必要もないですね？」

×ぽん「君もあのおかしな夢を？」

シエル「はい。サイトさん達は無事ですか？」

×ぽん「ああ、サイトもAseleiaも何とか生きててる」

シエル「それはよかつた」

×ぽん「事情を知っているのなら話が早い。俺達に協力してくれないか？ 仲間多い方がいい」

互いに怒涛のチャットであつたが、ここに来て俺の手が止まる。

昨日のG.I.L.Yさんの言葉を思い出したのだ。

仲間を作るのはいいが、それによつて生じる弊害もある。まだ謎が多い段階では、誰かの犠牲が教訓になつて自分が助かる」ともありつむ…

…確かに、これも現実的な意見だ。けど、今ここで下手に断ると、かえつて疑いの目で見られるんじゃないだろうか。この人たちも日曜の夜からゲームの中の世界に入つているはずだ。人数が多い分、それだけ多くの情報を持つてゐるだろうし。

シエル「もちろんです。今は少しでも情報が欲しいので」

×ぽん「ありがとう。それじゃ今夜、向こうの世界の宿屋『アートマー』に来てくれないか？ 僕達はずっとそこにいるから」

シエル「わかりました」

G.i.l.l.yさんと詳しい時間の約束をしていないのは失敗だったかな。でも向こうの時間の経過なんて解かんないし。サイトさん達は宿にずっといるって言つてゐるし、先にそつちから行つてみよう。

G.i.l.l.yさんと詳しい時間の約束をしていないのは失敗だったかな。でも向こうの時間の経過なんて解かんないし。サイトさん達は宿にずっといるって言つてゐるし、先にそつちから行つてみよう。

仲間を作ることによって生まれるじがらみか... あまりあつては
ほしくないけど...

23話 やれやだナの「おせわ」おかなこと（後書き）

本作に出でてくる政治家や団体は、実在する物とは一切関係ありません
ん。

ええ、関係ありませんとも。

24話 手を組むべきだとは思いますが

「よーし、今日はヤーハの森に行くとしよう。」

「「おーー。」」

「あの… すみません。私はバスで…」

火に水を注ぐ発言だと言うことは重々に理解している。とかく、ソーサラーの俺がいないとみんなが探索出来ないことも。だが仕方あるまい。己の命は何物にも代えがたい。

今日も氣づけばモナドの酒場の前。しかしこの世界に来る毎にここに連れて来られるような。ゲーム内でもいつも待ち合わせに使っているせいだろうか？ まあいい。問題はこの仲間たちからどうやって抜け出すかだな。

「どうしたんだシエル。今日は行けないって」

「今日はちょっと氣分が悪くて…」

THE・仮病。古典的な手段だが、一番手っ取り早い訳だ。氣分が悪そーな顔を必死に形作ってみる。どうだ、こんな状態の女の子を危険な冒険には連れていけまい。

「風邪でも引いたんですか？ 軽い病気なら私が治しますよ」

空氣読んでくれよまるちーさん。ていうか何？ プリーストって風邪とかも治せんの？ ますます医者という存在が涙田じゃないか。

「いや…… その…… 回復魔法で治るものじゃないかな…… なんて……」

俺が次なる手は、と困り込んでいると、YASUHIさんが何かに気づいたかのように手をポンと叩き、少しにやついた顔になる。おい、おい、何だ？ 嫌な予感がするぞ。

「マルチー 多分あれだよ。あの日」

「あの日？」

「ああ、シールさんもそんな年頃だしね」

隣で見ていたPON太さんまで、何か納得したかのように腕を組んでうんうんと頷く。

あの日？ あの日ってなんだ。何で申し訳なさそうな目で見るんだまるちーさん。そして、何で微笑ましい目で見るんだYASUHIさん？ PON太さん。

「女の子は大変だよなあ」

…ああ、あの日ですね！ 女の子の日！ その手があつたか！ 女子つて体育の時間の時にもやたら見学してたもんな。高校時代の話だけど、あの中には絶対わざとサボっている奴もいるだろと思つてたもんだ。…いかん、これ以上は女性の方から叩かれる。

「あの、だから今日は……」

「解かつたからそんな顔真っ赤にしなくても

してねえよ。つーかYASUさん微妙にキメヒよ。女の子の視点に立つて解かつたが、こういう時の男の視線つて本当に気持ち悪い。こんな風に見られていたとは。これから気を付けよう。

「とにかく今日は宿屋でゆっくり休みます…」

「お大事にー」

結果オーライ…か？ とりあえずは離脱成功。毎回ダンジョンに行く度に、手足とかふつ飛ばされてたら命がいくつあっても足りないつつーの。毎晩あんな目にあっていると、その内自分の中で慣れときそうなのがもつと怖い。

今日はいいけど明日は何て言つて抜けようか… いいや、また明日考えよ。っと、G.I.L.E.Yさんとの約束もあるけど、味方にこうこうした手前先にサイトさん達の所に向かうとしよう。

さて、俺はそこそこに躊躇つつ、宿屋『アートマー』へ。

現バージョンは試験版だということで、やたら部屋数の多い宿屋でしかないのだが、その内課金制でクラン用の個室としての役割を果たすようになるだろうと言われている。体力の即時回復に、クラン共有の大型倉庫などの便利機能が期待されている。

まあ、あくまでもプレイヤー達の予想だ。それに課金となると俺には縁がない。

おつと、そういう部屋の番号知らないな。フロントに聞いてみよう。

「サイト様御一行ですか… 310号室にお泊りですね」

ゲーム上ではこの人、「宿屋アートマーへよつ」や、「お泊まりはゴールドになります（以下選択肢）」くらいしか台詞無いのに。この世界では充実した仕事生活を送つてそうだ。しかもゲームと違つて、宿の中では多くのスタッフが働いている。何故か全員日本人顔。これも気になるところだなあ。

建物自体も木造と漆喰の造りが何とも言えないレトロな雰囲気を匂わせている。現実世界では隠れ家的宿（笑）とか銘打たれて宣伝されてそうだ。歩く度に床が少しきしんでいるような音も味があるし。地震大国の日本では難しい造りだ。

310号室…あつたあつた。3階は団体様用の客室で俺もあまり行つたことはない。利用するにしても個人用の2階の部屋だつたしな。

「ここのまー！ シエルですけどー！」

3度ノックして名前を告げると、中から鍵の開く音がする。ドアが開けられると、そこに立っていたのはサイトさんだつた。3日も経つていないので随分懐かしく感じる。

「よかつた、話には聞いていたけど君も無事だつたか

「無事つてほどには… 何度か死にそうな目に会つたし。それに伊

藤… 如月の奴だつて」

「彼に関してはその… すまない。俺達がこの世界の事をあまり深く考えて無かつたばかりに…」

俺としては互いの無事を喜ぼうとするつもりだったのが、サイトさんはかなり申し訳なさそうな表情をしている。この世界のこと…か。きっと伊藤の死に責任を感じているのかもしれない。だが、問題はこの状況なのだ。右も左も解からない初日に命を落としたとなればこの人達を責めるわけにもいかない。

「サイト、謝るにしても立ち話は何だろー？」

部屋の奥から男口調の女性の声が聞こえてくる。

「ああ、悪い。や、とうえずは中に…」

誘われるままに俺は中に入る。この世界での頼れる仲間がいるという希望は、胸中に留めていたジョニーさんの嗜めを忘れさせていた。

25話 それがベストヒーリングなら

3階の部屋の内装は、いかにも欧風と表現出来るような木造建築様式となっている。正直2階の部屋を広くしただけなのだが、やっぱり実際に入つてみると高級感溢れる造りのように感じる。広々とした部屋のリビングの一角には約1m四方の木製テーブルがあり、それを囲むようにソファーアーが置かれている。俺はサイトさんに促され適当な席に座った。

部屋の中にいたのは顔見知りのサイトさん、×ぽんさん、Ase liaさん。そして今回初対面となる、このパーティー本来のソーサラー役のにいにいさんだ。

「はいこれ。良く解かんないけど紅茶っぽい飲み物よ」

席に座るなり、にいにいさんが俺に茶を注いでくれる。同じ女性アバターのソーサラーではあるが、三角帽にぱつつくショートのいかにも魔女っ子な感じの俺とは異なり、にいにいさんは赤髪ロングヘアーの大入りた女性の姿をしていて、好みは人によりけりだとは思うが。

「何にせよ、仲間が増えるといいもんだな。こつちも人手が欲しいしよ」

Ase liaさんが奥のベッドの方で、寝転びながら何やら本を読んでいる。おそらく俺と同じで中身は男なのだろうが、折角の青髪の美女女騎士のアバターが色々と台無しだ。

「Aseliaさん、一応体は女性なんですか？その格好はひょつと…」

「ゲームの中なんだし僕にするもんじゃねーだら」

「サービスするのは結構ですけど、乱暴されても知りませんよ？」

Aseliaさんの女性の体らしからぬ無防備な体勢に、×ぽんさんとにこにこさんが苦言を呈す。そういうば、この体であんなことやこんなことも出来ちゃうのだろうか。いや、今の俺はいたい健全少女の体だ。つまりはやられる側。嫌だ、絶対に嫌だぞ。男にやられるなんて。童貞より先に処女を散らすなんてまっぴらごめんだ。…でもまあ、G行為くらいはいいかなあ。折角女の子の体になつたんだし、やらないともつたいない氣さえする。今度トイレとか風呂とか、一人の時にやれないだろつか…

「あの…シエルさんは、どっちなの？ 男？ 女？」

ここにこさんの問いに思わず紅茶っぽい飲み物（味はほほ紅茶）を吹きだしそうになる。やっぱりそれ聞かれるのか… ゲーム内の体の性別はバラバラだとはいえ、中身がちゃんと意識持つてるからな…

「中の人は男です。何かすみません」

「ええ～ シエルさんも～？」

「まあそんなどいだろ？と思つたけど。残念だつたね～ こいにいさん」

困ったように溜息をつくにいにいさんを尻目に、Aseliaさんはベストの上で笑う。

「結局本物の女は私だけか…」

「あ… にいにいさんってリアルでも女性なんですか…」

あー そうなると確かに氣の毒だ。女1人に男4人。これはちょっと不安になるかも。肉體的には女3人、男2人だけど。乱暴を働くにしても… 結構いいシチュエーションになるかもしれない。

「女性プレイヤー結構いるって聞いたんだけどなあ…」

「現実云々の話は抜きにしまじょ。それよりもこれから仕事を話しあわなきゃ…」

いいまとめだ、×ぽんさん。プリーストは大体こんな感じなのかな。そろそろ、俺がここに来たのは自分の身を安全にするためと、少しでもこの世界に関する情報を得るためにだ。途中で煩惱が混じつたので、話が変な方向へ向かつてしまつた。

「それじゃあ、俺…あ…やっぱ俺の方から知つてることを話しますね。情報量はそっちの方が多いでしょつし」

「ああ、それは助かるよ」

もう中身は男って言つちやつたし、一人称も俺でいいや。

とりあえず俺は自分がこの世界について知つてている限りの事を話す。昨日のG.I.L.Yさんから聞いた仮説、俺自身の考えなどなど。ひとしきり話し終わつた俺の目に飛び込んできたのは、皆が一様に

目を丸くして口をぽかんと開けている表情であった。

「あ、あの… 一応これで以上ですけど… 何か…？」

「いや、その… 教えてあげられる」とあんましないなーって…」

「いにいさんか苦笑いしながら、お茶のお代わりを注いでくれる。気を利かしてくれる人だ。アバターと相まって可愛い。現実世界ではどんな人なんだろう。

「じつちの世界に取り込まれる条件とかあまり考えてなかつたな。レベルか…」

「確かに、僕たちの他に取り込まれているのが確認出来た人たちは、みんな古参の人たちでしたね」

「ああ、それにレベルが関係しているとなると、古参メンバーの中で夕凪さんだけが取り込まれてないことも頷ける。確か彼はまだレベル20台だったはず…」

「おいおい。何だか話が予想外の方向に転がつてないか？ こちらが情報を貰つつもりだつたのに。いいんだけどさ。

「シエルさん、これだけの情報は一人で集めたんですか？」

バスケとかやつてそうな感じの爽やかな風貌をした、赤髪の青年剣士アバターのサイトさんが真剣な目でこちらを見て来る。ゲーム上だと気の抜けた感じの人だつただけに、そのギャップにやや戸惑いそうになる。

「いや、他に俺の知り合いでこっちの世界に取り込まれた人がいて、情報の大半はその人から…」

「その人の名前は？」

「Gillさんって人です。シーフの」

「Gill？ 誰か知ってるか？」

皆一斉に首を横に振る。つーかマジかよ。

一応彼と知り合いになつた経緯も皆に話したが、今度はまた違つた雰囲気でその話に聞き入つてゐるようであつた。
いや、何でみんなそんなに真剣なの？ もしかして話しちゃいけないことだったか？

「高レベルのシーフなんて聞いたことないぜ…」

「シーフってそんな使い方あるんだ…」

「シエルさん、今からじゃなくでもいいから彼に会うことは出来るかい？ ゼひ彼にも協力してほしいんだ」

…うわ、参ったなあ。

ソロプレイヤーを信条としてるっぽい人だとは思つていたが、ここまで知られていなかつたとは。確かに知れば興味持つわな。他の人の口から聞けばなおさらだ。

今日会うことを話すべきだろつか？ 彼はあまり仲間を作りたくない感じだったけど…

俺の独断でみんなの仲間に入れるのはどうなのだろう。

迷う。

26話 仲間が増えちゃうんだけど

「それはちょっと難しいです…」

しまった、ちょっと長く考えすぎたかな… かえってみんなの不信感を煽ってしまったかも知れない。

「どうしてだい？」

当然の如くサイトさんも食いつく。つる、当然の反応だな。

「彼はその、あまり人と組みたくないやうな感じなんです。それに次はいつ会えるかも解かないし」

「ふーん…？」

「うわ、すつごい妙なというか、疑わしい顔をしてるよみんな。やっぱりG・E・E・Kさんのことば言わない方が良かつたか？」

「いいんじゃないんですか？ それは個人の問題でしょうし。その内会えたら誘うことにしておこう」

×ぽんさんが話題を止める。つくづく場をまとめるのが上手い人だ。内心はどう思っているのか解からないが。他のみんなは軽く頷くだけであまり納得しているように見えない。

「あ… どにいるのかも知らないなら仕方ないよな。少なくともシエルさんは協力してくれるんだね！」

「はい。俺は是非とも」

俺が即答すると、周りの緊張が僅かに緩んだ気がした。今まで立ちっぱなしだったサイトさんもソファーに腰を下ろす。

「じゃあ、今度は今の俺達のこと話をうかな

「お願いします」

「いにいさんが席を立ち今度はどこからか電気ポットを持つて来て、他の二人にも茶を注いであげる。だから妙な所でテクノロジーが発達しているよな、この世界。ゲームの中だからそこは御都合主義……という事でいいのか？」

「今の俺達の仲間の数だが、総勢で30人くらいってところだ。当然他にもこの世界に取り込まれている奴らはいるだろうが、今のところ口出来ているのはこれだけだ」

「30人ですか。多いよつな少ないよつな…」

「中には大勢で組むのを嫌って、それまでのパーティーだけで探索を続ける輩もいるからなー そのG.I.L.L.Yつて人も大凡そんなクチだろつ」

A s e l i aさん… 先程の俺への対応のフォローのつもりなのだろうか。

「でも、何でみんなで協力しようとしているのか。常に命の危険があるわけだし。単独や少人数での行動にはあまりメリットが

無いような気もするんですが…」

「I・Jで自分自身の正直な疑問をぶつけてみることにする。その理由の一つはG・I・L・Yさんから聞いているが、彼らがそのことに對してどう思つているのかも少し気になったのだ。

「君もさつき言つた通り、賞金一千万円の特殊クエスト…『A・R・クリスタル』がこの世界に存在していると思つている人たちが結構いるんだよ」

「それを狙つたために？　たかだか一千万円じゃないですか。自分の命に比べたら…」

「私もそこまでして欲しいのかな…って思うけどね。でも賞金だけじゃなくてね、この世界を楽しんでいる人達がいるのも事実なのよ。だつてほら、現実と違つて色々凄い力を持つてるじゃない。冒険者つてだけでハクが付くから、異性だつて口説き放題だし」

「どうなんだろ？　本当に楽しめるのかこの世界？　女を口説くにしても死んだらどうにもなんないんだぞ。考え方があまりにも刹那的すぎやしないか。

「みんな現実から逃げたがってるんだよ。どっちか選べつていったら当然充実した方を選択するだろ？　現実では自分の命を賭けて得られるものなんて、たかが知れているしね」

「サイトさん、I・Jたちに来てから言つてることが全体的に暗いよ…

「でも、そう言われちゃうとな。俺はまだ大学の一年だからいいけど、進学や就職に失敗した人達とかは本当に毎日が辛そうだよなあ。

もちろん仕事している人たちは言つまでも無い。自分が享受する現状への不満、そして将来への見えない不安… 現実社会では自分の辛苦からどれだけの対価が生まれるのだろうか。今の俺にはまだ解からない。

「言つなればこの集まつた30人といつのは、まだ現実といつものに未練がある人達つてことです」

「そうなんだよなー 僕も…なんだよなあ」

×ぽんさんの例えは結構的を射ているのかもしれない。俺は今まで現実に絶望するほどの苦難を味わつて来たわけじゃないしな。受験勉強もそんなに頑張つたつもりはない。逆に言えばそれだけ当たり障りのない、つまらない人生を送つて來たということなんだけど。それとサイトさん。さつきから負のオーラ出しまくりだよ。大丈夫か?

「…サイトさんは置いといて、とにかく、この集まりで協力して何とかこの現象を食い止める方法を探しているんです」

「食い止めるつて… 何か方法があるんですか?」

「それがさつぱりだから今こいつしてこの世界について調べているんだよ」

「ああ、なるほど。Aseliaさんがさつきから本を読んでいるのはそのためか。体勢はともかくとして。」

「もちろん現実世界からの行動も色々試してみてるのよ。でも他の人に話しても信じてくれないし、直接運営に取り合つても相手にさ

れないし…」

「一度みんなで製作会社に乗り込んでゲームを中止させよつて話もあつたんだが、速攻で通報されて提案者が書類送検にあつたしね。現実に証拠が存在しないから外部から働きかけるのがほぼ無理な状況なんだ」

だからゲームの中から何とか出来ないかと試みているわけか…しかし、そんなこと本当に可能なのだろうか？

「A・R・クリスタルさえ見つかれば、こんなふざけた現象も止まるかもしれないって話も出ている。それでダンジョン探索に精を出す人たちも…」

「みなさんはどう思つておられるんですか？」

「確証の無い話に命は賭けられない…かな」

「良く言えば慎重。悪く言えば臆病、か。でもまあ、当然だな。

「だから今はとにかく安全策を取つていい。この世界に来たらダンジョンなどには向かわない。モンスターとの戦闘も出来るだけ避けろ。情報収集も基本的に町中だ。ゲーム画面に比べると人は腐るほどいるからな。実際に中に入つてみるとこの世界もめちゃくちゃ広いし。少しでも人の手を借りたい状況だよ」

「となると、今はみんなで手分けして世界を回つていい状況というわけですね？」

「そういうこと。その都度こちらの世界で全員が集まらなくてよい

いように、新しく発見したことがあつたら、攻略サイトの専用掲示板に書き込んでいる。パスワード制のな

「ここでも掲示板か。しかもよりによつて攻略サイトの。

「管理人の夕凪さんを説得して専用の奴を作つてもらつたんだ。他のSNSじゃやり難くてな。警察沙汰にもなつたから、どこから目を付けられているかわからんないし」

それが大勢の一般の人人が利用するSNSは避けた理由か。個人で作ったWebサイトなら、監視の目も届かないだろうということか。

しかし、警察沙汰にまでなつたのは初耳だつた。こんな状況になつたのだから何が何でもゲームを止めようとする気持ちは解かるが：焦つて動いたせいで、その当人にとつては更に事態が悪くなつてしまつた良い事例だ。

こんな異常事態だからこそ、冷静な状況判断と慎重な行動を心がけないといけない。：こう考えられるのも犠牲者といつ名の先駆者がいるからなんだよな。昨日のG.I.L.Yさんの発言を心で理解出来たが、同時に俺を後ろめたい気持ちにさせる。

26話 仲間が増えちゃうんだだけど（後書き）

少しずつ1話あたりの文字数が増えてくるとこ、ついマジック。

27話 いんな仲間で大丈夫でしょうか

「掲示板のパスワードは半角で『yuuu89-1』だ。これは絶対に現実世界、ゲーム画面上でも人に教えないでくれ。この世界の中でしか伝えてはいけない」

もう表向きには出せない話題だし、これは当然の措置だな。

「この掲示板は新しい情報を投稿する場でもありながら、各人の生存報告も兼ねている。これは毎日絶対にすること。洒落にすらならない本当の意味の生存報告なのだ。書き込まなかつたら死んだと見なされる。

「教えてあげられる」とはこれくらいだな。他に何か聞きたいことある？」

「えっと……皆さんはこれからどうするつもりですか？」

「まあ……各自に分かれて町で情報収集かなあ。のんびりしたいなら、ここで観いでいいといつていいくけど」

×ほんさんはやや決まりが悪い表情になる。つーか、いいのか？そんなゆるくしちゃって。さつきまでの真剣な雰囲気はどうくや

う。

「人に直接迷惑がかかるようなことをしなければ、何をしても特に咎める」とはないよ。俺達にそんな権利も無いしね」

「はあ……」

と言つことは、別にやりたい放題やつてもいいわけね。怠けちゃつてもそこまで怒られないよ。足を棒のようにして情報集めするのも個人の意思つてわけか。

迅速な問題解決のためには、統率力のあるリーダーとキッチリとした規則があつたほうが、効率はいい気がするけどなあ。この人達の考え方もあるんだろうし意見しないでおくけど。

「それとシールさん、ちょっとといかな」

「何でしちゃうか？」

サイトさんが再び神妙な顔つきになる。

「如月さんのことなんだけど……彼の家族とかには会つた？」

正直、伊藤の奴とそこまで仲が良い関係かといわれるとな。友人であることには間違いないけど、あいつの家族構成とかも知らないし。そこまで深く踏み入った関係ではない。まだ知り合つて長くもないし、このくらいの付き合いの方が互いに気楽だからと思つていた節はある。

「病院に運ばれて説明を受けただけで、家族には会つてません。後は警察とかに任せていますし」

「サイト、まだ氣にしてるのか？」

奥の方からAseliaさんの不快そうな声が聞こえてくる。彼が気にしてるのって、伊藤の奴が死んだことに関してか。

「仕方ないですよ。こんな状況じゃ…」

サイトさんは首をゆっくり横に振る。

「いや、違うんだ。君とは多分違つて、俺達は5人まとめてこの世界に連れてこられたんだ。始めのうちは、夢かもしれないけどみんなしてゲームの中に入れたと浮かれていてね。そして調子に乗つて探索に行つたら…」

伊藤がやられたというわけか。

「それだけじゃない。俺達はここをゲームの延長だと思つて、結果的にあいつを見殺しにした。あの時真っ先に助けに向かつていれば、彼は死なずに済んだかもしけないのに…本当に、すまなかつた…」

「サイトさん、俺に謝られたってどうしようもないし、あなた達を恨むなんてのも筋違いもいいとこです。それよりも、みんなで今この状況を何とかする方法を探しましょう」

頭を下げるサイトさんに少し強めの口調で言つてみる。

伊藤が死んでも別に悲しいとか泣くほど辛いとか思つていない。それよりも自分の命をまず何とかしたいから。自分でも薄情な奴だとは思う。身近な人が死んだけど、全く実感が湧かないのが正直な所だ。流石にこれは人に言えないけど。

×ほんさんもサイトさんの肩に手を置く。

「…ああ、ありがとひ」

まだ割り切れていないとわかる表情だ。優しい人ではあるんだろう。だが、人の死を引きずると口クな目に合わないってのは世の常だから何とかしてほしいな。

「とにかく、気に病まなくていいですよ。…俺はこれから町へ行って情報を集めて来ます。宿もこここの2階の部屋を使いますから」

「ああ、俺達はずつとこの部屋を使うから、何か急な用事があつたらここに来てくれ。でも、情報交換は出来るだけ現実の掲示板でやつたほうがいいかな。そっちの方が効率いいからね。全員に伝わるし」

「はい、そうしますね」

俺はそう言って彼らに見送られながら部屋を出る。

さて、これから… G.I.L.L.Yさんに会いに行くか。約束の場所にまだ来てなかつたら、適当に町をぶらつこう。部屋を借りて一人であんなことやこんなことをやってもいい。

何だかんだ言って仲間が増えたことで、この世界に対する不安はかなり軽減された。彼らの言う通り、町で大人しくしておけば死ぬ確率はぐっと少なくなるのだろう。それ以外は… ゲームの世界なのだ。

俺はフロントで2階の適当な部屋を借りる。部屋番を云ふるのは後でいいだろ？。

それでも普通に仕事してくれる宿屋の主人だな。不自然さが全く無い。

外は既に陽が傾きかけていた。

ゲーム画面上では単なる飾りでしかない民家も、この世界では各々が立派な役割を果たしている。重たそうな荷物を担いで運ぶ男。夕飯の準備をする女性、道の真ん中で玉蹴りをして遊ぶ子供たち。この世界にはこの世界の人の暮らしが確かにいる。みんな日本人顔がなのが気になるけど。

…そして俺はふと足を止める。

田の前の前の雑貨屋で、若い男が女の子達と話しながら陳列棚の整理をやっていた。普段なら「リア充もげる」とか言いたくなる光景ではあるが、俺はその男を一目見た瞬間に我が目を疑う。あの整髪料で軽く立たせた暗い茶色の髪。長身瘦躯の体型に女性受けしそうな爽やかなマスク。あれは、間違いない

「内山…？」

思わず俺は声を出しながら近づいてしまい、周囲の視線を一手に浴びる。だが彼は特に気にしていない様子で、営業スマイルを崩さぬままこちらに話しかける。

「何だいお嬢ちゃん？　使いかい？」

容姿だけじゃない。声、あと多分性格まで同じクラスの内山そっくりだ。

「あの、あなたのお名前はー!？」

「ん? ナオトだけ?」

ナオト… 確か内山直人… だつたな。あいつのフルネームは。こんな偶然があるのか?

「内山、俺だ。同じクラスの高瀬だけど、わかるか?」

「…変なこと言つやだなあ」

内山そつくりのナオトという男はあからさまに戸惑っている様子だ。俺がこんな外見だからか? いや、それでも高瀬という名前を聞けば何かしらの反応があつていいはずだ。

「何なの、」の子?」

「女の子が俺つて言つのは良くないよ」

店先の女の子たちも俺の事を不思議そうな目で見る。よく見るとこの達もどこかで見たことがあるぞ。もちろん現実世界でだ。一体どういうことなんだ?

でも流石に居た堪れなくなつたので、俺は軽く謝つてその場を跳び出す。

例の町の郊外に向かつて走りつつも、俺の頭の中は新たな疑問で錯綜していた。この世界のモブキャラが皆日本人に見えるだけでなく、現実世界に瓜二つの人間も存在する。容姿も名前も性格も同じだなんて、たまたまで済ませていいく問題なのか? もしかしていつもこのゲームをやつているのだろうか。

いやいや、待てよ。だつたらゲームの中のアバターの姿で入つて
いる筈だ。取り込まれていない人のアバターは確かに存在するわけ
だし……となると、あのナオトという男は一体何だつたのだろうか
？もしかして現実世界の人人がそのままモブキャラになつてるとか
？どちらにせよ、これはみんなに教えるべきだうな。

28話　Jが恐れるべきものでした

新たなる疑問を抱えつつ、俺は待ち合わせの場所に辿りつく。

空は薄暗くなっているけど、まだG·i·l·l·yさんは来ていないようだ。昨日は結構遅い時間に会ったし、もう少し後になつて来てみるかな。今から町に戻つて情報収集に勤めるか。酒場はパーティーのみんながいるかもしれないで避けよう。となると、どこに行くべきか…

俺は一つ試してみたいことを思いつき、町の道具屋に向かう。夜の町を歩いている人は冒険者が多い。皆「この世界」でのクエストを終えて一杯引っかけにやつて来ているのであらう。逆にこの時間帯は、日本人のモブキャラは割と少ない感じがする。

道具屋の中はゲーム画面とは比較にならないほどどの品物で埋め尽くされていた。店の広さは体感的にゲーム上での3倍、品数はそれ以上に感じる。見たことのない道具も沢山あって、品定めの時間もかかる。この中に『A·R·クリスタル』があれば本当に笑い物だ。

「お嬢ちゃんも好きだねえ。そんなガラクタの山をじっくり見ちゃつても」

自分の店の売り物をガラクタ扱いはどうなのよ、道具屋の主人ハンスさん(42)。確かにこの店はゲームでも役に立つかどうか微妙なアイテムばかり取り扱つてているんだが。薬屋は別にあるし。

「もしかしてお嬢ちゃんも『赤いクリスタル』とやらを探しているのかい?」

その言葉を聞いてはつとする。考える」とは同じなのだろうか。
少なくとも『A・R・クリスタル』の話題は、意識が取り込まれていらないパーティの仲間からは出なかつた。ゲーム画面ではあれだけ盛り上がつてゐる話なのに。リアルマネーだからこつちの世界の人には興味無いのだろうか。

「そう言つ人が以前にも来たんですか？」

「う、ん？ 最近になつてちょこちよこ増えたなあ……ウチの店の客は元々モノ作りを生業としている人がほとんどでさ、冒険者……しかも戦士や嬢ちゃんのような魔法使いの客は珍しいんだよなあ。みんな口々に『真っ赤なクリスタルはないですか？』って聞くし」

こんな状態になつてもやつぱり気になるんだろうな。ゲームの中に自分の理想があるとは言え、現実世界でも生きていかなければならぬ。一千万円もあれば、現実での暮らしもぐつと楽になるだろう。質をあまり問わないのなら尚更だ。

…俺がここに来たのは、そのことを確かめるためもある。この世界にその『アイテム』があるという可能性。この世界での行動で賞金が手に入る可能性を調べるため。

「おじさん。これとこれと……これをください

「お、おひ。まいぢ。魔法使いのお嬢ちゃんがこんなの買つなんて珍しいな。えへっと、全部で5400Gだな」

「はい」

俺が購入したのは「龍のあばら骨（8本）」、「森クジラの鬚」、「謎の塊（サンマイト遺跡産）」。どれこれも用途不明だが、一応ゲーム上にも存在する。おそらく合成用の素材なんだろうけど、ソーサラーの俺にはまず縁の無いアイテムである。だが、これでいい。

結構時間も潰せたし、もう一度待ち合わせ場所に向かおう。そう思つて店を出た瞬間に人とぶつかってしまう。しまった、自分の実験に気を取られて、周りを見て無かつた。

「あ…すみません」

「…気をつけな」

白銀の鎧に身を包み、神秘的な輝きを持つ銀髪の男。一言で言うと凄く強そうだ。男はこちらを軽く一瞥すると、そのまま道具屋の中に入つて行く。今の俺だから解かるけど、装備からも強い魔力的な力を感じた。サイトさんも戦士ファイタとしては相当強い部類に入るんだろうけど、この人はそれ以上なんじゃないのか？ 出ているオーラが全く違つた。

ということは、この人も取り込まれた人なんだろうか。話しかけないほうがいいのかな？ 人と組むのを嫌がっている人もいるらしいしな。ダンジョン帰りなのか血の匂いもするし。当然なんだろうけど、あまり好きで嗅げる匂いじゃない。

話しかけるのはあからさまにつるたえている人達だけにしよう。

さて、再び町の郊外の草原に到着。何故かこの世界にも存在する時計で時刻を確認するともう夜の11時半。良い子は寝る時間だ。

でも俺は悪い子、機会があつたらこの体であんなことやこんなこと
を…グヘヘ、なんて考えているくらいだからな。

ダンジョン帰りの人たちもちょくちょく見かけるけど、あまり俺の事を気にしてはいないようだ。装備からしてもまだ低いレベルの人達なんだろう。…もしも、意識が取り込まれていない人たちが死んだら一体どうなつてしまふんだろう。これも気になる所だな。実証はしたくないけどさ。

しかしG・ユーユさん… いつ来るんだろうな。

ふあ… 眠い。

いかん、ここで眠つたら現実で起きてしまつ。変な話だが過去二回、現実で目が覚めたのはこの時なのだ。時間経過もありうるのだろうが。とにかく寝てしまつたらG・ユーユさんは会えなくなる。ここは何としても睡魔に勝たなくては、いや寧ろ負けなくては言うべきか？ 現実基準で考えて。

うとうと。

ぐぐぐぐぐ。

コーヒーとか眠 打破が欲しい。昼にあんだけ紅茶っぽいもの飲んだのに。カフェインレスだったのだろうか。しかし睡ることでこの世界から抜けることができるのなら、睡眠薬の様なものががあれば緊急脱出が可能なのかも… これも… 試して… みたい…

.....

ぐう。

.....

つんつん。

.....

つんつん。

だ～れ～？

「お嬢ちゃん、こんな所で寝ると風邪ひくよ~。」

女性の声だ。ぼんやり目を開けると声のイメージ通りの茶髪のショートヘアのアーチャー。装備的にはまだ取り込まれていないようには見えない。

「うう、どうも…」

いかんなあ。今日はもう諦めるべきか…

「それと、さつき男の人からこの手紙を渡すように頼まれたんだけど」

ふえ？ 手紙？ 男の人ってまさか。

「もしかして、頭にバンダナ撒いたシーフの…」

「知り合いだったの？ なら良かつたわ。てっきりラブレターかと思つたけど」

アバターの年の差的に犯罪だよそりや。アーチャーのお姉さんは俺に手紙を渡すと、そのまま町の方へ歩いて去ってしまった。

どれどれ、手紙の方は… G.i.l.l.yって書いてあるのが見えるな。周囲は満天の星空と遠くの町の民家の光によつて僅かに照らされており、文字が何とか読めるくらいの灯りはある。肝心の中身の方は…と。

『シエルへ

まずはこの手紙を読む前に周りに人がいなか確認しろ』

肩がすくみ上がる思いで、俺は辺りをキヨロキヨロと見渡す。うん、誰もいない、かな。身を隠すにもだだつ広い平原だし、大丈夫だろう。いきなりこんなこと書かれるところ一わ。宿に戻つてもいいけど、本文は短いしすぐに読んでしまおう。

『なぜこんな手紙を渡したかといふと、お前が跡をつけられていたからだ』

跡？ マジで！？ つーか一体誰が！？

『じゅうじゅうも色々と重大な事が解かつたが話は明日にする。武器屋』

「アーミス」の裏で待ち合わせだ。装備は変えてない。それと明日のニコースは良く見ておくことだな』

…「一む。何と言つか… やつぱり色々凄い人だな、G·i·l·l·yさん。周りがよく見えていると言つか。対応が柔軟過ぎる。しかしニコースって一体何があるのでう。

『最後に言つておくが、お前に協力しているのは、お前が俺の事を知つてゐるからだ。あまり他の奴に俺の名前を出さないようにしてほしい。それじゃあな』

まさかサイトさん達に会つていたのも知つてゐるのかな、この人。もう盗賊を越えて、スペイのレベルだ。少なくとも敵に回したくない。彼の忠告には素直に従つとしよう。

しかし、G·i·l·l·yさんは何故そつまでして人と組みたがらないのだろう。俺に協力するのは自分の存在を知つてゐるから… 早々に口止めを狙つてのことだろうか。彼の考へてゐることは良く解からない。クリスタルを狙つてゐるわけでも、この世界を楽しんでいふとも考えられない。純粹に助かるうと思つのなら些か人を警戒しが過ぎではないだろうか。

だが彼の言つ通りなら、何かしらの理由で俺をつけまわしている奴もいるということだ。おそらくは同じくこの世界に取り込まれた人間。そのことも気になる。出方を窺つにしても、つけるべき人はもつと他にいるはずだ。何だかどんどん無駄に疑問が増え行つてゐる気がするな…

俺は今ひとつスッキリしないままの頭で、宿屋へ戻ることにした。

28話　「これが恐れるべきものでした（後書き）

「」まで来るといふ当たりの文字数はどうでも良くなつて来る不思議。

最後の方には6000字近く行きついで怖い

29話 世の中が混乱してきました

現実世界に3度目の帰還。これは大丈夫、確定しているつて解かつていても、朝起きた瞬間に過剰にほつとしてしまう自分がいる。そして親に何となく電話してしまう。別段話すことも無く、すぐに切つてしまふのだが、どうににもこうにも落ち着かないのだ。

次はゲームにログインして状態の確認。

昨晩の実験の首尾は… ある程度思つていた通りだ。

「龍のあばら骨」「森クジラの髪」「謎の塊」… そんなものは持つていない。所持金も全く変化していない。これが意味することは『ゲームの世界の中で買い物や行動には、ゲームのステータスには反映しない』ということだ。最初の晶靈の洞窟のことも考えると、ほぼそう考えて良いだろう。

と、言ひことはつまり『ゲームの世界の中でA・R・クリスタルは存在しない』という、可能性が濃厚になつてこないだろうか。だつてゲームの中で手に入れたつて、現実世界のゲーム上では存在しないんだから。

G-i-l-l-yさんの言葉を借りるとこれもまだ仮説の段階で、事件の首謀者がいるとしたらそんな調整は好きに出来るので、この話が絶対とは言い切れないだろうが。

でも、「絶対」ではないだけで「大体」はそうなのだ。このことをみんなに教えれば、クリスタルを巡つての不毛な意地の張り合いが少しは緩和されるんじゃないだろうか。

攻略サイトの専用掲示板にも行つてみよう。パスワードを入力し

ログイン。アバター名前と性別、職業の記入を求められ、それから真っ先に出て来たのは生存報告のボタン。うーん、物々しい。一応ポチつとな。

なるほど、この掲示板に入れる人の名簿もあるのか。生存報告の欄に日付とが何個か。ボタンを押したらが付く仕組みだな。まだ何人か付いていないけど、まだ朝早いしな。今日は珍しく早起きしてしまった。

更に進んで行くと、この現象についての概要と疑問点が詳しくまとめられている。ほとんどは自分も知っている内容だ。モブキャラにやたら日本人が多い、しかも現実世界に存在している人に良く似たキャラも多数いることも解かっている。中には有名人そっくりの人を見かけたという報告もある。これが一体何を意味するのかは今のところ不明だ。

俺の先程の実験についてもある程度書かれてあった。無駄骨だつたとちょっと後悔したが、自分でも確かめられたので良しとしよう。しかし、ゲームの中の世界ならその行動は残る： だつて？ といふことは、また向こう側に行つたら意味不明のアイテムはちゃんと所持しているということか。ややこしいな。

ん~っと、それ以外には特に目ぼしい情報は無いな。今のところはこれだけだ。シエルのレベル上げは昼飯食つた後にでもやるとよい。寝起きにゲーム画面はちと辛い。

… そういえば、G.I.L.Yさんが一コースをチェックしておけつて言つてたな。一体何があるのやら。連日、若者が脳梗塞で死にまくっていることにいい加減にマスコミが注目し出して、捜査のメスが入つたとかだろうか。

まずはYAHOOでいいかな、適当に… 速報？

『次期大臣候補の井沢氏と後原氏が今朝未明死亡… その他にも民政党の幹部が次々に倒れる…』

おいおい、いやいや。なーんじゃそりや。

思わずテレビもつけてみる。

『… これは悲しむと言ひより、 唾然としてしまつ事態です。 今朝だけで与党議員だけでなく、 国務大臣が3人も亡くなつてしまつなど… 政界は混乱の真っ只中です』

『… 死因は全て病死となつていますが、 ここまで行くと何者かの陰謀すら感じますね。 国家を転覆させようとする輩の…』

『… 宮房長官！ 死因は病死となつていますが詳しい病名は解かっていりますか！？』

『… 日本政府には迅速な対応を』

チャンネルを一通り回り、 事態を十分すぎるほど理解出来たのでテレビを消す。 マスクに詳しい情報は期待していない。 こういうときはネットの方が早い。

今日のニュースについて調べて30秒後、 眠気が吹っ飛びほどに

目を見張つた。

政治家だけではない。何かと黒い噂のある芸能人、服役中の凶悪犯、ネットで嫌われているブラック企業の会社の社長など、所謂『有名人』たちが今朝発見されただけで総勢54人。次々に『病死』しているのだ。

『天罰k t k』

『売国奴とヤクザがガンガン肅清されてるぞ！　日本の夜明けの始まりだな』

『これはリアルで新世界の神が降りてきたかもしれん。いいぞもつとやれ！』

『殺して欲しい奴リストまとめて拡散しちゃぜー』

匿名掲示板では大賑わい。匿名だからこそ好き放題言えるというのもあるが、確かに死んだ人たちは皆生前（ネット上で）あまりいい噂を聞かない人たちばかりだ。寧ろ俺だつて死ねばいいのにとか思つてました。はい。

だが、こうものの見事に一掃されてしまうと喜びというより、テレビで言われている通り呆然とするしかない。一体何が起こったんだ？　まさか本当に名前を書くだけで人を殺せるノートの使い手でも表れたのだろうか。

…じゃ、ないよな。これがGillさんと言つていた重大な事つて奴か？　他には特に話題のニュースは無いし、これだけ一辺に政治家が死んだのだから別のニュースなんて毛ほどの価値も無い

だろう。つたく、ほんの一週間前はクジラが海岸に打ち上げられて
いただけで大騒ぎしていたのに… 電話だ。

「はい、もしもし?」

『おう高瀬。今から時間あるか?』

声の主は内山だった。別に何て事無いはずなのに、妙に胸がどきりとなる。ゲームの中の世界にいた内山そっくりの男の声とあまりにも似ていた… いや、間違いなく同じものだったから。

「ああ、特には用事はないけど…」

『伊藤の両親が今朝から、あいつの部屋を片付けにこっち来ててさ。よかつたら手伝ってくれないか?』

「ああ、そんな事くらいだつたら… 今からでもいいのか?」

『おひ、助かるよ。じゃあ、待ち合わせ場所は…』

別にお前は伊藤と特に親しかったわけじゃないだろ?。こういう所が人間性の差なのだろうか。性格のいいリア充も考え方だ。見ていくこっちが余計みじめに思えてくる。…まあ、これは自己責任なんだが。長い時間パソコンに張り付いているだけじゃいけないんだろうな。

俺は皺の付いたシャツを羽織り、財布と携帯を持って外に出た。

現場にいたのは伊藤の両親と姉に加え、内山と矢野と同じクラスの奴があともう2人。遺体の腐敗臭はそこまで無かつたようで、部屋の片づけは淡々と進められていた。

伊藤の両親は俺が来ると「本当によくして頂いて…」と、悲痛な顔を隠しきれないまま頭を下げて礼を言う。変わり果てた姿になる前に遺体が発見されたため、ちゃんとした息子の死に顔を見れてよかつたとも話していた。内山が言うには今回は本当に運がよかつたのこと。孤独死で遺体が長時間放置された時ほど悲惨なものはないらしい。

ワンルームを8人で片づけるとなるとそこまで時間はかからず（寧ろ人多すぎだったので、交代で休んでいた）、昼前には綺麗さっぱり荷物がまとめられた。何かお礼をしたいと母親が言つたが、内山がそれには及ばないと断り、俺達はそのまま解散した。

この残暑の中働いてそれをボランティアに変えてしまおうとは、まったく虫唾が走るくらいに性格のいい奴だ。でも一人がこう言つちゃうと周りのみんなも逆らえない。結局向こうとしても心苦しさに耐えきれなかつたようで、小遣いは渡されてしまったが。

田中の熱を流すかのように、俺は町中を自転車で走る。他のみんなと一緒に飯食いに行こうと言つていたが、おそらく唯一事情を知るであろう俺は、そんな雰囲気に耐えられる気がしない。

周囲は皆伊藤の死因を病死だと思っている。彼の両親も若くして息子を失い、悲しみや怒りのやり場も見つけられずにいるのだろう。人の過失による死亡ならともかく、病気なら誰も責める事が出来ない。この残酷な運命を噛み締めながら余生を過ごしていくのだろう。

自分の中でふつふつとやり切れない怒りが生まれているのを感じた。

誰かが故意にこんな事態を生んで、自分もそれに巻き込まれる可能性があるとなると、早々に犯人を見つけ出してぶちのめしたくなる。伊藤の死よりもこっちが問題だ。

でも、それではいけないのだ。明確な犯人が解からぬまま、自分も死ぬ危険があるからこそ、ここは頭を冷やして慎重に動かないといけない。

大した価値のある人間かどうかは知らないが、ともかく今は自分の命が惜しい。

自分に力が無いと分かつているからこそ、身を呈して誰かの命を救おうとは考えてはいけない。自己中になれ。他人の勝手に食われてやる道理はない。

そうと決まれば早速家に帰つて対策を練ろう。今はゲームをすることしか出来ない。幸い俺には心強い味方もいることだしな。

今日は学食は止めよう。頭をクールにするためにはジャンクフードが一番だ。

昼食はハンバーガーにした。

30話 それがメリットだとでも？

今日も今日とてゲームの世界。

今回は運よく仲間と合流することなく、すぐさま宿屋へと向かう。酒場の中でも目が覚めると、いつのまにか、まるで、ラッキーくらいに思つておこう。

G.i.t.t.eさんとの待ち合わせは時間指定こそしていながら、おそらくこの世界基準での夜だらう。それまでに適当に時間を潰しておくか。この世界で出来ることといつたら情報集め程度くらいだからな。

田中はとにかくシエルを鍛えた。レベル上げには掲示板のメンバーも協力してくれたので、おかげをまでも今のレベルは35。新しい魔法も欲しい所だが、結構限られてくるしなあ。反発する属性の魔法を覚えるとやや威力が落ちるという点も難しい。今度にいにさん相談してみるか。

そしてレベルが30に達していないメンバーたちには、近々運営から低レベルのプレイヤーの救護策として、何か特典を付けるみたいだと嘘を言つておいた。本当に適当な嘘だが、これ以上にいい案が思い浮かばない。赤の他人にゲームを止めさせるって中々難しい。もしもこっちの世界に来てしまつたら……その時はその時だ。ちゃんとしたコミュニティも出来てるので、彼らなら事情を説明すれば大人しくしてくれるだろ？

で、だ。

今日はやるひととやつたのだ。やれるだけのこととやつたのだ。

後はG.I.L.L.Yさんと会つことぐらいだらうか。しかも昨日俺が付け回されていたとなると、下手に外を出歩くのもあまりよくない。昼間はじっと部屋に籠つてするのが得策だ。どうせこの世界での行動は反映されないんだし、間違つてはいないはず。

うん、暇潰しなら何をやつても構わないさ。人に迷惑かかるわけでも無し。

と、いうわけで、今からシエルちゃんの体を存分に堪能したいと思ひます。

当然の権利だ。G行為限定だというのが悔やまれるが。出来ることなら俺がシエルとやりたいわ。

「Jの姿ならこっちの世界の人間もメロメロ、寧ろブヒブヒだろうが、もちろん男とやるのはNG。可憐な少女の純潔は死守が基本。さて、如何にしてこの穢れを知らぬ少女の肉体を、ひいひいあへあへ言わせてやろうか。言うのは自分だけど。そう思うとなんか悲しい。

…でも折角じゃないか！ まず始めはやつぱ風呂だよな！ 御丁寧に個室にはシャワーまで付いていやがるぜ。こいつを利用しない手は無い。それに案の定残つていた謎アイテムもあるしな。「龍のあばら骨」を使って何か独創的なプレイは出来ないものか。

…いや、待てよ。前が駄目でも後ろはありかもしれない。自らの純潔を必死に守り続けつつも（中略）何とも儂い乙女。いいね、何とも燃えるし萌えるシチュエーションだ。俺が童貞つてことには変わりないので。…ああ、駄目だ駄目だ。こんな自虐的になつては。やるんだつたらひと思いにやるしかない！

ござ行かん！ まだ見知らぬ夢の桃源郷の地へ！

(「」の間の出来事は読者の「」想像にお任せします)

夢の中で夢心地のような一時を過ごし、俺は出かける準備を整えていた。現実世界で夢精していないことを祈る。しかし、女の子の感じ方って男とは大分違うんだなあ。始めの方はかなり違和感を覚えた。脳のつくり云々とは聞くが、肉体転移というのがこんなに刺激的なものであったとは。そりやAVとかエロゲにもなるのがわかる。体にもまだ余韻が残っているし。顔は未だにやけているんだろうが、この体だとそれすらも可愛い。

さて、キモいことはこのくらいにして。そろそろ真面目モードに切り替えよう。装備は皮の帽子に短刀つと、あとは伊達眼鏡。ソーサラー用の装備をほとんど外し、変装は完璧なはずだ。外からではとてもソーサラーには見えないはず。うし、行くか。

夜の町を少女が一人行く。襲つて来そうな奴がいたら、速攻でラピッドを叩きこむつ。ウイザードロッドが無くても殺傷力がある物は一応撃てる。

俺は人通りの多い道を選んで歩いた。途中でパーティーの仲間とも会つたが、誰一人として俺に気づかない。変装の効果は抜群のよ

うだ。さらに入混みの多い道を歩くことで更に人を巻くという寸法だ。途中で防具屋に入り服と帽子をさらに着替える。頭にバンダナを巻き傍から見ると女シーフの様にも見えるな。念を押しに押して通常の3倍の道のりを通り、俺は武器屋「アームス」の裏手へ。もちろん一ヶ所に留まらず、ぐるぐる動き回る。

「今日は随分念を押したようだな」

思わず方向から声がかかる。つーかよりもよって上からかよ。眼前にふわりと人が飛び下りて来る。

「今日は付けられて… ないですかね？」

「大丈夫のようだ」

G.i.l.l.yさんはいつもの格好だった。本職だけに見つかれない自身はあるのだろう。建物の上を飛び乗つて行くとか、テンプレ通りの怪盗だ。

「今日のニュースは見たか?」

「有名人や政界の大物がガンガン死にまくっているという奴ですか？」

…

G.i.l.l.yさんは軽く頷く。

「で、この状況を見て… 僕が昨日教えようとしたことは解かるな？」

「はい、もう大体予想ついてます」

あまりにも不自然すぎる『病死』の多発。それにこの世界の疑問を重ねれば自ずと答えが浮かび上がつて来る。

「精神が取り込まれた俺達だけじゃなくて、ゲームプレイヤーで無い人はそのままの姿でこちらに… 何て言うか投影つていうんですかね？ コピーが送られているというか… そしてこここの世界の人達と現実世界の人達の命は繋がつて…」

「ん、まあ、大体そんな所だな。俺達はこの世界に来てから死ぬりスクだけではなく、人を違う世界から殺せるというどんでもない力まで持たされたみたいだ」

G.I.I.L.Yさんは両手を上げて肩をすくめて見せる。

彼は軽く鼻で笑っているが、この世界の事を知れば知るほど危険な事態になつてていることがわかる。こいつではモンスターとやり合える剣技とか、広範囲を焼き尽くす魔法とか、とにかく人なんて簡単に殺せるんだ。これじゃあ完全犯罪を大安売りしているようなもんじゃないのか。

「さて、どうする？ こいつの世界からならムカツク野郎も殺したい放題だ。汚職まみれの政治家、悪徳業者、暴力団、生活保護…ト… 世の中のウジなんて腐るほどいる。現実では一億人のうちの一票の選挙権しか持たない人間でも、幾分か世の中を変えることが出来る、な」

「…やるつもりですか？」

「お前はどうかと聞いている」

「やりますよ… 何の罪も無い人を巻き込まないとは限らない…」

「こちらの世界に持ち込めるのは現実の記憶だけだ、メモ一つ持ち込むことが出来ない。世の中の悪人どもの顔と名前が全部割れているわけじゃないし、そしてそれを全て正確に記憶し殺害できるとも思えない。そつくりさんだったら洒落にならんしな」

「それに… この状況が『人』によつて持たされたものなら尚更です」

「慎重なのか臆病なのか… どうにせよけやんと頭は回つているようだな。まずは、そこの大本を何とかしないと行動は出来ない」

「どうやらヨリイチさんは俺と同感みたいだ。悪い反応には感じられない」

「じゃあ、問題はどれだけの人間がこの事実を知つていたかだ」

「みんなも薄々勘付いている人もいたかもしませんが、おそらく今日のニュースを見て確信してるでしょうね」

「そうだな。だが考慮すべきはそのことを人に教える前にあんな肅清めいたことをやつてのける奴がいる、ということだ。俺みたいに実験的に一人殺るくらいならともかくな」

おひおこ。

「誰か殺したんですか！？」

「ああ、外国人団体からの違法献金疑惑のある議員… 疑惑つつもほとんどクロだがな。あまりにも特徴のある顔だつたんで、サクッと」

G.I.L.Yさんは自分の首を切るようなジエスチャーをする。

「本当はそいつが死んだニュースを見せてお前にこのことを伝えようと考えていたんだが、思いのほか同業者がいたようで」

まさか大臣含め50人以上も殺されるとは思わなかつた、というわけか。これじゃあ議員一人死んだところで全く驚かない。しかし、相手が悪人（？）とはいえよく平然と殺せたものだ。

「で、だ。そこまで解かつているのを前提にしての忠告。お前や俺が何もしなくとも、誰かがこの世界を利用して殺人を犯すだろ？」「悪人を狙つて殺している辺り、本人はよかれと思つてやつてるんでしようけど」

本当に死のノートの世界だなこりや。

「それにこれは俺の勘だが、一昨日の総理大臣を殺した奴が昨日になつて大量に殺人をやつたんだと思う」

「同一犯…？ どうしてそう思つんです？」

「都合良く条件にあつた人間を一晩であれだけ殺れるなんて、この

世界の仕組みを理解しないと無理な話だろう。俺が昨日殺した議員だつて、歩いていてたまたま出会つただけだ。一人殺つて確信し、翌日に計画的な犯行を行つた、と考えるのが結構自然なところだがな。もちろん労力的に一人とは限らない、寧ろ複数でやつた可能性が高い」

仮説ではあるんだろうが、この人が言つと説得力あるんだよな。

しかし訳の解からない力を使って殺人だなんて……これは人の考え方にもよるのかね。

「あの、それじゃあ忠告というのは？」

「ああ、この調子だと殺人はしばらく続くだろう。警察も捜査のしようがないしな。だから少なくとも殺されるのが悪人だけであるうちは……黙認しておけ。くれぐれも止めさせようなんて考えは起こさない方がいい」

「対象がヤクザとか悪徳政治家なら無理に止めるつもりはあります。でも無関係な人が殺されるのも黙つて見ているのは……」

彼の言いたいことは解かる。俺だつて相手が滅茶苦茶強かつたら、自分の命欲しさに黙つて逃げるかもしれない。ここは、まあ、自分の中に僅かに残された正義感というか。犯人の良識を信じて、そうならならないことを願うしかない。

「……モラルや信条なんて、一度籠が外れれば案外脆いものさ。もしも無関係な奴を殺すことに慣れてしまつたら、いや自分で正当化させちまつたら、こっちでも何か対策をとるしかない」^{たが}

自分の顔にリアルに冷や汗が流れるのを感じた。
初めての体験だった。こんなに冷たいもんなんだ。

30話 それがメリットだとでも？（後書き）

こんなジャンルの話なの？って思っている人もいるかもしませんが、
こんなジャンルの話です。

3-1話 良識を持つていってください

「俺からほんなんとこひだ。次はお前の番だが…」

手持ちの情報でこの人の知らない事があるかどうかは解からないが、とりあえず知つていいだけの事は伝えよう。こっちに取り込まれた人が集まる掲示板については伏せておくことにする。ついさっきボロッと単語を出してしまったが、単なる攻略掲示板のメンバーだと考えてくれるだろ？。

「この通りあまり期待はしていなかつたが、『A・R・クリスタル』はこの世界には無い可能性が高いという話には割と食いついてくれたようだつた。」

「なるほどな…」こんな現象を引き起こしている奴の匙加減でどうにでもなるとはいえ、その可能性は高いな」

「そもそも、そんな物存在しないってこともあります。賞金云々だつて、單なるプレイヤーをより多く誘つ売り文句でしか」

G.i.l.l.yさんはまたも腕を組んで何かを考えているようだ。

「そうなると、ますますこの事態を起こしているのはゲームの製作者といつことになつてしまつが…」

「俺は正直その線が一番濃厚だと思いますけど。方法や動機こそ全く解かりませんが、色々辻褄は合います」

ゲームを支配する、管理・運営できる、プレイヤーのレベルでこ

の世界に取り込まれる物を調整できる、といつのなら、もう黒幕は製作者しか考えられない。ゲームを止めさせようとする活動を潰すのも運営側なら何等不自然でない行動だ。世間も信じようとしないので、証拠隠滅だって簡単。

「確かにお前の言う通りだ。黒幕はゲームの製作者、俺も9割方そうだと思っているんだが…」

「何か疑問でも？」

「…いや、その動機って奴が気になつてな。こんな事態が引き起されたのも、そいつらの御望みどおりなのか…」

「どうなんだろ？ 確かに、もはやゲームのバーチャル体験で済むレベルじゃなくなつてている。この調子だと国家転覆だつて狙えてしまつくらいだ。こんなものを何も知らない一般人にやらせてどうするつもりなのだろうか。異世界から人を殺すなら自分たちでやつた方が早いし余計に見つからないだろ？ 自分が死ぬというリスクを考えるものだろうか。

かと言つて、仮に黒幕が製作者以外となると、余計に訳が解からなくなるし。

「…じゃあ、仮に製作者が黒幕だつたとしよう。この現象を食い止めるためには、現実から叩いていくのが最も効果的だと思うんだが

…」

「でも、証拠も何も無いんですよね… 現に止めさせようとした人達が警察沙汰を起こしちゃって、向こうもかなりピリピリしているでしょうし」

「方法ならいくらもあるさ。例えば『こっちの世界』から製作 者どもを殺すとかな。もし向こうがそれを見越して強力なキャラを作つていたら… そうだな、関係者を人質に取るとかな。現実とこち ら側両方から」

… よくもまあ、こんな風に物騒なことを思いつくな。

既に一人殺つているし、この人もある意味で籠が外れているのか もしれない。

「強攻策ならいつだつてとれる。だつたらその可能性もあるのに、何故こういつた仕組みにしているのかということだ。こっちの世界での行動が死ぬ死ない以外に反映されないのも、元々から殺人をするように仕向けるためなのか…」

そう言われてみると、この出来事については色々穴があるというか… この世界の存在を複数の人間に知られるとなると、そこにリスクが生じる。自分たちの手ではなく人の手で殺させることによつて罪を逃れるつもりなのだろうか。でも殺人帮助はまず避けられないだろうし、殺した人間に罪を負わせるにしてもこのゲームとの因果関係を明らかにしないといけない。そうすると必然的に自分たちにも矛先が行くことは避けられないわけで… ああもう、考えれば考えるほどややこしくなってきたぞ。

「結局… 動機は本人たちに聞くしかないんじゃないですか？」

「それも確証あつての物種だがな。中途半端な証拠だと知らばっくれるだろうし、仮に製作者が黒幕でなかつたら取り返しのつかないことになる。強行策は真犯人を明らかにして、確實にこの現象を止めることが出来るという保証が無い限りは取れない」

製作者を殺してもこの現象が止まらなかつたら……確かに洒落にならん。今この時の俺達の命だつて常に握られていないとも限らないのだ。動くんなら全てを、いや少なくとも真犯人を明らかにこれからが最も安全、か。基本つちや基本だけど。疑わしきを罰することが出来ないのは痛いな。

「やつぱり……今出来ることは情報集めだけですか？」

「だな。他に良識のありそうな仲間がいたらそいつでやることだ」

解決に向けては全く進展していないんだな。足元を固め道を広くしただけだ。自分の命もリアルにかかっているし、まだまだ地道に進むしかなさそうだ。

「そうそつ、それとのゲームを自分の意志でやめられるかどうかについてだが……」

「確か退会した人がいるんでしたっけ？」

「無駄だつたようだ。画面上はキャラを消せてもこっちには残る。強化出来ない分、更に絶望的な状況だろうな。そいつは昨日、頭抱えて震えてたよ」

…それはお気の毒に。

だがこうなつてしまつた以上、もう逃げることも出来ないつてことだ。唐突に強大な力とリスクを与えられ、自分自身は力の行使を拒否することが出来てもその惨状を見届けなくてはならない。実際の異世界召喚なんてチートモノじやない限り、ロクでもないもんだな。

「とにかく、この世界を利用して何かを為そなんて奴には極力関わらないことだな。…お前だつて出来ればこれ以上何も起きずに終わって欲しいんだう？」

「少なくとも自分が死ぬのと人殺しは勘弁ですね。現実で友達が死んだんで、見ていてあまり気持ちのいいものじやないつて分かりましたし」

伊藤の死が俺の中の何かを踏み留ませた氣もする。流石に親兄弟にあんな死に目は見せられない。自分の命を守ることの重要性が少しは実感できた。もちろん人を殺すことも。正直悪人個人は知ったこっちゃないが、余計な罪を背負つて生きたくはないし。

「既に一人殺した俺が言つのもなんだが、それもそうだな。だが、そうじやない考え方の人間だつて世の中には星の数ほどいる。だから、下手に関わるなよ」

口の上ではそう言つているが、G·i·l·l·yさんは實際どう思つているんだろう。少なくとも自分には悪人とはいえた人を殺したことに対する『氣負い』というものが彼から全く感じられない。自分の命を守る上で実験とは言え、こうも簡単に人の命を奪えるのも……いや、下手に考えるのはよそう。今のところ、この人は頼りになる味方なんだ。いざとなつたら互いに利用し合うというのも、暗黙の了解が成り立つてゐる氣がする。上手いんだうな、そこらへんの人付き合いが。

次に会つ時間と場所はG·i·l·l·yさんの判断に任せることにした。彼がクエスト受領のための冒険者ギルドに手紙を送つて、待ち合わせ場所を決めるという方式だ。俺が小まめに見に行く必要があるが、

そこまで大した手間では無い。互いに居場所を知られないところ
ではちゃんと配慮されている。

「G.I.L.Yさん、最後に一つ聞いていいですか？」

「どうした？」

「どうして俺以外に人と組もうとしないんです？」

G.I.L.Yさんは鼻で笑つた。

「誰も組んでいるのがお前だけとは言つてないぞ。それに、人前に
晒さない理由だつてこの前言つたはずだが？」

そう言つと彼は振りかえることも無く、夜の町に消えて行つた。
彼は彼で気になる所が多い人なんだが、下手な詮索はするなつてこ
となのかな。

：何か理由があるのなら全てが終わつてから聞こへ。

夜の町は行きよりも幾分人は減つてゐるようであった。多くの人
はもう寝静まつてゐる時間帯なのだろうか。俺も宿屋に真っ直ぐ戻
るかな。

と思って、しばらく歩いていた途端に道の先で何やら人だかりだ。
その多くは冒険者ではない。日本人のモブキャラだ。何だろ、民
家の周りに集まっているようだけだ。

「酷いな」つや…」

「やつたのは冒険者だつて?」

「「」んな荒らし方は普通の人は出来ないよ…」

俺も気になつてその人だからに交ざると、後ろから冒険者ギルド直轄の警備隊の人達がやつて来て、野次馬に道を空けるように怒鳴つていた。

「一体何があつたんですか?」

「いやね、「」の一家が強盗に襲われたんだつてよ。家族全員皆殺しちゃ」

思ひ当たる節があり過ぎてそれ以降の言葉に詰まる。

「最近になつて急に増えたわよね… 殺し方もどうやら冒険者みたいだつていうじゃない?」

「昨日なんて丘の上の屋敷の御主人が縦から真つ二つになつてたんだろ?」

「二二丁の金貸しも黒焦げ死体になつてたつていうしや…」

「やだ、怖い… 冒険者には町を出て行つてほしいわ…」

「しつ… 誰に聞かれているか分かんないんだぞ…」

町の人間を手に掛けるようなクエストなんて当然ありはしない。
そういう輩を退治するクエストだって。

これも他の人にとっては正義だというのだろうか。

理解は出来るが回調はしたくないな。

31話 良識を持つていってください（後書き）

サスペンスといつのはホラーに含まれるんでしょうかね。

32話 殺る気満々じゃないですか

『悠一、ちやんと』飯は食べてる?』

「ああ、ほんとうに学食だけだ。栄養バランスはいいはずだから『でも最近よく電話するわね。最近若者の孤独死が増えているって言ひたくない。やつぱりそのせいなの?』

「実は大学の友達もこの前それで死んでね…」

『それで頻繁に電話していくようになったの… 不安だったら帰つてきたり? まだ授業始まってないんでしょう?』

「ちよつとやることが出来たからそっちには帰れないんだ。まあ電話がなかつたら死んだと思ってよ。遺体発見は早い方が大家さんに迷惑かけないし」

『もう! 滅多な事言わないの!』

俺の親は何だかんだで子供の命を心配してくれているようだ。当然なんだろけどさ。最近はその当たり前すら出来てない親もいるもん… 今はどうでもいいか。

とにかく何時死ぬか解からない身だ。自分の両親に感謝の気持ちを伝えることを欠かさないようにしてよ。

俺は4度目の帰還を果たし、早速掲示板で生存報告を行つ。昨日もプレイヤーの犠牲者（少なくとも掲示板のメンバー）は出ていな

いようだ。よかつたよかつた。

この現象が起こるようになつて早5日。流石に皆生き残る術が身に付いて来ているということか。単に町の中で大人しくすることなんだけさ。名簿を見ると新しいメンバーが6人も増えている。連れて来られる要因も『レベル30以上になること』がほぼ定説になりつつあるようだ。

こんな調整だと、やはり黒幕は製作者だとしか思えないのだが…田畠はついていても行動に移すことが出来ないのが歯がゆい。

管理人の夕凪さんもレベルを20台に抑えゲームの世界に取り込まれていないものの、この事態を信じざるを得ない状況になつているようだ。ニュースになる前に今朝の死亡者の予告をした人がいたのである。どうやら彼はゲームの世界でその人物の死体を見たらしい。

非プレイヤーの一般人も向こうの世界で死んだら現実でも死ぬというのも、みんな昨日知ったみたいだ。向こうの世界がゲームの中なのか本当に異世界なのかよく分からぬ以上、下手な気は起こらないようにと注意喚起までしてある。

皆最低限の良識を持つている人達ばかりで、これまた本当によかつた。

さて、あまり見たくはないが本日の犠牲者はつと…

…今日もまた有名人だけで60人強。中には家族ごと病死した議員もいるらしい。

その肝心の病因とやらも公開されたが、心臓発作、心不全、肝硬変、脳溢血とばらばらであった。中には朝起きた時は何も症状が無かつたのに突然急死した人物もいるらしい。これだと本当にあのゲームが原因なのかよく分からぬが、ネット上では黒い噂の立つて

いる人物だったので一応その範疇に入れられているらしい。

一応、国や警察も緊急対策本部を作つてはいるらしいが、一体何をどうやって調べるのだろうか。今公開されている分で分かつてはいるのが、この事態が日本国内限定で起こつてはいることから犯人は日本人の可能性が高い、ということだ。だからどうしたつて話だけだな。人為的に他人を病死させるなんてファンタジーもいいとこ。そういう漫画が過去に連載されたから、そつちの線も調べているみたいだけだ。

ネットの匿名掲示板での反響は、これまた更に加速していた。新世界の神が降りて来たと崇める人。殺して欲しい人をリスト化する人。ただこの事態を面白がっている人（これがおそらく9割ほど）などなど。

一部のWebサイトでは犯人特定のための推理考察を載せている所もあった。あまり期待せずに眺めていたが、意外と核心をついているのも多く結構参考になる。こつちとしても人が死ぬ原因、殺害方法は知っているのだが、殺した犯人自身は分からないのでここでの情報はしばらくお世話になりそうだ。

このサイトの管理人が言うには

犯人の情報源は主にインターネット。厳密には信用している情報源がインターネットだということ。これは死んだ人物の傾向から推定できる。死亡した人物はテレビや雑誌ではあまり取り上げられていないが、ネット上では悪く言われている人物であること。逆にマスコミには悪く言われている人物はほとんど死んでいないことを見ると、ネットの情報を強く信じている傾向があると判断できる。

さらに思想はネット右翼： かどうかは分からぬがそれに準ず

るものを持っていること。死んだ人間が主に在日系、もしくは東アジアの特定の国を賞賛、支援するような発言を行っているような人物が多いこと。逆に在日を排斥するような発言をしているような人物に対しては、犯罪歴があつても殺していないと言う事。要は純日系のヤクザには手を出していないと云う事。企業人も何人か死んでいるが、全てネット上で在日系だと噂される人物ばかりだ。

これらの事から、犯人は学生、もしくはニートの可能性が高いということだ。社会人の可能性が低いのは殺人の手間を考えての物である。また世の中を変えるにしても、政治に関わる人物を一辺に殺していることから、そつちの知識には疎い、つまりあまり考え無しに殺害しており、精神的に未熟というか浅はかなところがある…とまで書かれてある。

思想云々に突っ込む気は起こらないが、少なくとも学生かニートの可能性が高いというのは支持したいところだ。ネットゲームをこんだけやり込める人間だというのだから。主婦の可能性だつて捨てきれないけど。

しかし、こんな事態が表立つて知られるようになって2日目でもう世間は他殺という線を考えているんだな。少し感心した。これだけの騒動だし、漫画の影響も多少なりともあるんだろうけど。

だがこれを受けて、自分は標的にならないと勝手に安心しきつてこの事件を面白がったり、問題解決ではなく、犯人の人格否定から入るような人達を見るのはあまりいい気分がない。結局大半の人は自分は外野にいるから安全だという考えが元になっているから、そんな事をほいほい発言できるのだ。こつちがその気になればいつでも誰でも殺せるのに。当事者としてはかなり複雑な気分である。

周囲に全く期待できないと云うわけでは無くなつたが、このネットゲームが原因だということに辿りつけるのは果たしていつになることや、

でも氣づかれたら氣づかれたで、俺らも疑われる可能性があるんだよなあ。証拠も糞も無いけど、やってないというアリバイも無いし。下手したらプレイヤー全員連行という事態もありうる。それは勘弁してほしいところだ。となると、やはりこれは自分たちの手で解決するべきことなのだろうか…

自分が死ぬか、殺人犯の容疑をかけられる…
この最悪の2パターンだけは絶対に避けたい。

さてさて、ジーすつペ…

とりあえずは今日のレベル上げに付きあつてくれる人を掲示板で募ろうか。まあどうせ他の人も同じこと考えているだろうから、それに便乗すればいい。

昼何時から何時まで、夜何時から…といった具合に各人の都合に合わせて、常時募集がかかっている。ゲーム 자체のクランとかフレンド機能が不完全なため、ここの中板がその役割を果たしているわけだ。

今日は昼1時からの部にするか。サイトさん、A s e l i a さん、にいにいさんなど顔なじみもいるようだしな。自分も参加しますつてレスを… ポチつとな。

今のところ俺含め6人… パソコンのスペックもまあ大丈夫だろう。

俺のレスが画面に表示されると同時に、また新しいレスが下に表示される。一瞬、誰かと投稿がかぶったかな？と思つたがそれは A s e l i a さんのもの。

Aselia 「なんかヤバいことになつてるぞ！ 公式見てみろー！」

ヤバいこと…？ 公式サイト…？

『本日は特別に全プレーヤーに経験値3倍ボーナス！ 難解なダンジョンに苦戦しているやこの君！ このチャンスを見逃すな！』

『特殊クエスト「クリスタルの導き」を追加！ ダンジョンに挑戦した回数に応じて、クリスタルの発掘ポイントをいくつか提示されます。世界中に散らばる発掘ポイントのどこかに「A・R・クリスタル」は眠っているぞ！ 早い物勝ちだ！』

運営め。

ここに来て 一気に 殺 る 気 な の か？

サイト「まざいんじゃないのかこれ！？」

「いいいい「でも止めようがないよ？」

櫛坊主「公式の掲示板が物凄く盛り上がってるぞ。今日はプレイヤーが激増する予感」

くろね子「折角、最近は飽き始めた奴らが増えて来たのに…」

Aselia「まさか俺達の対応を見て運営が本腰入れて来たとかじゃないよな？」

マジなのか…？ 本当に俺達は向こうつの世界でも監視されていて… ひたすら町に籠り続ける俺達に運営が業を煮やしたとしたら…
夕凪（管理人）「みなさん、公式で悪いことになりますけどどうしますか？」

サイト「夕凪さんは絶対にプレイしないでください。事情がある程度知っていて、かつゲームに取り込まれていない人は他にいませんから」

Aselia「明日は死人が増えそうだな畜生！」

〔冗談じゃないぜAseliaさん！ まだ黒い疑惑のある悪人候補ならともかく、死ぬのは何の犯罪も犯していない一般人だ。それも

ほとんどが若者。」ことあつてたまるか！」

れんちえふ「いや待て。これは逆にチャンスもあるんじゃないのか？ 今晚取り込まれた奴を一人でも多くじつちの仲間に引きずり込めば、運営共に対抗できるかもしれん」

サイト「頭数は増えますけど同時に多くの人を危険に晒すかもしれませんよ？」

くろね子「かと言つてこの状況は止めようがないだろ。 の意見は目的はともかく人命救助としては一番現実的だ」

櫛坊主「だつたら向こうの世界で待ち構えて、うろたえている奴に片づぱしから声を掛けまくるしかないな。メンバー全員に拡散しうぜ」

にいにい「それと今の内に思いつきリレベルを上げといった方がいいと思つ」

れんちえふ「とにかく今は確實にやれる」とをやるぞ！」

…れんちえふさんの意見は一見正しい。
正しい… が、大事な事を見落としている気がする。

向こうの世界に取り込まれた人達が下手にダンジョンなどに入ることによって、命の危険に晒される。これだけは絶対に避けたいし、彼が提案したように注意喚起することで防ぐことは出来るだろう。

だが、取り込まれた人達が向こうの世界についてどう思うのかが問題なのだ。

おそらくかなりの御新規さんが流れてくるだろう。彼らが世界の仕組みを知り、殺人願望が表層化する輩が出る可能性も無いことは無いのだ。寧ろそれを一番警戒すべきではないだろうか。俺達はまともだが、今晚連れて来られる輩も全員そうだとは限らない。

… 考え過ぎだらうか。このことをみんなに言つべきでしょ？

G.i.l.l.yさん…

32話 殺る気満々じゃないですか（後書き）

「製作者」なのか「制作者」とするべきかで迷つてたり。

あと本作は作者の思想が当然の如く入っていますが、政治的な物や人種問題についての論調においては全てフィクションであることを強調します（迫真）

33話　「これは不味い気が

薄らと開けた目に入つて来るのはぼやけた光景。耳に入るのは大勢の人間の喧騒。肘にはいつものひんやりとした木の感触。前後に揺れ動く頭。

次第に微睡みから覚め、俺は夢の世界へ入る。

「……さん。……エル……さん！」

若い男の声……って、もう主は知つている。

「ああ……YASUさん。すみません、ちょっと寝てました……」

目の前には、最近は御無沙汰だけどいつものパーティー。YASUさん、Pon太さん、まるちーさん。やつぱりこの四人が何だか落ち着くメンバーだ。今日もお変わりなく。

YASUさんとPon太さんがやたらと鬼気迫る表情をしていること以外は。

「シエルさん！　あなたはどうなんですか！？」

「…どうしたんですか？　二人とも」

「あなたも意識がキャラクターの中に入つたんですか！？」

俺はまだ虚ろさの残る目でただ一人戸惑う、まるちーさんの顔を見る。

「さつきから二人とも変なんですよ。いきなりここはゲームの中の世界だとか、私はそうでないのかとか聞いて来て…」

なるほどねえ… 一人も、か。気が付くと三人分の視線を一手に引き受けている。

みんな俺の答えを待っているみたいだ。

「まあ… 詳しいことは『俺』も知らないつづーか、調べている途中なんですけど… 今分かつていてる事だけお話しますよ」

俺は今日になって取り込まれたであろう二人にこの世界について話した。結構内容が多いので時間がかかったが、彼らも所々で顔を顰めつつも大体理解してくれたようだ。それと彼らは十分信頼に足る、というか変な気を起こさないだろうと思つたので、現実世界の出来事と合わせて二つの世界の繋がりについても教えてあげた。ただ一人、未だに意識が取り込まれていないまるちーさんには冗談半分にしか聞こえないのだろうが。

そして案の定、唖然とするYASUOさんとPon太さん。仕方ないね。

「シエルさんはもつと前からこんなことに?」

「俺はこれで五回目ですよ。今ではもつ慣れたもんです」

俺は柄にも無く経験者の余裕をかます。あくまでもこっちに来たら死ぬリスクが格段に上がると教えた上で、彼らの不安を取り除いてあげようという配慮に基づいてだ。

取り込まれた初日は慣れない世界と体に戸惑ってしまうだろう。

そんな中で自分と同じような境遇、そしてこの世界のことをよく知っているガイド役の存在は何よりも心強い。そしてその分、精神も安定する。じつとしても指示が送り易くなるのだ。

今となつては俺が必死にG·I·L·Yさんを引きとめたのも懐かしい。まだ一週間も経つてないんだよな。ここ数日は時間が立つのが随分と遅く感じる。実際に睡眠時間を無くして活動しているようなもんだしな。

「と、とにかく、町の中にいれば安全なんだよね？」

獣人のP·O·n太さんが不安そうな顔で尋ねて来る。さつきから妙にしゃべり方に違和感があるし、中の人は女性なのかな？

「少なくとも俺達は今までそうやって問題無く過ごしてきたので大丈夫ですよ。この後、同じく取り込まれた人達みんなで集まろうといふことになつてるんですけど」

これは仲間内の人、れんちえふさんの提案だ。今晩はゲーム世界へ精神トリップする人たちが続出すると予想されるため、終始仲間集めに従事してほしいとのこと。さらに新しい仲間をノツイミラーの町（要は今いる町）の中央広場に集めて、集会を開いて団結力を高めようというらしい。

まあ考えとしては悪くは無い。自分たちの仲間の規模を知つておけるし、これだけの味方がいるという一種の安心感も容易に覚える。さらに集団心理で変な気を起こす人を押さえる効果も狙つているらしい。こら辺は日本人ならではだな。

「いや～ 最初はどうなるかと思つたけど、シエルさんがいて本当に助かりましたよ」

これだけの話を聞いて少し安心して緊張が解けたのか、YASUさんがいつもの（チャット上の）和やかな雰囲気になる。Pon太さんはやや不安も残つてゐるようであつたが、軽く頷いていた。ただ一人、まるちーさんは要領を得ない表情だった。しゃーない。

「私には何が何だかわっぽり……現実世界とかゲームがどうだとか

…」

「まるちーさん。世の中には知らなくていいことも沢山存在するんです。俺からしたら、まるちーさんの立場は物凄く羨ましいんですねから

俺は泣い声色（でも少女声）で、まるちーさんを無理やり納得させる。彼は終始首を傾げっぱなしであった。

今のところ命の危険の無いまるちーさんと別れ、俺達三人は町の広場へと向かう。ゲーム画面そのままの光景を目の当たりにした二人はしばしば足を止めていた。これは無理も無い。ゲームの中に入れるなんて、子供から大人まで共通している夢、妄想なのだから。しかし昔のヨーロッパ風の街並みに、住んでるのはほとんど日本人だからな。毎回思うがこのアンバランスは何とかしてほしい。どうしてこのゲームの中にコピーされるのは日本人限定なのだろう。ヨーロッパの人とかを入れたほうがもっと雰囲気出るだろうに。単に容量の問題だろうか？ この町だけでも滅茶苦茶広いしな。

日本人のコピーが存在するということは、この世界も今の日本くらいの規模があると思つていい。一億ン千万は確實。ゲームの登場人物もいるからそれにちょこつと+があるくらいだ。もちろん冒険者たちの集う町・拠点はここだけでなく他にもある。この町が序盤からお世話になり、クエストの大半もこの冒險者ギルドから受

けるので、みんな利用しているだけだ。本稼働になつたら色々追加が入るんだろうけど。

… そうなると、気になつて来るのは現実世界の悪人を殺している奴らがどうやって、こっちの世界に存在する「コピー」を探し出して特定しているかだな。こっちには流石にネットとか使える端末の様な物は無いし… 一つの町にある程度集約されているとは言え、これだけの人数からお世当の人間を探し出すなんて気が遠くなりそうだ。こちらの世界に来れるのは現実世界で寝ている時だけだから、いつまでも留まる事は俺の経験からいって不可能だし。時間的にはせいぜい1~2時間が限度か。その間にほぼピンポイントで50人以上を殺害しているということになるわけだけど。

うーん… 顔や性格以外にも何か共通点とかあるのかな？ そこから割り振れば…

G.I.L.L.Yさんはおそらく複数犯だと言ったけど、だとしたらその人数も気になる。この世界に取り込まれた人は、こちらでは確實に数を把握できないし。数人規模ならともかく、向こうも何十人もいるとしたら… あまりその先を考えたくないな。

「シエルさん。ちょっとといいでですか？」

歩きながらずっと考え込んでいたので、YASUOさんの声に少しどきりとしてしまう。

「私もこの世界の事はまだよく信じられないんですけど、一つ気になつたことがあって」

「何ですか？」

「方法は良く分かりませんが… こんな事態を生みだしている犯人がいるつておっしゃいましたよね？ そして今のところの最有力候補はゲームの製作者だといつ」とも

「確信はないんですけど、それが一番可能性が高いかと」

「『デバッガー』… とかはいなんですかね…？」

「実際にプレイして調整とかを行う人の事ですか？」

「はい。この現象が起きたのは6日前つておっしゃつましたし、試験稼働版でプレイヤーの反応を最終調整代わりに使うつて話も出てますけど… 製作者側のデバッガーが全くいないとは思えないですよ。実際にプレイヤーに交じつてやつているという話もよく聞きますし」

デバッガーはアルバイトがほとんどだという話は聞くけど… でも製作側の人間だ。少なくとも製作者に近い人間だ。彼らならレベルも高いだろうし、こっちの世界に来ていることも十分に考えられる。

「状況が状況ですし、いたとしても簡単に見つけられないとは思いますが…」

「いや、でもいい線いつてると思いますよ、YASUさん。みんなにも話してみます」

正直捕まえる方法とかはさうぱり思いつかないが、もし特定できれば何か情報を吐かせることも出来るだろう。ない可能性もあるだろうし、かなり難しいとは解かってるけど。このまま闇雲に情報

を集めようとは…

「あつ……」

「どうしました？ シエルさん」

「い、いや。何でも無いです！」

俺は一瞬どうしてみんなこの事に気づかなかつたんだろうと思いつつ反省した。俺は本当に単に気づいてなかつただけなんだけど。多分他の人も何人かはその考えに至り、敢えて発言しなかつたのではないかだろうか。理由は今の俺だったら何となく解かる。

だとすると……この集会は大丈夫なのだろうか？ 一波乱起きそうな気がする。寧ろ何で今までそれが起きなかつたのか不思議なくらいだ。他の人もちゃんと考へた上でのことだつたんだ。G.i.l.l.yさんに頼り、色々と分かつっていたつもりになつていた自分を急に腹立たしく思う。

でも、今からじやどうにも……こんな事態には慣れていない。

34話　「ただいまおとどけます（前編）」

リアルが忙しくて更新遅れ気味

34話 ジれだけをまとめるには

「ようシエル。その人達は…」

広場でまず出迎えてくれたのはA seliaさんであった。傍から見ると凜とした美人女騎士だというのに、中の人の関係でややだらしなさが前面に出ている。仲間内からも男口調が勿体ない人物だと言われているくらいだ。でも男は男だし。

「俺がよく組んでいるパーティーの人達です」

三人で軽い自己紹介を行つてはうちに、俺はぐるりと辺りを見渡す。中央広場はレトロな石畳の地面に、広場の真ん中には町の子供たちの遊び場と化している噴水と、いかにもゲームの中の広場のテンプレともいえるべき所である。広さも東京ドームくらいはあるそうだ。東京ドーム行つたこと無いけど。

ゲーム内でも待ち合わせの場所としてよく使われているため、冒険者の姿も結構見かける。その中のどれだけが、こっちに意識を取り込まれた人なのやら。

「…今んとこ、今日の新入りはあんたら合わせて30人くらいかな
ちょうど同じことを考えていた所にA seliaさんの言葉が耳
に入る。

「30人もですか？今までのメンバーと同じくらいじゃないですか」

「しかも今の時点でだ。集会まではあと2時間以上あるし、もっと増えるだろうな。今20人くらいで町を回っている最中だしさ」

A s e l i aさんは噴水の淵に腰掛け早くも寛ぎ体勢に入る。周りをざつと見渡す限り顔見知りの人もいないし、この人が留守番つてどこか。単に人に声を掛けるのを面倒臭がっているだけかもしれないが。

「まあ時間までたっぷりあるし、そこら辺でのんびりとして構わないぜ」

「では時間まで、私たちも他に取り込まれた人を探すのに協力させて貰えますか？」

責任感の強そうなY A S Uさんらしい台詞だが、A s e l i aさんは首を振つて制止した。

「ゲーム画面だと見慣れてるかもしだれけど、初めてだと結構迷うぜこの町。広さが尋常じやないからな。それにあんたらはまだ状況を上手く説明出来ないだろ？ 噴水の周りの奴らはみんな同じ新入りだしさ、そいつらと交流でも深めてくれよ」

単に俺がこの人のことを穿った見方をしているだけなのかもしれないが、新入りを気遣うようでどこか適当な物言いのような。Y A S UさんとP o n太さんは少し困ったような表情をするが、彼は意に介す様子は一切見せない。

「あ、シエル。お前とはこれから少し打ち合わせをしたいんだが」

「打ち合わせ？ はい、いいんですけど…」

横目で一人が顔を見合わせて軽く頷く姿が見える。彼らもAse liaさんの意図を何となく了承したらしい。二人共、こちら辺は流石に大人だ。YASUさんとPon太さんは、この場を離れ噴水の周りに集まっている冒険者達に話しかけていた。

「ちつと印象悪くしたかな？」

離れた一人を見てAse liaさんが軽く苦笑いする。

「分かつて言つたんですか…」

「まあいいさ、仲間はこれから腐るほど増える。お前の仲間とはいえ、誰も彼もと深く付き合うなんて面倒くさくてしょうがねえや」

それって、色々とダメな人の台詞だよAse liaさん。この人は根っからの性格が悪いとかじやないんだろうけども… 多分。現状を考えて、他の人に悪印象を与えるのは得策では無い気もするが。

「それで？ あの二人を遠ざけたつてことは何か大事な話でも？」

「おう、話が早い。お前はこんなことになる前から知り合いだし、間違いない『シロ』だから言えることなんだけどさ…」

シロって何だ。何だか物騒な気がしてきたぞ。

彼は一人が近くにいた時は比べ物にならないくらいの真剣な表

情になり、ヌツとこちらが思わず身を引くくらいに顔を近づける。

「俺の仲間が殺された」

「えつ…！？」

耳元でぼそりと囁かれたのは、あまりにも唐突な上に色々と省きまくっている台詞。言わば核心を先に言つちゃうアメリカン的な？とにかく穢やかな事では無いのは確かだ。

「えつと… 殺されたって、誰が？ 誰に？」

俺は周りのことを考えて小声で尋ねた。Aseliaさんも周囲にこの話が漏れないようにキヨロキヨロしながら話を続ける。こういつ話は他に人がいない所でやつた方がいいと思うのだが、それだと余計変に疑われるってことか？ 幸い噴水の音で声は少し通り難くなつてゐる。

「お前は多分知らない奴だ。俺のこのゲーム始める前からのネット仲間でな。掲示板のメンバーには入っていないが、俺個人とはこっちに来てからも色々付き合いがあった。昨日までサイト達にも言ってなかつたんだけどな」

「どうして俺達の仲間にならなかつたんですか？」

「早いうちから他人があまり信用できなくなつていたせい、かな？ 多分。お前だってG·J·I·I·Yとかいう訳解からん人がいるだろ。お互い様だ」

互い様…か？ 事情は色々違つ氣もするが。

「どうやって殺されたって知ったんですか？」

「昨晩4人で町を歩いていたる最中に殺された現場に出くわしたんだ」

「町中で殺されたってなら犯人は…」

「それは分からん。俺達が現場に付いた時は時既に遅しだったよ。右肩から左腰にかけて真つ二つ。そいつは鎧も着てたし、鋭利な切り口から見ても冒険者…恐らくはファイターであることはほぼ間違いないって言られてたな。…ああ、安心しろ。お前やG.I.JOEとかいう人は微塵も疑っちゃいない。現場は互いに剣で一線交えていた感じの惨状だったからな。ソーサラーやシーフはすぐに容疑者から外れる」

「何とも複雑な心境だが、とりあえず俺と付き合いの長い人物の中に容疑者はいなくて少しほっとする。もちろん自分が疑われてないことも含めて。

しかし、剣で一戦交えた、か。何でそんな事態に？　こっちの世界で死ぬことは、現実でも死ぬことだ。初見でもない限り、自らの命を危険に晒すようなことは普通しないと思うが。

…いや、違うな。一つの仮定が当たれば当時の現場の状況を簡単に組み立てられる。

「…それは本当に冒険者がやったなんですか？」

「少なくとも、そいつはレベル47のファイターだ。この町のモブや低レベルのキャラにそう簡単にやられるような奴じゃない」

「モンスターという線は…」

「これだけ大きな町、しかも町の真ん中の一角だけで起つたんだぜ？ モンスターならもつと大騒ぎになつていいさ。それに被害者だつてもつと出でているだろうし。人に化けられるモンスターでもいたら話しあ別だけど」

確かに今のところそんなモンスターの存在は確認されてないし。それに人を襲うにしても町の内側でやるなんてそれこそ意味が分からぬ。変幻自在のモンスターとか考え出すとキリがないが、動機や周囲の状況を考えると人間の仕業だという結論に達してしまう。ちょうどこの世界では謎の連續殺人事件真っ盛りだしな。

「目撃者とかはいなんですか？」

「それらしき人を含めて殺されてる。まだ年端もいかない男の子とかな。おまけに近所で一家丸々殺害されたつていう事件があつたらしくて、さらに医者の話ではそっちの方が先に殺されたみたいで…」

「…姿を見たから殺した」

「そう思うよな」

「はあ～」とA s e l i aさんは遠い目をしながら溜息をつく。

気がつけば犯人が人でないという僅かな可能性に望みを託す自分がいる。あくまでも比較としてだが、知能犯のモンスターがやつたという一辺倒の考え方を持てたらどんなに気持ちが楽なことか。

何のために人を殺す必要があるのか。今となつてはその動機がある程度推測出来てしまうのが何とも虚しい。G.I.L.Yさんが書いていたな、人を殺すことに慣れてしまつたらつて。

一度やつてしまつと歯止めが利かなくなる、か。

今の状況を考えればこんな考えを持った人間がいてもおかしくないのだ。いや、確實にいる。俺たつてこつちの世界に取り込まれたのが自分だけだつたなら、こつちから世の中の蛆共を成敗してやろうなんて行動を起こしたかもしれない。

でも他に同じ状況の人が、しかも大量にいるとなれば話は別。あまりにも簡単に完全犯罪を起こせる方法を複数の人が持っているということは、常に自分も命を狙われ続ける一人になるという事だ。犯人もそれが分かつていらないわけがないだろう。慣れると同時に引っ込みがつかなくなつてしているのかもしれない。

「でもどうしてそんなことを俺にだけ？ そんな重要な事だつたら…」

「容疑者は腐るほどいる。新入りの奴にそんなこと話してみろ。即パニッシュになるぞ」

「ああ、なるほど。一応この人なりに色々考えてはいるんだな。寧ろ俺をそこまで信用してくれてありがとうございます。」

「今日の集会…下手な事を言い出す奴がいたら一氣におじやん、どころか、一転して最悪の状況になるんだ。だからお前には早いうちに釘指しとこうと思つて」

「確かに、疑心暗鬼にでもなつて味方同士でいざいざが起きるよう

になつたら…」

「そゆこと。つーか、集会企画したれんちえふつて奴ほんと空氣読めねーよな。俺らのメンバー以外にそう思つてる奴絶対にいるつーの」

ああもう少し見直したそばから、この人ぶっちゃけすぎ。でも気持ちは分からんでもない。今まで味方と絡むのは少人数ずつだつたからよいが、これだけ大人数になるとあまり伝えたくない情報を隠すのも難しい。相手の胸中も分かり難いし。

これまでの俺達は互いに100%信用しているというわけでもないが、つかず離れずの微妙な距離感を保つていたわけだ。探り合つてはいるが、決して表には出さないという関係を壊さないようにしていた。

強固な結束は強い力を發揮できるが、その分崩れた時の代償も大きい。

「ということはAseliaさん。これはさつきのYASUさんの推理なんですがね…もしかしたらこの世界にはデバッガーとかもいるんじゃないかと」

「言、う、な、よ? 少なくとも集会中は」

やつぱりつか。

34話　「ただけをまとめるのは（後編）」

そろそろ話題を盛り上げたいなあ

35話　「これは…最悪だ…」

「この世界基準で午後3時くらいの町の大広場。

広場の中心の噴水の周りには大量の冒険者たちが集まつていて、周囲のモブ一般人の注意を引いていた。冒険者というのは一応この世界の価値観では一般人の（僅かな畏怖も含めて）憧れでもある立場ではあるのだが、ここに来ている人達は皆周りを気にして落ち着かない。今日という日から、百戦錬磨の戦士も中身はただの一般人になつてゐるのだから。

俺は後から来たサイトさん達とも合流し、集会の運営側の準備をしていた。具体的に言えば関係者の誘導とか。寧ろ部外者を遠ざける仕事の方が多かつたが。だつて総勢100人近いもんなあ。こんな真昼間から何事だと野次馬が集まるのも無理はない。

「シエールさんお疲れ様。はいこれ、差し入れよ

後ろから声つと、この艶のある女性の声はにいにいさんだ。彼女は紙コップのような容器に入つた飲み物を差し出してくれた。中身は…桜桃色の液体。一体何のジュースだらう。

「甘酸っぱくて結構いい感じよ。アセロラ？　みたいな感じ」

側面に付いているストローを取り（もう突つ込まない事にする）、軽く氷をかき混ぜながら飲んでみる。うん、何も聞かされずに飲むと表現に困るが、濃いめのアセロラドリンクという言葉が結構的を得ていると思う。この酸っぱさが先程からモヤモヤしている頭の中

をいい感じにリフレッシュしてくれる。流石はリアル女性のにいにいさん。

「いや～美味しいです。ありがとうございます」

「どういたしまして」

少し前の方で喧騒が大きくなる。どうやら集会の発案者のれんちえふさんが前に立つたみたいだ。その他古参掲示板メンバー何人かで人数と名前の確認を取つており、數えやすいようにきちんと整列まで促している。何だか中高の時の体育を思い出すな。

「そういえばシエルさんもあの話を聞いたんだよね…」

集団行動をぼんやり見ている横からにいにいさんが語りかけて来る。彼女の視線も同じく前を向いている。アバターは美人だが、美人って何となく感情が読みとり難い気がする。

「Aseliaさんの言つてたあの殺…死体を見つけたって話ですか？」

「ええ、本当に酷かつたわ… Aseliaの知り合いもそうだったけど、近くに倒れていた男の子なんて… 女だから血を見るのは大丈夫だと思つてたけど、あの惨殺体はもう無理。未だに目に焼き付いてこの夢が覚めても頭の中から離れないの…」

いや、多分それは俺も無理だと思います。少年の惨殺体とか実際に見たらトラウマものだわ。それを会話に出せるだけ凄いと思いますよにいにいさん。

「私さ… 現実では俗に言つ『喪女』ってやつだから、いつに来てからこんな美女になつて、男の人から一杯声をかけてもらつて、それを軽くあしらつたりして… 前にも言つてたけど少し楽しんじやつてたのよ。如月さんも死んだつていうのに…」

まあ俺だつてこの体でG行為やつてたくらいだし。外に出ると危険、町の中にいると安全、そう思えば現実の自分とは違うこの体で色々やってみる気持ちは分かる。

「…」はやつぱり現実とは違う所だから…」

「…。でもこの世界に入り込もうとすればするほど現実を思い知らされるのよね…」

取り込まれたのが一人、もしくはほんの少数ならそこはファンタジーとなる。だが、同じような境遇が何人も出でくると、たちまちそこには現実世界のルールが持ち込まれる。生まれて育った世界の文化、習慣、思想を急に変えることは出来ない。ずっとこの今までいられるなら話は別だが、毎日、しかも強制的に行き来しなければならない。頭の中から現実が消えることは絶対にない。

「俺も、やつぱり女の子にはなれないなつて思ひますよ。どうせだつたらイケメンのアバターのほうが、こっちの女性にモテモテでもつと楽しめたかなーつて思うくらいです」

「それだとこっちの世界では楽しめるけど、朝起きて鏡の前の自分の顔を見た時の絶望感といつたら…」

「…」

なるほど、これがこの人の言つている現実を思い知らされるつて奴か。変身願望はあくまでも願望で留まるべきなのだ。コスプレとかくらいで。一日の半分ずつを別の肉体、さらに都合良く変えた人格で過ごすとなると、どっちが本当の自分だか分からぬようになる。もちろん、普通の人間なら劣つていてる方の自分を次第に認められなくなつていくだろう。そして自分の理想を詰め込んだキャラクターと同化していく。しかし、そこは決して現実では無い。

「結局、男の人人が好きなのは『にいにい』であつて、私自身じやないのよねー」

こんな自虐的な嘲笑すらも絵になる彼女の整つた顔が今日は酷く歪んで見えるような気がした。……いや、歪んでなんかいない。これが本来の人間という生き物の顔だ。美しいとか、可愛いとか、惚れるとか、そんな物を超越した暖かみ・安心感というか……これが本来のあるべき姿なのかもしれないとも思い知らされる。

「えー！　すいませーん！　ちょっと静かにお願いしまーす！」

辺りにツンデレ委員長風の良くなつて通る声が響いた。黒髪ロングの姫カットの少女、あれはくろね子さんだけか？　じつちで見たのは初めてだ。彼女（多分彼）の声と共に、辺りの喧騒は一斉に収まる。5列横隊に整然と並んだ姿恰好も様々な冒険者の姿。後方から見ているこちらにとつては偉く滑稽に見える。みんな日本人なんだなあ。

その後噴水の淵の上にれんちゃんふさんが昇り、一段高い所から集まつた人達をぐるりと見渡す。やや緊張した面持ちながら、よく通る声で新しく集つた人達に現状と、この掲示板同盟（仮）のことについて話し始めた。もちろん、この世界と現実世界の繋がりに関し

ても。その時は更に真剣味が増しているようであった。

「…ですので、皆さんはくれぐれもこの仕組みを使って殺人などを起引しないようにしてください。少なくともこれは決して完全犯罪と呼べるものではありません。この事態を引き起こした何者かについて、私達の行動が監視されている可能性もあるのですから」

子供たちに念を押すかの如く、れんちえふさんは何度も悪事には一切手を貸さずにまずこの状況を何とかする方法を考えていこうと繰り返した。新入りの人達も表情こそこの位置からでは見えないが、特に私語もないでの割と真剣に聞いているのだろう。

「…はい、私からは以上ですが、何か質問などはございませんか？」

説明が一通り終わり、れんちえふさんも一息ついていた所で、聴衆の中からすっと手が挙がるのが見えた。今の俺の身長が低いせいもあるのか、容姿は他の人に隠れてわからない。

「はい、なんでしょうか」

「俺達の行動が監視されるかもしれないって言つてたけど、それだったらこの集会とかも見られてたりする可能性もあるんじゃないか？ 確認しつくけど、みんなで手を組めば絶対に安全が保障されるんだよな？」

男の人の声だったけど、少し語尾が震えているようにも思えた。

「はい、少なくとも今のところは。だけど絶対に安全とは保証できません。現実でも絶対に交通事故に遭わないことは言いきれないのでしょう？ 気を付けねばある程度の安全は保障されます」

「事故で死ぬくらいのリスクも当然あるわけですね？」

他の人が言葉の先を截つ。それに対してもれんちえふさんも黙つて頷く。

すると今度は拳手もせずに他の所から声が上がる。

「でも、実際に人を殺しまくっている奴もいるんだろ？ そいつらに命を狙われたりとかしねーのかよ？ 口封じとか言ってさ」

「それを防ぐために、大勢で同盟を組むわけです。向こうが何人いるか知りませんが、これだけの数がいれば迂闊に手出しできない。そういう状態を作りたいんです」

れんちえふさんは毅然とした態度で応じる。まあ言つてることも正しい。手出し出来ない、というのが自分達と同じ境遇である人にしか適応されないのが痛いが。

「でも逆に組んだせいで、闇討ちとかされたりしないの？」

「その可能性は…否定できません。しかし少人数で勝手な行動を取るよりは安全だと思いますが… 現に今まで被害者もいないわけですし」

隣でにいにいさんが声を洩らしながら複雑な表情をする。…ああ、れんちえふさんにはまだ言つて無かつたんだな。彼女達のパーティー限定か。大勢で組めば危険は減るだろうが、口封じで殺される可能性は大いにある。この事を言つてよいものかが悩みどころだ。

御新規さん達の中でややざわめきが起つてはいるが、手を組む

ことに否定的な声は聞こえない。彼らにとつてはまだ右も左も分からぬ状況なので、とりあえずはみんなと一緒にいる方が安全だと結論付けたのだろう。俺が同じ状況だったらそうする。

そんな中でまた一つ手が挙がる。

「この状況を何とかする方法を考えるって言つてたけど、何か見込みとかあんの？」

「現在の所、製作側にこのゲームを止めさせようって話は出ていますが…」

「それで本当に解決出来んのかよ？」

最後に手を挙げた男はやや反発気味というか、周りの人たちあまり信用できないでいるような感じがした。少し口調も乱暴な感じだ。

「大体こういう状態を引き起こしているのが本当に製作者だとしたら、こんな大勢に決起されたら困るんじゃねーのか？　俺だったら、そうなる前に普通何とかしてあんたらのような連中を黙らせると思うけどな。監視されてるかもしれない…んだろ？」

男はさらに語句を強める。

「それによつ、あんたらこんな集会なんて開く手間があつたら何でそつなる前に俺達がゲームをやるのを止めなかつたんだよ」

「私達は色々な所でこのゲームを止めるよつと言つています。しかし、実際は警察沙汰になつたりして上手く伝える事が出来なくて

… 当人にでもならない限りゲームの中に入るなんて話信じてくれませんから」「

「俺はよくこのゲームの雑談掲示板とか利用するけどそんな話見たことなかつたぞ？ お前ら本当に伝える気あんの？ 色んなサイトで拡散とか、町中でデモつたりとか、もつと色々出来るじゃないか」

「それがゲームに対するいわれの無い誹謗中傷として片っぱしから処理されてしまうのが現状なんです。だからそのためにも大勢で協力することが必要なんです。大勢でゲーム差し止めの声を上げれば、世間も無視することは出来ないでしょう？」

「今の時点で世間に狂つてるって言われるのをビビつてるやつらが、会社に抗議とか本当に出来んのかよ？ 人数つてせいぜい数十人から百人程度に増えるだけじゃないか。大して変わんねえよ」

不毛なやり取りはしばらく続いた。周囲も茫然としてその様子を眺めている。

「何があいつ感じわるー」

隣でにいにいさんが呆れたように呟く。

「一部正論も交じつてますけど、要は単に煽つてるだけですもんね。ijoで言つ必要も無いし」

「絶対現実だと荒らしどがやつてる奴よ」

煽りを入れている奴は文句を言つている割には新たな解決策を提示しようとする気配は無い。単に自分が巻き込まれた事に対する腹

いせをぶつけているような気がする。れんちえふさんのみんなをまとめるという行為は解決策にはなっていないかもしねないが、対応策としては簡単に批判出来るものではない。

「…私達に協力するかどうかはあなたの勝手です。強制する気はありません。ただ、皆さんの不安を無闇に煽らないでください」

「あんたらの言つてることやつてる事が一々矛盾してるからそれを指摘してやつてるだけじゃねえか。それによつ…」

男は一息おいて吐き捨てるように言つた。

「あんたらの中、いや、ここの中にゲームの製作者が交じつてる可能性とかもあるんじゃないのか？ レベルが上がればこっちに来れるんだろう？ 当然作り手もテストプレイとかやつてるだろうしな、いない方が不思議だ。まさかそんな事も考えていなかつたなんて言わないよな？」

「それは…」

俺の位置から見える古参組の表情が一気に曇るのが見えた。駄目だ。これ以上言わせたら不味い。危険察知と人の不安を搔きたてることはまた別物。そういう事はある程度信頼関係が出来てからでないと…

気が付けば聴衆のざわめきは消えていた。新規の人達は皆口をつぐんでいる。他の古参の人達も事態を收拾しようと動きを見せようとしていた。

(……?)

一瞬、俺の頭上から風を切る音がした。俺が上に気を取られていた瞬間、隣から聞こえたにいにいさんの擦れた悲鳴で我に帰る。その直後、大きな水音が周囲に響く。

辺りは騒然となっていた。そしてれんちえふさんの姿も見えない。

「伏せろおおお———っ！」

Aseliaさんの怒号が飛び、全員が一斉に身を屈める。俺の頭上からさらには風を切る音が何本も聞こえてくる。身を地に付けた瞬間、目の前ほんの3mという所の石畳を抉るように何かが突き刺さる。

「これは……矢？　どこから飛んできた？　後ろ？」

「プロテクションファイールドッ！」

プリーストの誰かが、俺の少し後方に物理防壁を展開する。俺はすぐさまその魔法の「壁」で矢が弾かれる様を目の当たりにする。

「畜生！　どこから撃つて来やがった！？」

Aseliaさんとその他何人は武器を構え、戦闘態勢に入っていた。俺も物理防壁を信頼し、ウィザードロッドを構える。距離が分からぬなら一応レフレイムレーザーか？

：だが、次の矢はいくら待っても飛んでこない。こちらが位置を割り出す前に逃げられたのだろうか。

「テルミさん！　一応まだ防壁は貼り続けてくれ！　いつ飛んでくるか分からない！」

「れんちえふはー!? 回復魔法で治せないのか?」

「…駄目です、効きません。即死…だと思います」

「蘇生魔法とかねえのかよーへそつー!」

俺はおぼつかない足取りで噴水まで向かう。怯える人を搔きわけて行くと、その場で茫然と立ち尽くすサイトさんを見つける。彼の足下にはマントのような布を上半身に掛けられたれんちえふさんと思われる人物が横たわっていた。

「サイトさん… れんちえふさんは…」

「鼻から、上が…」

彼はそれ以上言わなかつた。でもそれだけで俺は十一分に理解出来た。

噴水の水の一部が赤く染まつている。更に水面に浮かぶ肉片のような物がその惨状を物語つっていた。

35話　「これは…最悪だ…（後書き）

更新間隔がちょっと空いてしまいました。
同時に字数もどんどん増えてます（笑）。
始めから読んでくれている人はもう気にしないよね！

36話 直戦布告といつやつやつか（漫畫セイ

投稿が遅れて本当に「めんなさい」（焼き土下座）

36話 直戦布告とこいつがいますか

「ちよっとー、みんなどこに行へつもつですかー!?」

周囲が騒然となつてゐる中、くろね子さんの必死な声が聞こえてくる。

「俺は……抜けをせてもらいます。あんな風に狙われたんじゃどうしようも……」

「私も。組む方がかえつて危険な気がしてきました……」

「…………」

彼女（彼？）の質問に答えるのはまだいい方で、多くの人は無言で逃げるようにしてその場を去つて行った。くろね子さんは口惜しそうに、文字通り地団太を踏む。ヘタレ属性の女の子は割と好みだが、今はそんな事を考えている場合ではない。

「こんな状況になることが撃つて来た奴の狙いつて…… いつもに来てばつかじやそんなこと考えないか」

後ろからサイトさんが呟く声が聞こえる。彼は先程からかがみ込んで、虚ろな目でれんちゃんふさんの遺体をじつと見つめていた。

「おまけにこの中に製作者がいるかもしれないなんて、ぶちまけられたからなあ。おい、そろそろ防壁を解除するから、あんましほやぼやするなよ」

A s e l i aさんがやつて来てサイトさんの肩を叩く。サイトさんは遺体の前で手を合わせて軽く黙とうすると、立ちあがつてA s e l i aさんに小さく「大丈夫だ」とだけ言つ。

「…で？ そのことをぶちまけた本人は？」

「じきくさにまぎれて逃げられちまつたよ」

A s e l i aさんが肩をすくめる。だが、表情は少し暗いまだ。あまり好んでない人物とはいえ、目の前で悲惨な死に方を見せられたら誰だってそうなるのは当然だが。遺体は冒険者ギルドに連絡して引き取つてもらうようになるとのこと。とりあえず俺達はすぐにここから引き上げたほうがよさそうだ。

幸いだつたのは俺達が集まる掲示板のパスワードをみんなにまだ教えていなかつた事。よつてここから外れた人達はあの掲示板を除く事は出来ない。情報共有はあくまでも信頼の証でもあるのだ。悪く言えば互いが互いに監視出来る状態、それが掲示板メンバーであることの暗黙の了解でもあつた。

「これからどうするんですか？」

「とりあえずどこかに避難して次の方法を考えましょ。それに、大勢でいる方が安全だと考える人はそのうちきつと出てくるはずです」

×ぽんさんも浮かない顔を解けずにいたが、気持ちは既に次のやるべき事に向かつているようだ。後ろの方で防壁を貼つてくれたテルミさんがこちらが軽く注意を促し、そして光の壁が消滅する。まづは、とつとこの場を離れたほうがよさそうだ。

「だな、避難場所は… ちょっと狭いけどいつものとこにするか」

「了解です」

ちょっと狭い、いつものとこ=宿屋アートマーだな。20人入れるかどうかも分からぬが、他の人も大部屋を借りてるので分けて入れようとのこと。その場を立ち去る前にざつと広場を見渡してみたが、冒険者と思われる人影は見当たらぬ。寧ろ俺達の他に人々一人ない。モブの見物人含め、もう既にみんな逃げ出した後か。

大勢の人人が集まる場であんな惨事を見せつけたとなれば、かく乱効果は十分すぎるだろう。もしかしたら、この集まりにいちやもんをつけた人は矢を撃つてきた奴の仲間かも知れないし、あの煽りも俺達を互いに疑わせるためにうつた芝居なのかも知れない。…今更こんな事を考えても後の祭り、か。

俺達はやや小走り気味に広場を離れ、町の中央通りに向かう。ここならモブキャラの人通りも多いし、隠れる場所も多い。逆に闇討ちもやり易いかも知れないが、複数で適度に固まつて動けばひとまずは安心だ。

「しつかし、あんな簡単に殺つてくるとはな…」

周囲を警戒しつつも、A seliaさんが眉間に皺を寄せながら苦々しく言葉を吐く。いつもは妙に楽天的かつ皮肉屋な人だが、流石に今回の出来事は堪えたらしい。

「おそらく、こっちで散々殺人とかやっている奴だろうな… もしくは俺達をこの世界に引きずり込んだ張本人か…」

サイトさんの意見には概ね同意する。これまで想定に留まっていた俺達に敵対する存在が、ついに明確になつたのだ。これからは奴らに対しての対応も考えていかなければならない。少なくとも敵は俺達が大勢で組むのを望んでいない。となると、あまり頭数には自信が無いのか、それとも俺達を協力させずに何かさせたいのか：

「今考へても仕方ありませんよ。とりあえずは戻つて一息ついてからにしましょう」

よくもまあ人一人目の前で殺されたというのにこんな風に冷静でいられるものだ。自分含めて。現実世界で人が死ぬとやるせない気持ちになるが、こいつの世界はどうも現実味が薄れる。その反動で朝起きたらまた頭がモヤモヤするんだらうけど。みんな同じことを思つてているのだろう。

それ以降、俺達は宿に到着するまで終始無言になつていた。

ほぼ同時刻。

宿屋アートマーの一室にカーテンの隙間から外を覗き込む男がいた。銀色の甲冑に身を包み、黒い短髪の一見爽やかな剣士。彼は一通り外の状況を確認すると、緊張を解くかのように胸を撫で下ろし、窓から目を離して木製の椅子に座り込む。

「何だか……とんでもないことになりましたね……」

彼の目先にいたのは茶褐色の体毛に身を包んだ獣戦士。雄々しい体格とは裏腹に彼の体は縮こまり、ベッドに腰掛けながら軽く震えてすらいた。

「『じめんなさい』YASUさん…… 私一人で逃げ出したりなんかして……」

獣戦士から出る声は、顔のイメージ通りに低く野太いものであつたが、しゃべり方は弱々しく、そして女々しいものであつた。そのあまりのアンバランスさに軽く戸惑いつつも、YASUは田の前の仲間を何とかしてなだめようとしていた。

「いえ、あの場から逃げたのはPohn太さんだけでは無いです。それに私だってあなたについて行く形になりましたからね。……あんなことが田の前で起こったなら誰だって逃げ出しちゃりますよ。」

YASUは軽く笑つてみせるが、すぐに逆効果だと気づき、口を閉じる。

あの惨劇。

彼らの頭上を鋭い衝撃が走り、眼前に立っていた人物の額を直撃。矢は男の頭部を易々と通り抜け、辺りには赤黒い脳漿が飛び散り、男はそのまま物言わぬ肉塊と化してしまつた。

この間わずか数十秒。しかし、彼らにはその時の映像がコマ送りで頭の中に焼き付けられていた。

「この世界で死んだら現実でも死ぬって……本当、でしょうか……？」

「… P o n 太が震えるような声で言ひ。

「… 私には分かりませんが、現実で怪死事件が起つてているのは事実ですし、この事が本当に原因なら全ての説明がつきます… シエルさんも言つてることですし…」

もしも、これがただの夢でこっちの世界でどんな悲惨な死に方を迎えたとしても、現実では何事も無かつたかのように朝を迎える可能性も… それは淡い期待に過ぎなかつた。

彼らは始めからいきなり情報を与えられ過ぎた。自分自身で身を持つて知つた情報がほとんど無い。現実で目が覚めたら元の世界に戻れるという救いのある話でさえ、完全に信用する事が出来ないでいるのだ。ただただ、今後の不安だけが彼らの頭を支配していた。

「 P o n 太さん、私は思つんですが… やはり今はシエルさん達と協力した方がいいと思います。あの集会を襲つて来た人達の動機もまだ明らかではありませんし… またいつ襲つて来るかも分かりませんからね…」

「… 組もうとしたから襲つて来たんじゃないですか？」

「それだと逆に我々が組むのを恐れている、という捉え方も出来ます。明確な動機は解りませんが、このまま一人でいると安全という保証もないんですよ。だったら、まだこの世界に慣れている人達と一緒にいた方が…」

組んだ方がいいのか、そのままの方がいいのか。どちらとも言ひ切れない。今は不確かな考えを積み上げることしか出来ない。ただ信じられるのは目の前で起きる現実のみ。

「… そうですね。大勢とは言わないまでも、せめてシエルさんとは
…」

P O N太は力なく答えるが、先程の震えたような声ではなかつた。
「ええ、決して長い時間ではないんですけど、今まで一緒にやつて來
た仲ですから」

P O N太の後押しを受けて、Y A S Uの言葉にも勢いがこもる。
ようやく彼本来の雰囲気が戻つて来たようであつた。

「よし！ そうと決まれば、早速でもシエルさんを探したい所です
が…」

「どうやって探すんですか？」

Y A S Uは少し考へた後、すぐに何かをひらめいたかのように頷
く。

「確かに上の階は大人數で泊まる部屋でしょ？ もしかしたら彼ら
もこここの宿屋を利用するかもしれません。…いやゲーム内のこの町
の宿屋はここだけですから可能性は結構高いですよ。入る時に名簿
に名前を書きましたよね？ そこから割り出せるかもしれません」

「別の名前で泊まっていたら…？ 現に私は偽名使いましたし…」

「あー…… ま、まあ、可能性は無きにしありすですよー。早速
他の人が見れるか調べて来ますー！」

あくまでも前向きなYASUを見て、思わずPon太も笑みがこぼれる。

「本当に助かったわ…… YASUさんがいてくれて…… 自分一人だつたら、きっと今頃パニックでずっと震えてたと思う……」

「Pon太さん…… 女性なんですね？」

Pon太は少し険しさの取れた顔でゆっくり頷く。

自分はまだ同じ男の体だからいいが、その獣の体、しかも の肉体では色々と不便というか、気持ちが悪いだろうとYASUは気の毒に思った。低く野太い声で女口調というのも滑稽であるが、それ以上に別の人間を演じるのが大変そうだと同情を禁じ得ない。

「でもYASUさんはかりに頼つていられないわ。私も、シエルさん達の言う通り朝になつて元の世界に戻れたら、マスクミにこの事を伝えよつと思つの」

「マスクミですか…… 確かに世間は変死事件が多発してゐるし、証拠が無くとも話題に取り上げて貰えれば状況が変わつてくると思いますが…… 信じ貰えるでしょうか？ そもそも既に他の皆さんがあらわれているみたいですし」

「報道側に知り合いがいるのよ。彼なら私の言う事はある程度信じてくれると思う。証拠は掴めなくともゴシップにでもなれば……」

YASUは大きく頷く。

この事態を何とかするにしても、取り込まれた人間だけでは人数

が少なすぎる。まずは現実の世界の人達にこの状況を知つてもらえば、「この世界に取り込まれていらない味方」を作ることが出来るかもしれない。

「それは妙案ですよ」

「でも、まずは元の世界に戻らなきゃ…」

「そ、そ、うですね…」

現実世界での行動方針は決まつたとはいえ、急に手持ち無沙汰になつてしまいYASUは少し落ち着かなくなる。部屋は一人用にしては割と広いため窮屈感こそ無いが、男女がテレビも何も無い空間に二人というのは互いに少し気まずさを感じさせた。

やがて少し居たまくなつたのか、YASUは再び立ち上がり入り口の方に向かう。

「…」ここで、このままじつと待つておくのもなんですし、今からフロントで客が確認出来ないか見ていきます

「大丈夫ですか？」

「宿の中を少し見て回るだけですよ。すぐに戻つてきます。あ、でも一応鍵は閉めてくださいね」

そう言つて微笑みながらYASUは部屋を出て行く。

部屋に一人残されたPohn太は、ドアの鍵を閉めた後、大きく息をつきベッドに倒れ込んだ。手や頬をいくら力任せにつねつてみても、夢から覚める気配は一向にない。股をまさぐると、現実の自分

には無い物が付いていて強い戸惑いを覚える。こんなことを続けて
いる訳にはいかないと、すぐに手を頭の後ろに回し、仰向けの姿勢
でぼんやり天井を眺める。

（シェルさん達が言つていたように、本当にこの世界が原因で現実
の人間が死んでいるとしたら… 悪用する人が出るのは当然ね。
でも…私はそんなこと…）

ローナ太は、いや、白石由貴子は「」普通の専業主婦であつた。
幸い男運には恵まれ、給料のいい新聞社に勤める男と結婚する事が
出来た。夫婦仲も割と円満、姑問題も特になく、小学生の息子も大
人しい。彼女はそれなりに、だが、何か満たされない生活を送つて
いた。それを埋めるかの如く家事の合間に始めたネットゲームだが、
いつの間にか彼女の生活の一部となっていた。30過ぎになつてよ
うやく日々の楽しみを見つけた矢先の出来事である。

（「」ことが外に漏れれば大騒ぎになるでしょうね。ちょうどあの
人もほどほどに正義感はあるし。これで犯人がわかつたら… 表彰
ものかしら？ いや、下手すれば私も変に疑われるかもしれないわ
ね… どちらにせよ、ゲームで死ぬなんて馬鹿馬鹿しいわ…）

自分が折角見つけたささやかな楽しみ。面倒くさい御近所付き合
いなど忘れ、素性を隠して外の人とふれあえる機会。それを邪魔す
るなんてとんでもない。ゲームの中の住人に慣れるなんてまるで夢
のような話ではあるが。

そんなことを考えていると、部屋の戸を開ける音が聞こえる。

（誰…？）

POH太は思わず身構えて武器に手をかけた。

『POH太さん？ 私です』

ドアのノックの主はYASUであった。POH太は肩の力が一気に抜けた感覚を覚えた。

「YASUさん、どうでした？」

YASUはその間に答える間も無く、ややばつの悪そつな表情を浮かべながら部屋の中に入つて行く。何やら顔をキョロキョロさせて何かを探していくようにも見えた。

「一体でどうしたんですか？」

YASUは腰元でベッドの下も探し、顎に手をかけて何やら考えるような仕草を見せる。

「トに行つたついでに何か買おうと思ったんですが、財布を忘れてしまつたみたいで… どこに置いたかな… もしかして落としたのかも…」

「？ どんなものですか？ 私も探ししますけど…」

POH太も布団をひっくり返して手伝おうとする。YASUは生返事をしながら淡々と自分の荷物の中身を出していく。

「そういえばPOH太さん… 報道関係に知り合いがいるつておっしゃつてましたけど、本当に信用なんてしまりますかね…？ やっぱり少し難しそうな気もしますが…」

つい先程まで手を上げて賞賛していたのに、YASUは急に訝しげな口調になる。

「大丈夫ですよ。実は私の夫の事なんです。名前は出せませんが、ある新聞社の報道副部長で……最近の怪死事件のことも凄く気にしてたから、紙面には載せれなくとも裏で調べて貰う事が出来るかも。向こうも今までお手上げ状態でしたし……」

「なるほど」

瞬間、人の熱が消えたような声に、Pon太は違和感を覚えた。

彼女の本能が得体の知れないものを感じ取り、男の後ろ姿を凝視する。YASUは「あつたあつた」とゆっくりと財布らしき袋を取り出して、にこやかに振り向いて立ち上がる。その表情を見てやっぱり自分の気のせいいか？と、ほつとした瞬間。

「…………え？」

ふつ、と皿の前の男の姿が消える。何拍か置いて自分の胸の衝撃に気づく。

「あ…………？」

男は自分の皿下にいた。彼が右手を引くと、赤黒い液体のついたナイフが彼女の眼前に晒される。そして、遅れて彼女の痛覚が起動する。

「う…………あ…………？」

息が、吸えなくなる。

自分の胸から次々に血液が噴出し、思わず両手を当てる。

「夫の稼いだ金でのうつと生活し、自分はネトゲ三昧か。いーね、
主婦つて奴は」

目の前の男から、嫌悪感たっぷりの見下したような低い声が叩きつけられる。

「…………？」

もはやそんな言葉すらも彼女の耳には届かなくなっていた。床に蹲つたまま、声すら出せない。息をしようと気管に次々に血液が流れ込んで空気をせき止める。口からも血が漏れ、乞う田で男を見るが軽く足蹴りされる。

(なん、で?)

「キメエんだよ、ババア」

今度は男の剣が彼女の脳天に振り下ろされ、部屋の中に鈍い音が響く。頭蓋骨に刀身が引っかかり、それを引き抜こうと変に動かしてせいで、更に頭部は醜く歪み脳の破片が引き裂かれたように辺りに散らばった。

「うえっ…ま、まあ、現実では平和的に病氣で死ぬだらうしな…」

男は足元の血まみれの剣をその辺に適当に放り投げ、血まみれの服装のまま急いで部屋を出る。ちょうど廊下を通りすがっていた清

掃員に何事かとこいつで見られたが、彼女を突き飛ばしそのまま便所へと駆けこんだ。

「あ……YASUさん？」

宿屋の受付でちょうど冒険者達が顔を合わせる。男はほっとした表情で、名前を読んだ魔法使いの少女を迎えた。

「シールさん！ よかった！ ……あ、いや、すみません。勝手にあの場から逃げ出したりして……」

申し訳なさそうにYASUは頭を下げる。冒険者の戦闘にいた×ぽんもあの状況なら仕方ないと返す。

「本当に身勝手な頼みだとはわかつていますが、やつぱりあなた達同行させてもらえませんか？」

×ぽんはシールのほつを振り返ると、彼が頷くのを確認してYASUに握手を求める。

「やつぱりやーゆーもんなの？」

後ろにいたAseliaが小声でサイトに問いかけるが、彼も目を瞑りながら軽く頷いた。

「本当に……ありがとうございます。……いりこちやられない、実

はP〇〇太さんも一緒なんですよ。彼女も呼んで来なきや」「

一行はまた少しづつ人が集まって来そうだと、やや複雑な気持ちの入り交じった安堵を覚えながら、彼の部屋へと向かった。

36話 宣戦布告といつやつですか（後書き）

話の途中での人称変更はやりたくなかったのですが……おれ
これが一人称主体の最大の欠点ですね……

【番外編2】俺の知らない所で

それは衝撃的な集会襲撃事件の夜のこと。

アカシックドミニネーターの世界における西部ギヤドラクの町。まだクエストもほとんど実装されておらず、冒險者達にはあまり馴染みのない町であった。

その住宅街の一角に古ぼけた小さな店がある。唯一真新しい看板には工房と書かれてあるが店主はほとんど店先におらず、本当に商売になつていてるのか疑しい。たまに夜遅くまで灯りをつけたまま店が空いている時があるらしいが、これは単に店主が消し忘れているだけだと。近辺の住人からも少し変わった人が住んでいるともっぱら世間話のタネになっている。

この日の晩は店先はちゃんと閉められており、何事もない平和な夜であった……が。

店の前に背の高い男が立っていた。体はやや痩せ形、服装から冒険者だと分かるがそれにしても軽装過ぎる。服飾装備において金属が占める面積は非常に少なく、また目立つた武器のような物も持っているようには見えない。短い金髪の上にはバンダナを巻き、余計なものを一切晒さないその装備。判り易いくらいに盗賊であった。

辺りは人通りが少なく静まり返つており、店の前で何かを確認しきを掻いている男を見て咎めるような者はいない。傍から見たら今にも盗みに入ろうとする姿だというのに。

だが、そんな予想を裏切るかのように男は店のドアをノックする。軽く、ではない。ノックというよりは叩くという表現の方が近いかもしれない。木製のドアが鈍い音を鳴らすが、店主が出てくる気配

は一向に無い。こんなことを繰り返すこと10分。

男はとつとう痺れを切らしたのが腰に身につけている道具袋から、針金の様な物を取り出し、ドアの鍵穴に差し込む。流石は本職とも言つべきか、ものの数十秒もしないうちに鍵は開いた。

「入るぞー」

ピッキング行為をやつておきながら挨拶、おまけにドアを内側からノックしながら堂々と男は店の中に入つて行く。

店の中は灯りが付いておらず、時折床に落ちているガラクタのようないに男は何度か足を取られそうになる。だがすぐに目が慣れただようで、男は灯りを点けることもなく、家中をひょいひょいと回つて行く。部屋に入つても周りをキヨロキヨロ見渡すだけで、物を取ろうとする気配は感じられない。

やがて、僅かに光が漏れている地下への階段を見つける。男は軽く頷き足音一つ立てず、階段を下りていった。

「よひ

「……Gillyか。よくここがわかつたな…」

階段を下りた先は何やらガラクタの山。しかしその空間は下手すれば上の坪面積よりも広いかもしない。ガラクタの奥には首に手ぬぐいを巻いた職人風の若い男が座っていた。

彼は突然の来訪者の顔を見ると少し肩を落とし、再び周辺に散らばっている工具を取り、目の前のガラクタをいじり始める。

「実際苦労したぜ、あんたを見つけるのに5日もかかったしよ。ま

さか自分で工房開いていふとはな……」んなシステムもこのゲームにはあるのか？」

「いや、これは俺がこいつの世界に来て譲り受けたものだ……」

G.i.l.l.yは曰だけで男の了解を確認し、適当に丈夫そうなガラクタの上に腰をかける。

「で？ 何の用だ」

「決まつてゐるだろ。この世界についてだ。お前なら色々知つてそうだと思つてな」

G.i.l.l.yは腰の道具袋から紙巻煙草を取り出し口にくわえる。

「止めてくれ。」J.J.には引火性のブツもある

「…そりや失礼」

既に手に取つていたマッチを袋に戻し、火の付いていない煙草をくわえたままG.i.l.l.yは体勢を低めた。

「色々聞きたい」と言つてたな。何で俺なんだ

「そりやなんてつたつて、あんた製作側の人間だろ？ ミノルさんよ

ミノルと呼ばれた男は手を止め、そのまま手元のガラクタを見つめながら無言になる。

「戦闘では全く役に立たないクリエイターなんて職業をここまでレベル上げして、おまけにアイテムの内部修正値まで知ってる時点でなあー」

Gillyの視線が部屋の中を泳ぐ。

「…ふう、製作側の人間なのは認める。だが、俺はただのデバッグ作業のアルバイトだ。『会社側の人間』ではない。当然この現象についても何も聞かされていない」

「ふーん？　じゃあ会社の人間はこの事を知つてそうなのか？」

「既にバイトの何人かが申し出ている。だが向こうは知らぬ存ぜぬだ」

「……」

Gillyの視線が止まる。ミノルはGillyの手元を監視するようじっと見つめる。

「ただ…　俺と同じアルバイトの奴も何人か姿を消している…ついでに、言つなら会社側のデバッガーもだ」

「同じ製作側でも容赦しないってか？」

「いや…　そもそも作り手も本当に気づいてないという可能性もある」

Gillyもミノルの視線に気づき、煙草を口から飛ばし腕組む。

「デバッグの仕事つて会社に泊まり込みとかでするんじゃないのか？」

「もちろん、現に俺はそつだ。だが、一般家庭のサーバー状態やプレイヤーの生の意見も聞くということで外部のバイトも何人かいる。今のところ、会社の中で死んだ人間はない：会社側のデバッグガードもちようじ家に帰つてから急に出勤してこなくなつたしな」

「んじゃ、内部で人間が死ねば向こうも信じてくれるってことだな」

次の瞬間、二人は己の「獲物」を構え互いに向け合つ。

Gilliyは小型のボウガン。ミノルは一見ガラクタのようだが、銃ともとれる代物。

「…冗談はよせ、Gilliy

「俺としては冗談のつもりなんだがな。ただし、返答によつてはつかり手が滑つちまうか、も」

シーフとクリエイター。互いに能力値は戦闘専門の4職業には遠く及ばない。互いの武器が発射されれば、ただでは済まないだろう。その事もまたお互いの承知の上であった。

「…言つておくが、俺は本当に何も知らされていない。俺が死んだところで何か解決するとは思わない事だ」

「向こうが知つていようがいまいが『脅し』くらいにはなる」

Gilliyは冷たくも重い声でそう言い放つ。彼のボウガンを握

る手は微塵の震えもなかつた。それに対してミノルの獲物は銃口が定まらず、必死に狙いを捉えようとしているのが見え見えであった。

「……」

「……」

互いに無言。物音一つ無い地下室。

地下の湿気もあつてか、ミノルの額と手は次第に汗ばみ始めていた。次第に息も隠しきれないほど荒くなつていき、銃のぶれも目に見えて大きくなつていいく。G·i·l·l·yの引き金を引く指と銃の狙い両方に気を向けねばならず、田の動きも落ち着かなくなつていいく。

「…[冗談もほびほび]にしないと… 撃つぞ… 本当に…！」

「どうか、じゃあ止める」

G·i·l·l·yは鼻で笑いながらあつけらかんとボウガン下げる。数秒遅れてミノルも銃を下し、大きく息をつく。

「お前が何も知らないのは本当みたいだしな。もし知っていたら、何の躊躇も無く俺を撃つてくるはずだ」

「つたく…！」

G·i·l·l·yはミノルの足元にボウガンを放り投げる。それを見てミノルはまた一つ大きな溜息をつき頭を垂れる。

「お前がこっちの世界で他のプレイヤーに干渉しようとしたい気持ちはよく解かる。なんたって口クな戦闘手段がないからな」

「ああ…互いにな」

彼らがパーティーを組もうとしなかったのは、単に人を信用できなかつたからだけではない。もしもの時、不測の事態が起きた時に身体能力の差で大きく後れを取るからである。誰かが裏切るにしろ、何者かに襲われるかにしろ、真っ先に狙われる、やられるのは自分だと考えた上での単独行動であった。

「知ってるか？ 今日、町の広場で100人規模の集会があつたらしいぜ？ みんなで協力してこの状況をなんとかしましょうってな

「小耳に挟んではいる」

「んで、何者かが集会の主催者を大勢の目の前でぶつ殺した、と」

「…そいつは初耳だ」

額と手の汗をぬぐいながらミノルは答える。

「そこで一つ尋ねたいんだが、製作側のデバッガ―は何人いる？」

「社員が3人いたが、1人おそらく死んで今は2人… 会社に泊まり込みのアルバイトは俺ともう1人… 外のバイトは5～6人くらいいたと思うが果たして何人生きている事やら…」

「そんだけいて未だにこの状況が知れ渡っていないのも変な感じだ

な

製作側の人間は多くて10人程度。それだけの数がこの世界に来ているとなると、誰か1人くらいは進言、もしくは他のプレイヤーに名乗り出てもいいものである。

「社員の2人は他の仕事と兼任してるからレベルはそこまで高くない。恐らく30もいってないと思う」

「つてことは、今この状況を知っているのはバイトだけか…？」

「俺と同じく寝泊まりしている奴は間違いなく取り込まれている。俺に必死に聞いてきたくらいだしな。俺は知らない振りを通しているが」

Gillyは再び腕を組んで考え込む。

「Gilly、そんな事を知つてどうする？　まさかこの現象を止めようとかするつもりか？」

「…出来たら、それが一番いいんだろうけど。俺自身はこの現象がどうやって引き起こされているかのほうが気になるけどな」

ミノルの問いに、Gillyは不敵な口調で答える。

「知った所で俺達のような連中が止められるなんて思わない事だ。…現に止めたくない、止まつて欲しくないと思う人間も表れ始めている…」

「…」

ミノルはゆっくり頷き、頭を宙に泳がせる。

「俺はこっちに来てから何だか余計に現実を見せつけられた感じだよ…」

「何だよ急に」

「結局、人の上に立つて好き放題やつてる人間も、下で苦しい生活を強いられて、不満を言つている人間も、本質的には何も変わらないってこと」

「…そうか？」

「同じだよ。能力や権力を持ってば誰だって好き放題やる、逆に無かつたら苦しんで不平不満や愚痴を口にする。人の立ち位置が変わろうとも世の中は何も変わらない。努力なんてものは、その立場を入れ替えるための物でしかない… 世の中が変わるとかはその枠組みの中しかありえないってさ」

「……」

「だから、俺個人はこんな世界もあつていいと思う。現実での弱者が強者に対して好き放題できる世界。現実では会社の部下を首を簡単に飛ばせる上司も、こっちの世界では部下に簡単に首を飛ばされる… いや、もっと多くの人を取り込んで欲しいくらいだ。そして思い知つて欲しい。自分達は、どいつもこいつも同じ性分の人間だつて事をさ」

「御託は結構だが、それもお前個人の一思想に過ぎない。そして、

他の人間がそれに付を合つてやる道理も無い」

「あ…それもそうか…」

G.i.l.l.yに批判されたつても、ミノルは自分の言いたい事を言い切つたのか妙に清々しそうな表情であった。

「まあ、お前がこの世界を何とかしたいなら出来る限りのことは協力するよ。俺だつていつ死ぬとも限らんわけだしな。但し、あくまでも出来る限りだ。この身を危険に晒すようなことは一切するつもりはない」

「それでいい、十分ありがてえよ。互にこの世界では田舎者同士、上辺だけでも仲良くなつてこいつや」

G.i.l.l.yも意地の悪い笑みを浮かべる。

「んじゃ、ついでにもう少し教えて欲しい事があるんだが」

「すい、とG.i.l.l.yが体を前に倒すと同時に、ミノルが手を前に出して制止する。

「それは構わないが、その前にじぶんも一つ聞きたい」

「何だよ?」

「G.i.l.l.y、お前は一体何者だ?」

そんなことか、と言わんばかりにG.i.l.l.yは鼻息をつく。

「別に。わざわざ言つよつたもんでも。ただのゲーム好きだよ」

「『ただの』じゃ、ないだろ。さつきのボウガンを構えた時の全く震えを見せない手といい、そんな駆け引きを行える度胸といい…もし俺があそこで銃を撃つてたらどうするつもりだったんだ?」

「終わった事をいくら話しても仕方ないだろ?」

Gillyは両手を上げるが、それでもミノルは引き下がらなかつた。

「いや、いくらこっちの体の方が身体能力が高いと言つても、精神はそのまま、中身は一般人なんだ。俺は高校時代ライフル射撃をやつてたから解かる。精神のブレは何かを構えている時のような、体本来の重心が崩れた時に表に出でくるもんなんだ。『動かない時』なら特にな」

「なるほど、道理で震えている割には銃の構え自体はサマになつていたわけだ」「

「話しせを逸らすな…! というかそんな事を言つてる時点で…」

今にも投げつけんとばかりに工具を握り締めるミノルの姿を見て、はいはいとGillyは余裕を見せながらなだめる。

「ま、確かに俺は一般人じゃないかもしれんが…」

「少なくともそのメンタルはスポーツ選手とかのそれじゃないな。警察…軍人…はたまたヤクザ…何の経験も無しに、微塵の動搖を見せずに人と銃を向け会えるなんて一種の異常者だろ」

「はは、その可能性もあるかもな」

ミノルの物言いも別に気にしてないと言わんばかりに、G.I.L.L.Yは笑う。だが、すぐに顔付きが再度真面目なものになる。

「悪いがこの話はここまでだ。その侘びと情報提供の礼と言ひちやあ何だが、お前にも大事な話を教えてやるつと思つ」

「…何だ？」

少し警戒色を出しながらミノルは耳を傾ける。

「この現象はいつまでも続くもんじゃない。お前も下手な事をせずに大人しくしていたらそのうち抜け出せるだろつよ、多分」

「…どうしてそんなことが言える?」

G.I.L.L.Yは軽く勿体ぶりながら間を置いて答える。

「前例があるからな」

ミノルは目を見開いて思わず身を乗り出した。

【番外編2】俺の知らない所で（後書き）

番外編その2。

G.I.I.I.さん主体のお話でした。

会話が多くなると途端に情景描写がおざなりになってしまいますね。..

どうでもいいですが、筆者も一応ライフル射撃経験者です。

立射限定ですけど、酷い時は心臓の鼓動で銃身ブレますからね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9899w/>

アカシックドミネーター

2011年11月17日21時39分発行